

Oracle® Developer Suite

リリース・ノート

10g (9.0.4) for Windows and UNIX

部品番号 : B13573-06

2004 年 12 月

Oracle Developer Suite リリース・ノート, 10g (9.0.4) for Windows and UNIX

部品番号 : B13573-06

原本名 : Oracle Developer Suite Release Notes 10g (9.0.4) for Windows, Linux, Solaris, and HP-UX

原本部品番号 : B10668-05

原著者 : Joe Malin

原協力者 : Carolyn Bruse, Orlando Cordero, Craig DeNamur, Kerstin Goldsmith, Kurt Heiss, Christine Jacobs, Madhavi Jain, Derek Jones, Thomas Jose, Lypp-tek Khoo-Ellis, Mike Moon, Kathryn Munn, Andy Page, Frank Rovitto, Theresa Robertson, Jeremy Williams, Martin Wykes

Copyright © 2003, 2004 Oracle Corporation. All rights reserved.

制限付権利の説明

このプログラム（ソフトウェアおよびドキュメントを含む）には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段（電子的または機械的）、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation, and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle Corporation, 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空産業、大量輸送、医療あるいはその他の危険が伴うアプリケーションへの用途を目的としておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連会社の登録商標です。その他の名称は、Oracle Corporation または各社が所有する商標または登録商標です。

目次

はじめに	xiii
対象読者	xiv
このマニュアルの構成	xiv
関連ドキュメント	xv
表記規則	xv

第 I 部

1 日本語環境での使用上の注意

既知の障害および注意事項	1-2
コンポーネントに関する問題	1-2
Oracle9i JDeveloper	1-2
Oracle Reports Developer	1-4
Oracle Designer	1-7
Oracle Software Configuration Manager	1-9
CD Pack に同梱されるパッチの適用について	1-11

第 II 部 製品リリース・ノート

2 製品の名称

Windows のコンポーネント	2-2
UNIX のコンポーネント	2-2

3 動作要件

動作要件	3-2
------------	-----

4 既知の問題

インストール前の問題	4-2
Oracle Business Intelligence Beans	4-2
Oracle Warehouse Builder 10g	4-2
Oracle9i Warehouse Builder	4-2
インストールの問題	4-3
インストール後の問題	4-3
Java バージョン	4-3
削除の問題	4-3
プラットフォーム固有の問題	4-3
構成の問題	4-3
管理の問題	4-3

第 III 部 コンポーネントのリリース・ノート

5 Oracle9i JDeveloper

一般的な問題とその対処方法	5-2
概要	5-2
Oracle9i リリース 2 (9.2) のサポート	5-2
本リリースにおける制限事項	5-3
OC4J へのデプロイ	5-3
Oracle JDeveloper 9.0.4 に含まれる OC4J バージョン	5-3
OC4J のメモリー要件	5-4
他のアプリケーション・サーバーへのデプロイ	5-4
Oracle 以外のアプリケーション・サーバーにデプロイされた UNIX Web アプリケーション (BC4J JSP Admin ページなど) の実行に関する問題 (2577293)	5-4
Apache Tomcat 4.1 への Web アプリケーションのデプロイ	5-5
Tomcat にデプロイした JSP アプリケーションの問題 (2615358)	5-6
XSQL Page の実行 (1552039)	5-6
WebLogic へのデプロイ時の型の非互換	5-6
WebLogic 6.1 における XML ファイルの 'Windows-1252' エンコーディングの問題	5-7
CORBA によって実行時に JDK 1.3 が要求される (2685103)	5-7
BC4J に関する問題	5-8

SQL スタイルで SQL92、型マップで Java を選択した場合の注意 (2693168)	5-8
902 プロジェクトの VO または属性名に \$ が含まれていると移行できない (2701773)	5-8
JDeveloper 9.0.4 の *.jpr ファイルの形式には 9.0.3 との下位互換性がない (2682921)	5-8
空のエクスポート・インターフェースを含む BC4J プロジェクトの移行 (2676186)	5-8
BC4J エンティティ Facade のベースとなる Entity Bean の名前の変更 (2587916)	5-9
BC4J エンティティ Facade での Oracle データベースの SYSDATE の取得 (2525437)	5-9
Bean タイプをリモートからローカルへ変更しても、web.xml の <ejb-ref> が更新されない (2589997)	5-9
BC4J エンティティ Faced と BC4J JSP でマルチメディア・コンテンツをアップロードする アプリケーションを作成する際の注意 (2887647)	5-9
移行に関するドキュメントでの qView から getRowSet への変更 (2723075)	5-9
ドキュメントが BC4J の「ウィザード」を参照している	5-10
VB バインド・モードにおいて OC4J で BC4J JSP を実行できない (2594776)	5-10
Business Component Browser でヘルプが利用できないときがある	5-10
jbo.debugoutput プロパティで、file という値を設定できる	5-10
EJB に関する問題	5-11
埋め込み OC4J サーバーによる EJB 実行時の注意 (2096700、2591173)	5-11
JClient に関する問題	5-11
JTree にバインドされたデータ値の編集 (2061405)	5-11
EJB モードの JClient アプリケーションの Java Web Start 1.2 による実行 (2699458)	5-11
MIME タイプの問題のために IE 5.5 で Webstart が起動しない (2573655)	5-11
JSpinner コントロールがサポートするデータ型 (2738858)	5-12
ソース・コントロール・サポートに関する問題	5-12
Oracle SCM: Oracle9i SCM RON とは共有されないフォルダ・マッピング	5-12
Oracle SCM: JDeveloper 上で起動される VHV からの操作	5-12
Oracle SCM: Oracle Repository 6i への接続	5-12
モデル化に関する問題：一般	5-13
モデル要素およびダイアグラムのファイルにおけるソース・コントロール操作の実行 (2211605)	5-13
インストール・ディレクトリの名前にスペースが含まれている場合の起動時例外 (2709528)	5-13
モデル化に関する問題：Java クラス、BC4J または EJB コンポーネントのモデル化	5-13
モデル化された Java クラスの削除 (2706800)	5-13
Web サービスに関する問題	5-13
モデル化された Web サービスのメソッド名の変更 (2702659)	5-13
SOAP Web サービスが新規セッションを開始しない (2218102)	5-14
OC4J での JMS Web サービスの使用	5-14
送信操作と受信操作を使用する JMS Web サービスの作成	5-14

JDK 1.4 での PL/SQL Web サービス・ジェネレータの実行	5-14
生成されたスタブから Web サービスをコールするときのランタイム・エラー (2389203)	5-15
PL/SQL および JMS Web サービスのモデル化 (2466833)	5-15
オーバーロードされたメソッドを持つ .NET Web サービスに対するスタブの生成 (2689939)	5-15
JDeveloper のインストール・パスにスペースがある場合に生成された Web サービス・スタブ (3068701)	5-16
他の WSDL ファイルを参照する WSDL ファイルに対するスタブの生成 (2627242)	5-16
その他の問題	5-16
PL/SQL のコンパイル・エラーが表示されない (2688533)	5-16
列の使用可能な値に対して、表示順序の指定が必要 (2717508)	5-16
Toystore デモに含まれる古い bc4jstruts.jar ファイル	5-17
コンテキスト・メニュー「ソースを表示」が動作しなくなる (3146584)	5-17
プラットフォーム固有の問題および対処方法	5-17
UNIX プラットフォームの問題および対処方法	5-17
UNIX プラットフォームの全般的な問題および対処方法	5-17
Solaris 固有の問題および対処方法	5-18
構成に関する問題および対処方法	5-19
管理に関する問題および対処方法	5-19
ドキュメントの記載内容の誤り	5-19
移行に関するドキュメントでの qView から getRowSet への変更 (2723075)	5-19
ドキュメントが BC4J の「ウィザード」を参照している	5-19

6 Oracle Business Intelligence Beans

概要	6-2
一般的な問題とその対処方法	6-2
チュートリアルとサンプル	6-2
QueryBuilder と問合せ	6-3
プレゼンテーション	6-3
BI Beans カタログ	6-4
一般的なデプロイの問題	6-7
HTML クライアント・アプリケーションをデプロイするための構成手順	6-7
OC4J へのデプロイ	6-7
OC4J にデプロイするアプリケーションの移行	6-7
Tomcat へのデプロイ	6-8
JBoss へのデプロイ	6-8

Java Web Start へのデプロイ	6-8
国際化の問題	6-9
アクセシビリティの制限	6-10
プラットフォーム固有の問題および対処方法	6-11
構成に関する問題および対処方法	6-11
JDBC ドライバ	6-11
ドライバの自動アップグレード	6-11
ドライバの手動アップグレード	6-12
元のドライバへのリストア	6-12
Thin ドライバから OCI ドライバへの変更	6-13
BI Beans 構成診断ユーティリティ	6-13
接続	6-13
管理に関する問題および対処方法	6-14
ドキュメントの記載内容の誤り	6-14

7 Oracle Discoverer Administrator

一般的な問題とその対処方法	7-2
Oracle Discoverer 9.0.4 をインストールした後に 9.0.2 を起動すると表示される エラー・メッセージ「要求されたファイルが見つかりません。: dcmresus.msb」(3125060)	7-2
Oracle Discoverer Administrator に異機種間データ・サービスを使用する場合に表示される ORA-3113 エラー・メッセージ (2671291)	7-3
JOB_QUEUE_INTERVAL 設定と Oracle Applications ユーザー (2883736)	7-3
Oracle Discoverer 9.0.2 で作成されたバッチ・リポジトリの更新の推奨 (2777560)	7-3
プラットフォーム固有の問題および対処方法	7-4
構成に関する問題および対処方法	7-4
管理に関する問題および対処方法	7-4
有益な情報	7-4
Oracle Discoverer 3.1 からのアップグレード	7-4
End User Layer 表の手動による編集	7-5
HWOnline ファイルの入手	7-5
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドに使用する Oracle Discoverer レジストリ変数の設定	7-5
その他の Oracle Discoverer レジストリ変数	7-6
スケジュール済ワークブックの結果スキーマに必要な権限	7-7
スケジュール済ワークブックの実行に必要なシノニム v\$parameter への SELECT 権限を 許可する方法	7-7

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の実行 (UNIX のみ)	7-9
Oracle Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF)	7-10
Oracle Warehouse Builder で使用する系統ワークブックのインストール	7-10
Discoverer ワークブック・ダンプ・ユーティリティの使用法	7-12
ドキュメントの記載内容の誤り	7-16
アイテム・クラス・ウィザード:「属性の選択」ダイアログの説明	7-16
/export (EUL オブジェクト) 例の訂正	7-17
Oracle Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを実行する構文例に 欠落している '-jar'	7-17
スケジュール・ワークブックと、Discoverer の現行リリースおよび以前のリリースとの 間の互換性	7-17
<ORACLE_HOME>%discoverer%util は、<ORACLE_HOME>%discoverer%sql	7-18

8 Oracle Discoverer Desktop

一般的な問題とその対処方法	8-2
Oracle Discoverer 9.0.4 をインストールした後に 9.0.2 を起動すると表示される エラー・メッセージ「要求されたファイルが見つかりません。: dcmresus.msb」(3125060)	8-2
プラットフォーム固有の問題および対処方法	8-3
構成に関する問題および対処方法	8-3
管理に関する問題および対処方法	8-3
有益な情報	8-3
End User Layer 表の手動による編集	8-3
スケジュール済ワークブックを実行できるユーザーの問合せのリフレッシュ	8-4
HWOnline ファイルの入手	8-4
その他の Oracle Discoverer レジストリ変数	8-4
Oracle Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF)	8-5
ドキュメントの記載内容の誤り	8-6

9 Oracle Forms Developer

一般的な問題とその対処方法	9-2
Oracle Forms 10g (9.0.4) と Oracle9i Forms の互換性	9-2
V8 モードにおける環境ハンドルとサービス・コンテキストの取得	9-2
Forms で正しく処理できないマルチバイト CLOB データ	9-2

Forms Developer の埋込みフォント	9-3
アイコン・プッシュ・ボタン	9-3
「データ・ブロック」ウィザードの制限	9-4
プラットフォーム固有の問題および対処方法	9-4
Windows プラットフォームの問題および対処方法	9-4
Oracle Forms のユーザー補助機能についての情報	9-4
Oracle Forms でのスクリーン・リーダーと Java Access Bridge の使用方法	9-4
JAWS で読み取れない Java 関連のダイアログおよびウィンドウ	9-6
PL/SQL エラー・メッセージの補助機能を読み取るための対処方法	9-6
JAWS スクリプトの場所	9-6
Graphics が 64 ビット Database に対して失敗する問題	9-7
デフォルト・カラー・パレットのカラー・リスト	9-7
プロパティ・インスペクタとナビゲータのロック・アンド・フィールドの変更	9-7
デザイン・キャプチャをクリックするとエラー FRM-18113 が発生する事象	9-7
UNIX プラットフォームの問題および対処方法	9-7
UNIX プラットフォームの全般的な問題および対処方法	9-7
UNIX 上の USER_EXIT	9-7
TK90_UNKNOWN の使用	9-9
HP-UX の問題および対処方法	9-9
構成に関する問題および対処方法	9-10
Forms と Reports の統合	9-10
Form Builder から起動できない Reports Builder (2228305)	9-10
Forms Migration Assistant: オブジェクト・ライブラリで作成されない RUN_PRODUCT (Reports) rp2rro Reports オブジェクト	9-10
ドキュメントの記載内容の誤り	9-10
Oracle Forms Developer (Builder) のオンライン・ヘルプ	9-10
フォームの実行について	9-10

10 Oracle Reports

一般的な問題とその対処方法	10-2
CGI を使用したレポート要求の実行	10-2
OLAP Server 問合せの作成	10-2
グループ別マトリックス・レポートのペーパー・デザイン・ビューへのグラフの挿入	10-2
Internet Explorer にエンコードされていない URL ストリームを含むレポートの実行	10-3
Reports Builder でサポートされない FTP と WebDAV の送信先	10-3
Oracle9i JDeveloper の統合	10-3

Oracle9i JDeveloper で JSP レポートをデバッグする際のデッドロック	10-3
Oracle9i JDeveloper で表示されないグラフ	10-3
Reports のインプロセス・サーバー	10-4
Reports サーバーに対する Graphics6i 使用のための構成	10-4
プラットフォーム固有の問題および対処方法	10-4
Windows プラットフォームの問題および対処方法	10-4
Oracle Enterprise Manager を使用した Windows サブネット上の インプロセス・サーバーの管理	10-5
JDK 1.4 での osfind の使用	10-5
Reports Builder での「スタート・ガイド」ページの起動	10-5
ハードウェアベースの左マージンのないレポートの出力	10-6
UNIX プラットフォームの問題および対処方法	10-7
UNIX プラットフォームの全般的な問題および対処方法	10-7
DISPLAY とプリンタ依存性の実装廃止	10-7
Solaris の問題および対処方法	10-8
マルチバイト環境でのグラフ・ウィザードの起動	10-8
Solaris バージョン 2.9 での印刷	10-9
HP-UX の問題および対処方法	10-9
構成に関する問題および対処方法	10-10
Reports Queue Manager を使用した管理者ログインの変更	10-10
Web ソース・ビューに正しく表示されないフォントの修正	10-10
負荷が高いマシンでの Reports Server の構成	10-11
PDF ファイルまたはプリンタへのグラフ出力のイメージ解像度の改善	10-12
Oracle Reports の Java 仮想マシンに対する値の指定	10-13
OID でのリソース作成時の Oracle Reports と Oracle Portal の統合エラーの解決	10-13
Reports Builder の Web レイアウトを実行機能	10-14
管理に関する問題および対処方法	10-15
Reports Server 情報にアクセスする Enterprise Manager の認証	10-15
OracleAS Portal でのアイテム・リンクとしてのレポートの実行	10-16
ドキュメントの記載内容の誤り	10-17
Oracle Reports における動的な環境の切替え	10-17
最新ではないスクリーンショット	10-17

11 Oracle Designer

一般的な問題とその対処方法	11-2
インストール	11-2

Oracle Designer/SCM の 9.0.4 用パッチセット	11-2
多言語環境における日本語	11-2
NLS 操作のためのリポジトリ設定	11-2
コア・オブジェクトのみをサポートするリポジトリに対する Oracle Designer オブジェクトのサポートの有効化	11-3
システム・モデリングと設計ツール	11-4
Database Design Transformer	11-9
Form Generator	11-10
Web PL/SQL Generator	11-12
Report Generator、デザイン・キャプチャおよびアプリケーション・ロジック・キャプチャ	11-14
Server Generator	11-16
Repository Reports	11-17
Matrix Diagrammer	11-18
アクセシビリティ	11-18
その他の問題および制限事項	11-19
プラットフォーム固有の問題および対処方法	11-20
構成に関する問題および対処方法	11-20
管理に関する問題および対処方法	11-20
ドキュメントの記載内容の誤り	11-20

12 Oracle Software Configuration Manager

一般的な問題とその対処方法	12-2
パッチセット	12-2
リポジトリを構築可能な Oracle データベース	12-2
多言語環境	12-2
API およびモデルのリファレンス・ガイド	12-2
既知の問題と制限事項	12-3
移行	12-3
SCM Java ツール	12-5
Repository Administration Utility (RAU)	12-7
Repository Object Navigator	12-8
比較ユーティリティ	12-10
マージ	12-12
Version History Viewer	12-12
Version Event Viewer	12-13
インポートとエクスポート	12-13

Dependency Manager	12-15
Command Line Tool	12-16
その他の既知の問題と制限事項	12-17
キーボード制御に関する既知の制限事項	12-20
汎用キーボード制御制限	12-20
標準外のキーボード制御	12-21
Dependency Manager	12-21
Repository Administration Utility	12-22
Repository Object Navigator	12-22
Java ツールの一般的な制限	12-24
既知の問題と対処方法	12-24
「マージ」ウィンドウ	12-24
Repository Object Navigator	12-25
その他の既知の問題と制限事項	12-25
プラットフォーム固有の問題および対処方法	12-26
Windows プラットフォームの問題および対処方法	12-26
UNIX プラットフォームの問題および対処方法	12-26
UNIX プラットフォームの全般的な問題および対処方法	12-26
Solaris の問題および対処方法	12-26
Linux の問題および対処方法	12-26
HP-UX の問題および対処方法	12-26
構成に関する問題および対処方法	12-26
管理に関する問題および対処方法	12-26
ドキュメントの記載内容の誤り	12-26

第 IV 部 その他のリリース・ノート

13 Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)

構成に関する問題および対処方法	13-2
OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当てが適切に行われない ...	13-2
ライブラリの共有と使用	13-2
無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下	13-3
EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ	13-3
起動と停止に関する考慮事項	13-4
サポートされる JDK バージョン	13-4
JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行	13-4

JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行	13-5
OC4J デモのダウンロード	13-5
JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート	13-6
パッケージに含まれないクラスを起動できない	13-6
OC4J 起動時における SAX ドライバの設定	13-7
JSP ojspc の問題	13-8
debug オプションは ojspc の出力に影響を与えない	13-8
/WEB-INF/lib や /WEB-INF/classes ディレクトリには .java ファイルを含めない	13-8
JESI タグに関するリリース・ノート	13-8
JESI タグに対する条件付き処理が不要	13-9
JESI personalize タグで一重引用符を追加	13-9
インクルードされたページ内に fragment タグを配置可能	13-9
複数の control タグまたは template タグが使用可能	13-9
template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない	13-10
明示的な ESI マークアップは JESI タグで使わない	13-10
タグ・ライブラリ・ディスクリプタは WEB-INF の下に配置	13-10
OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib に追加	13-10
ローカル・クラスを最初に検索	13-10
java.lang.ClassFormatError: (切り捨てられたクラス・ファイル)	13-11
サーブレットに関するリリース・ノート	13-12
パッケージに含まれないクラスを起動できない	13-12
開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能	13-12
<orion-web-app> の一部の属性が使用不可	13-12
EJB に関するリリース・ノート	13-13
クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性	13-13
MDB トランザクション・タイムアウト	13-13
MDB onMessage() メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放	13-14
orion-ejb-jar.xml ファイル変更時の考慮事項	13-14
EJB の静的ブロック	13-14
ping タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了	13-14
EJB に関するその他のリリース・ノート	13-16
OC4J サービスに関するリリース・ノート	13-16
Java Object Cache (JOC) に関するリリース・ノート	13-16
JOC 構成で javacache.xml を使用	13-17
DataDirect JDBC ドライバに関するリリース・ノート	13-17
DataDirect JDBC ドライバ使用時の考慮事項	13-17

DataDirect JDBC ドライバのインストール	13-18
ドキュメントの記載内容の誤り	13-18
サーブレット開発者ガイドの記載内容の誤り	13-18
OC4J 9.0.4 の JSP コンテナによる persistence-path フラグのサポート	13-18
JavaServer Pages 開発者ガイドの記載内容の誤り	13-19
mod_oc4j は OC4J プロセスを再起動しない	13-19
OC4J ユーザーズ・ガイドの記載内容の誤り	13-19
メトリック・ロード・バランシングのエンドツーエンド・テストの結果	13-19

はじめに

このドキュメントは、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) と、その機能の記載内容との相違点を要約したものです。

リリース・ノートとその他のドキュメントの最新版については、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp>) を参照してください。

対象読者

このマニュアルは、開発者、データベース管理者、および Oracle 製品のインストール作業を担当する方を対象としています。クライアントとサーバーから成るアーキテクチャや両者の関係、データベースの概念についての知識があるものとして解説しています。

このマニュアルの構成

このマニュアルは、次のような構成になっています。

第 I 部

リリース・ノート of この部では、Oracle Developer Suite 製品全般を日本語環境で使用する際の問題点を中心に記載します。

第 I 部は次の章で構成されています。

- 第 1 章「日本語環境での使用上の注意」

第 II 部「製品リリース・ノート」

リリース・ノート of この部では、Oracle Developer Suite 製品全般に関する情報を記載します。

第 II 部は次の章で構成されています。

- 第 2 章「製品の名称」
- 第 3 章「動作要件」
- 第 4 章「既知の問題」

第 III 部「コンポーネントのリリース・ノート」

リリース・ノート of この部では、Oracle Developer Suite の各コンポーネントに関する情報を記載します。

第 III 部は次の章で構成されています。

- 第 5 章「Oracle9i JDeveloper」
- 第 6 章「Oracle Business Intelligence Beans」
- 第 7 章「Oracle Discoverer Administrator」
- 第 8 章「Oracle Discoverer Desktop」
- 第 9 章「Oracle Forms Developer」
- 第 10 章「Oracle Reports」
- 第 11 章「Oracle Designer」
- 第 12 章「Oracle Software Configuration Manager」

第 IV 部「その他のリリース・ノート」

リリース・ノートのこの部では、Oracle Developer Suite とともにインストールされるサーバー・コンポーネントに関する情報を記載します。

第 IV 部は次の章で構成されています。

- 第 13 章「Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)」

関連ドキュメント

リリース・ノート、インストール関連ドキュメント、ホワイト・ペーパーまたはその他の関連ドキュメントは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) から、無償でダウンロードできます。OTN-J を使用するには、オンラインでの登録が必要です。登録は、次の Web サイトから無償で行えます。

<http://otn.oracle.co.jp/membership/>

すでに OTN-J のユーザー名およびパスワードを取得している場合は、次の URL で OTN-J Web サイトのドキュメントのセクションに直接接続できます。

<http://otn.oracle.co.jp/document/>

表記規則

本文では、次の表記規則を使用します。

規則	意味
固定幅フォントの小文字	固定幅フォントの小文字は、実行可能ファイル、ファイル名、ディレクトリ名およびユーザーが指定する要素のサンプルを示します。このような要素には、コンピュータ名およびデータベース名、ネット・サービス名および接続識別子があります。また、ユーザーが指定するデータベース・オブジェクトとデータベース構造、列名、パッケージとクラス、ユーザー名とロール、プログラム・ユニットおよびパラメータ値も含まれます。 注意： プログラム要素には、大文字と小文字を組み合わせて使用するものもあります。これらの要素は、記載されているとおりに入力してください。
太字コード	固定幅の太文字は、コマンドライン・プロンプトへの応答として入力するテキストを示します。
固定幅フォントの小文字のイタリック	固定幅フォントの小文字のイタリックは、プレースホルダまたは変数を示します。

規則	意味
固定幅フォントの大文字	固定幅フォントの大文字は、システム指定の要素を示します。このような要素には、パラメータ、権限、データ型、 Recovery Manager キーワード、 SQL キーワード、 SQL*Plus またはユーティリティ・コマンド、パッケージおよびメソッドがあります。また、システム指定の列名、データベース・オブジェクト、データベース構造、ユーザー名およびロールも含まれます。
・ ・ ・	垂直の省略記号は、例に直接関連しない複数の行が省略されていることを示します。
...	文またはコマンドに使用される水平の省略記号は、例に直接関連しない文またはコマンドの一部が省略されていることを示します。
[]	大カッコは、カッコ内の項目を任意に選択することを表します。大カッコは、入力しないでください。

第 I 部

日本語環境での使用上の注意

既知の障害および注意事項

コンポーネントに関する問題

Oracle*9i* JDeveloper

BC4J Struts JSP アプリケーション・ウィザード実行時の注意 (2888538)

BC4J Struts JSP アプリケーション・ウィザードは、struts-config.xml の既存の <message-resources> タグを削除し、かわりにデフォルト・パッケージの ApplicationResources.properties を参照するよう記述します。このため、デフォルト・パッケージ以外の ApplicationResources.properties を参照する <message-resources> タグは、ウィザード完了後に再登録する必要があります。

または、BC4J Struts JSP アプリケーション・ウィザードは空のプロジェクトで実行し、その後、必要に応じて <message-resources> タグを追加するようにしてください。

EJB Entity Bean にバインドされた BC4J プロジェクトの移行 (3099781)

EJB Entity Bean にバインドされた BC4J プロジェクトを JDeveloper 9.0.4 に移行する場合、システム・ナビゲータで EJB アプリケーション・モジュール・パッケージ・ノードのツリーを展開してください。このタイミングで、ejb-jar.xml の <ejb-local-ref> タグが正確に更新されます。

アクティブでないトランザクションがトランザクション境界を横断して維持できない (3099314)

フェイルオーバーやアプリケーション・モジュール・プーリングなどによってアプリケーション・モジュールのトランザクション状態が受動化（パッシブ）されている場合でも、そのトランザクションがコミットまたはロールバックされると、受動化された状態のログが削除されます。このため、コミットまたはロールバックの後でこれらを活性化（アクティブ）すると JBO-28039 などのエラーが発生します。

マルチバイトのアプリケーション・モジュール名における問題 (3189695)

マルチバイトを用いてアプリケーション・モジュール名を付けると、それを利用する JSP や uiXML アプリケーションで、次のようなエラーが発生します。

```
java.lang.IllegalArgumentException: Cookie name jbo.ApplicationCookie.xxxx is a reserved token
```

アプリケーション・モジュール名にはシングルバイトを使用してください。

BC4J のクライアント開発時のプロジェクトの構成 (3273558)

BC4J コンポーネントに対し、異なるタイプの複数のクライアント（たとえば JClient と BC4J JSP）を作成する場合は、それぞれ別のプロジェクトに作成することを推奨しています。

現在、JClient とその他の Web クライアント（BC4J JSP、BC4J Struts、BC4J UIX JSP など）を同一のプロジェクトに作成した場合に、JDeveloper がフリーズしたような状態になることが報告されています。

JClient アプリケーションを Java Web Start を使用してデプロイするための追加手順

JClient アプリケーションを Java Web Start を使用してデプロイするためには、いくつかの追加手順が必要です。詳細は OTN-J（Oracle Technology Network Japan）で公開されている『JClient アプリケーションの Java Web Start によるデプロイ』（<http://otn.oracle.co.jp/products/jdev/index.html>）を参照してください。

Oracle SCM: SCM ツール上の日付データの書式の設定 (1685812)

Version History Viewer、Version Event Viewer などの SCM ツール上にはチェックインに日付情報が表示されます。この日付データの書式を変更するには、次のようにします。

1. jdev/bin/repository.ora をテキスト・エディタで開きます。
2. 次のエントリを追加して、日付型データの書式を指定します。

```
repos61.date_format=YYYY-MM-DD
```

JDeveloper の埋め込みブラウザの文字化けの解消 (2670389)

JDeveloper で HTML や JSP のプレビュー、Javadoc の参照時に使用する埋め込みブラウザは、HTML ソースでのフォントの指定の方法によって、マルチバイト文字が正しく表示されないことがあります。

たとえば、次のような HTML は、マルチバイト文字が正しく表示できません。

```
<font style="font-family: Arial, Helvetica, sans-serif"> マルチバイト文字 </font>
```

この問題は、oracle_home/jdev/bin/jdev.conf で、次の行のコメントを外すことで解消されます。

```
AddVMOption -Dice.pilots.html4.ignoreNonGenericFonts=true
```

異なるバージョンの JDK の Javadoc を参照するための設定

Oracle JDeveloper には JDK 1.4.1 の Javadoc が組み込まれています。現行バージョンでは、ローカルの Javadoc を異なるバージョンの JDK のものや日本語版に変更することはできませんが、Sun の Web サイトで公開されている Javadoc を参照するように設定を変更することができます。

次の手順が必要です。

1. `oracle_home/jdev/doc/ohj/jdk14doc.jar` のファイル名を `oracle_home/jdev/doc/ohj/jdk14doc.zip` に変更します。
2. `oracle_home/jdev/doc/ohj/helpbiik.properties` を編集し、`jdk14doc.jar` の部分を `jdk14doc.zip` に変更します。
3. 「ツール」→「プロジェクトの設定」を実行し、プロジェクトの「ライブラリ」ページを開きます。
4. 「J2SE バージョン」ドロップダウン・ボックス左の「編集」をクリックします。
5. 「J2SE の編集」ダイアログで、「ドキュメント・パス」に Javadoc の URL を指定します。たとえば、JDK 1.4 の日本語版 Javadoc の場合は次のように指定します。

<http://java.sun.com/j2se/1.4/ja/docs/ja/api/index.html>

JDeveloper から起動される SQL*Plus での日本語の文字化け

JDeveloper から起動される SQL*Plus で日本語が文字化けする場合があります。これは、JDeveloper から起動される際に適切なリソースファイルを参照できていないためです。この場合、コンソールからの実行時もしくは `<JDev_Home>/jdev/bin/jdev` スクリプトに環境変数 `XAPPLRESDIR` を設定してください。

Oracle Reports Developer

マルチバイト環境における構成

マルチバイト環境で Reports を動作させるためには次の構成が必要になります。

- NLS_LANG 設定
『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』
第 18 章 18.2.1 の記述に従い、適切な値で NLS_LANG 環境変数を設定します。
- PDF 出力のための設定
『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』
第 6 章 6.5 の記述に従い、`uifont.ali` ファイルの設定を変更します。
- テンプレート・ファイルへのエンコーディング情報の追加

日本語を含む JSP レポートを作成する場合、Web ソースにキャラクタ・セットを指定する必要があります。

Reports Builder が使用するテンプレート・ファイルを編集することで、キャラクタ・セットを毎回指定する工数を削減することが可能です。Reports Builder での開発を始める前に、次の作業を行ってください。なお、次の手順内の *yourEncoding* は、Reports Builder を実行する環境に応じて適切なキャラクタ・エンコーディングを指定する必要があります (NLS_LANG=Japanese_Japan.JA16SJIS の環境の場合は shift_jis、NLS_LANG=Japanese_Japan.JA16EUC の環境の場合は EUC-JP です)。

■ テンプレート HTML ファイルおよび blank_template.jsp を編集する

テンプレート HTML ファイルは、%ORACLE_HOME%\reports\templates フォルダにある、rwbeige.html、rwblue.html、rwgray.html、rwgreen.html、rwpeach.html、rwwine.html の 6 つの HTML ファイルです。

– JSP の Page ディレクティブを追加

```
<%@ page contentType="text/html; charset=yourEncoding" %>
```

– HTML のメタタグを <head></head> 内に追加

```
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=yourEncoding" />
```

■ template.xml を編集する

– <xsl:output> を修正

```
<xsl:output  
method="jsp"  
indent="yes"  
encoding="yourEncoding"  
/>
```

– JSP の Page ディレクティブを追加

```
<%@ page contentType="text/html; charset=yourEncoding" %>
```

– HTML のメタタグを <head></head> 内に追加

```
<meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=yourEncoding" />
```

HP-UX 上で日本語環境の Reports を使用するための手順

NLS_LANG=JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS に設定された HP-UX 日本語環境で Reports を使用する場合は、Reports を使用する前に、EUC でエンコードされた日本語リソースを含む次のファイルを変更する必要があります。

次のファイルを SJIS エンコードに変換するか、ファイルの最後にある 7 つのエントリを削除します。

```
$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/JA/Tk2Motif.rgb
```

TK90_UNKNOWN の使用

Unix 環境では、Reports は、ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/<language> 以下の Tk2Motif.rgb ファイルを参照します (<language> は NLS_LANG の言語設定より導出)。

このため、NLS_LANG が AMERICAN_AMERICA.JA16EUC の場合、\$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/Tk2Motif.rgb が参照されます。しかし、\$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/Tk2Motif.rgb は JA16EUC キャラクタ・セットに対応していないため、エラーが発生します。

Tk2Motif.rgb ファイルの位置を指定したい場合は、TK90_UNKNOWN 環境変数を使用します。

たとえば、上記例の場合、TK90_UNKNOWN に \$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/JA を指定することで正しく動作するようになります。

マルチバイトのオブジェクト型データにアクセスするレポートの実行

マルチバイト文字を含むレポートで、オブジェクト型データにアクセスする場合、レポートの実行に失敗します。

マルチバイト・エンコーディングの JSP レポートのオープン/実行

JSP レポートのエンコーディングが NLS_LANG 環境変数の対応する値と異なる場合 (例: JSP レポートが EUC-JP で NLS_LANG が JA16SJIS の場合など)、次のようなエラーが発生します。

- JSP ファイルの実行時

```
REP-6106/6104 javax.servlet.jsp.JspException

REP-0495 問合せをトークン化できません
```
- JSP ファイルを Reports Builder で開いたとき

```
REP-0069 Internal Error または REP-6106
```

この問題を回避するために、NLS_LANG に対応したエンコーディングに JSP レポート・ファイルを変換する必要があります。

例：

JSP レポートのエンコーディング：

```
<%@ page contentType="text/html; charset=EUC-JP" %>
<META http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=EUC-JP">
```

この JSP ファイルは、EUC-JP キャラクタ・セットでエンコードされている必要があります。

NLS_LANG の設定：

```
NLS_LANG=JAPANESE_JAPAN.JA16EUC
```

この例では、NLS_LANG の設定値 (JA16EUC) と JSP レポートのエンコーディング (EUC-JP) とが正しく対応しています。

DESFORMAT=delimiteddata 使用に関する制限

DESFORMAT=delimiteddata は、Portal に登録されたレポートとしては実行できません。DESFORMAT=delimiteddata で使用する場合には、Portal への登録はしないでください。

Oracle Designer

日本語環境での注意点

Form Generator において、オブジェクト・ライブラリとテンプレート・フォームを使ってフォームを生成する場合、それぞれの座標情報の座標システムと実際単位に同じ値を設定してください。

オブジェクト・ライブラリの座標情報とは、ライブラリに置くオブジェクトを作成したフォームの座標情報のことです。座標情報に同じ値が設定されていない場合、オブジェクトの X 位置、高さ等の座標情報が適切な値になりません。

なお、製品付属で提供されているオブジェクト・ライブラリ (*.olb ファイル) テンプレート・フォーム (*.fmb ファイル) は、ともに「実際単位 - インチ」で設定されているため、問題ありません。

Design Editor などを使って登録された次の項目は、生成される Visual Basic アプリケーションで定義される変数の一部として、または生成される Web PL/SQL アプリケーションの URL の一部としてそのまま使用されます。

これらの項目に何も指定しなかった場合、または英数字、_、\$、# 以外のデータを入力した場合、Visual Basic アプリケーションとして正常に生成されても Visual Basic 設計環境で読み込む際にエラーとなったり、Web PL/SQL アプリケーションとして正常に生成、コンパイルを行っても URL に接続できない場合があります。

それぞれ Visual Basic および Web PL/SQL の問題であると考えられます。このような問題を回避するために、次の項目は、必ず英数字、_、\$、# だけを使って定義するようにお薦めします。

表 1-1

対象となるナビゲータの項目	プロパティ名
¥ モジュール	インプリメント名
¥ モジュール ¥ モジュール・コンポーネント ¥ 表取扱	取扱別名
¥ モジュール ¥ モジュール・コンポーネント ¥ 表取扱 ¥ バウンド項目	名前
¥ モジュール ¥ モジュール・コンポーネント ¥ アンバウンド項目	名前
¥ モジュール ¥ モジュール・コンポーネント ¥ 項目グループ	名前
¥ モジュール ¥ モジュール・コンポーネント ¥ アクション項目	名前 (Visual Basic のみ)
¥ モジュール ¥ 引数	名前 (Web PL/SQL のみ)

日本語アプリケーション生成に有効な Generator 作業環境

Generator 作業環境を用いることで、生成されるアプリケーションの外観および動作を制御できます。ここでは、日本語アプリケーションの生成に特に有効なパラメータを紹介します。各パラメータの詳細は、オンライン・ヘルプの「Generator 作業環境」を参照してください。

- Form Generator : NATLNG (エンドユーザー・テキストの言語)
生成されるフォームの警告メッセージまたはヒントを制御します。日本語環境では「Japanese_Japan.JA16SJIS」と指定します。
注意: リリース 1.x では「Japanese」と指定することで日本語環境に対応しましたが、リリース 2.1 以降では必ず「Japanese_Japan.JA16SJIS」と修正する必要があります。
- Form Generator : TXTDDF (テキスト項目の DATE 型デフォルト書式)
- Form Generator : TXTDTF (テキスト項目の DATETIME 型デフォルト書式)
- Report Generator : DTEMSK (日付型の列に使用する書式マスク)
- Web PL/SQL Generator : TXTDDF (日付フィールドのデフォルトの日付書式)
生成されるフォーム、レポートおよび Web PL/SQL Generator で使われる DATE 型の書式を制御します。日本語環境では、たとえば「YYYY-MM-DD」と指定します。
- Form Generator : MNUULC (メニュー・アクセス・キーとして一意文字または頭文字を使う)

生成されるメニュー項目にアクセス・キーを自動生成します。日本語環境下で全角文字を使っている場合、全角文字列に対してアクセス・キーが作られますが、アクセス・キーとして動作しません。回避するためには、設定に「いいえ」を指定してください。

システム・モデリングと設計ツール

マルチバイト環境において構文チェックでエラーが表示されない (Bug 1293653)

原因: 日本語などのマルチバイトの環境で構文チェックは、常に解析結果を「構文チェックをエラーなしでパスしました」と表示します。

処置: なし。このような場合には、ロジックを実際に生成してその動作を確かめることにより、ロジックが正しく動作するかどうかチェックしてください。

ロジック・エディタでの日本語環境における問題

原因: ロジック・エディタを使用すると日本語環境で次のような問題が発生します。

- ロジック・エディタ内では日本語変換のインライン入力できません。
- 置換機能は正しく機能しません (Bug1389335。この機能は使用しないでください。文字データを破損する恐れがあります)。
- ロジック・エディタを開いたときに日本語文字列が正しく表示できない場合があります (Bug3089020)。この場合は、エディタのフォント設定を日本語フォントに変更してください。
- 構文ツリーの項目名およびエディタの右クリック・メニューは英語表記です (機能は問題ありません)。

処置: なし。

Server Generator

マルチバイト文字列を含む DDL ファイルをキャプチャできない (Bug 1018957)

原因: Server Generator は、マルチバイト文字列を含む DDL ファイルをキャプチャすることが出来ません。キャプチャをしてもサーバー・モデルが表示されません。

処置: DDL ファイルを一度データベースに生成し、その後データベースのオブジェクトとしてキャプチャしてください。

Oracle Software Configuration Manager

旧リリースからの移行に関して

旧リリースからのデータの移行手順は、移行元のリリース・バージョンによって異なります。『Oracle SCM Repository インストール・ガイド』の「6i より前のリポジトリから新規リポジトリへのデータ移行」の項を参照してください。また、移行に関して考慮すべきことや注意点などの全般的なガイドラインとしては、『Oracle Designer for Windows 移行に関するガイドライン』という、Oracle Designer 6i のドキュメント資料が有用です。これは OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp/>) で公開されています。

RON からのエクスポートにおける一般保護違反

原因: データベースのキャラクタ・セットが EUC である場合に、RON からエクスポート・ウィザードを使用してエクスポートを行うと、「XTSYS 表から XT 表を読み込んでます」(進捗が 50%) のところで一般保護違反や TNS パケットライター障害が発生しエクスポートが強制終了することがあります。

処置: このエラーが発生した場合は、Command Line Tool を使用してエクスポートを行うようにしてください。

リポジトリ・データのエクスポートには、異なる Oracle ホームに適切なバージョンのインポートおよびエクスポート・ユーティリティが必要

リポジトリ・データをエクスポートするには、使用するリポジトリに適したバージョンの Oracle インポート・ユーティリティおよびエクスポート・ユーティリティ (IMP と EXP) をインストールする必要があります。つまり、8.1.6 データベースに対しては 8.1.6 のユーティリティを、8.1.7 データベースに対しては 8.1.7 のユーティリティを使用する必要があります。これらのユーティリティは、Oracle Developer Suite と同じ Oracle ホームにはインストールしないでください。

インポート時に CDI-22573 が発生する

原因: インポート時に「CDI-22573: エクスポート・パラメータ・ファイル c:\temp¥stripped.sql が開けません。」というエラーが発生することがあります。これはオペレーティング・システムのルート・ディレクトリ (c:\¥ など) に temp という名前のディレクトリが無いために発生します。

処置: オペレーティング・システムのルート・ディレクトリに temp フォルダを作成してください。

間違った手順でのエクスポートによって RON が終了 (Bug 2419584)

原因: エクスポート・ウィザードでデータベース形式のエクスポートを選択した場合、2 ページ目でワークエリアやコンフィグレーションを指定せずに以降のエクスポート処理を実行すると、RON が終了します。

処置: 必ず、ワークエリアもしくはコンフィグレーションを指定するようにしてください。

新規リポジトリへの最初のリポジトリ・データのインポート時に、「CDR-17031: XT_CIUE 表がインポートされていません」で失敗する (Bug 1479177)

原因: 新規リポジトリへ、他のリポジトリから抽出したリポジトリ・データのインポート時にエラーが発生します。

処置: 新規リポジトリに対しては、最初にエクスポートを実行してください。これによりインポート / エクスポート用の表が作成され、以後、インポートが問題なく完了するようになります。

チェックアウト時にエラーが発生するが「エラースタックは空です」と表示

原因: オブジェクトのチェックアウトを実行中に上記エラーによって中断されます。

処置: リポジトリ・サーバーで何らかのエラーが発生しています（たとえば、チェックアウトのためのデータベースの表領域を拡張できない場合などです）。多くの場合、Command Line Tool から実行することで正しいエラーが表示されます。その後サーバー側の問題を解決してください。

リポジトリ所有者と同じ名前の表がある場合に ORA-6550 (Bug 1489855)

原因: リポジトリ所有者と同名の表がリポジトリ所有者のスキーマ内に存在する場合、Dependency Manager 起動時と拡張コピー時に ORA-6550 が発生します。これは、リポジトリ所有者と同名の表が存在すると、実行時に必要なユーザー定義オブジェクト型よりも先に表の方を PL/SQL エンジンが検索してしまうために発生するエラーです。

処置: リポジトリ所有者の名前と同じ表の名前を違う名前に変更してください。

日本語環境でサポートされるリポジトリ・データベースのキャラクタ・セット

日本語環境では、リポジトリに使用するデータベースのキャラクタ・セットは SJIS と EUC がサポートされます。UTF-8 キャラクタ・セットを使用する場合は、データベースの初期化パラメータとして NLS_LENGTH_SEMANTICS=CHAR を追加で設定する必要があります。

CD Pack に同梱されるパッチの適用について

Oracle Developer Suite Patch Set Release の適用に関して

Oracle Developer Suite Patch Set Release は、Oracle Developer Suite に含まれるいくつかのコンポーネントに対する修正を含みます。

Patch Set Release の適用に関しては、Oracle Developer Suite Patch Set Release CD-ROM に含まれるリリース・ノートを参照してください。

Oracle Designer/Software Configuration Manager に対するパッチの適用に関して

Oracle Designer/Software Configuration Manager に対するパッチは、Oracle Developer Suite Patch Set Release とは別に、Oracle Developer Suite JP Update CD の一部として提供されています。パッチの適用に関しては、Oracle Developer Suite JP Update CD の該当するディレクトリ以下の readme.htm を参照してください。

IME のあるシステムでのインストール動作のエラー

IME (Input Method Editor) プロセスが稼動している状態で Oracle Developer Suite をインストールすると、Oracle Universal Installer が正常に起動しなかったり、クラッシュしたりする場合があります (IME は通常、マルチバイトのアジア言語での入力で使用されます)。

このような問題が発生する場合には、Bug#3293516 対応のパッチを適用してください。パッチは JP Update CD に含まれています。

インストール手順は、パッチに付属する readme ファイル (<CD-ROM>/install_upgrade/3293516/README.html) に記載されています。

日本語オンライン・ヘルプ

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) JP Update CD には、日本語版オンライン・ヘルプが収録されています。

収録されているヘルプの一覧およびインストール方法については、<CD-ROM>/help/readme.htm を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder 9.2.0.3 Patch for Solaris Operating System (SPARC) and Microsoft Windows

Oracle9i Warehouse Builder 9.2.0.3 パッチが、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) JP Update CD に収録されています。Oracle9i Warehouse Builder 9.2 for Solaris Operating System (SPARC) および Microsoft Windows を使用する場合は本パッチを適用してください。Oracle9i Warehouse Builder 9.2.0.3 パッチは Solaris Operating System (SPARC) および Microsoft Windows 環境に適用可能なパッチセットです。本パッチは Design Time Install、Server Side Install の両環境にインストールする必要があります。

インストール方法については、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) JP Update CD の <CD-ROM>/owb/owb9203inst.htm を参照してください。

Oracle Discoverer 定義済ワークブックの日本語版

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) Update CD には、Oracle Discoverer の定義済ワークブック (EUL ステータス・ワークブック、系統ワークブック、チュートリアル用デモ・ワークブック) の日本語版が含まれています。これらを利用する場合は、次の手順に従ってください。

EUL ステータス・ワークブック、系統ワークブックの日本語版の利用

1. SQL*Plus を起動し、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> connect jchan/tiger
```

jchan は EUL 所有者、tiger は EUL 所有者のパスワードです。

2. SQL ファイル eul5.sql を実行して、ユーザー定義 PL/SQL ファンクションを作成します。

例) SQL> @d:¥<ORACLE_HOME>¥discoverer¥sql¥eul5.sql

3. <CD-ROM>¥Discoverer¥sample¥ に含まれる次のファイルを %ORACLE_HOME%¥discoverer¥ ディレクトリにコピーします。

EUL5ja.eex

4. Discoverer Administrator を使用して 1 でコピーしたファイルをインポートします。

5. <CD-ROM>%Discoverer%sample% に含まれる次のファイルを %ORACLE_HOME%\%discoverer%demo% ディレクトリにコピーします。

Workbook Management.dis

Query Statistics.dis

EUL Data Definition.dis

Lineage.dis

6. Discoverer Desktop を起動してから、3 でコピーしたワークブックを
「既存のワークブックを開く」→「マイ・コンピュータ」から、開いて使用してください。

.eex ファイルのインポートおよび EUL ステータス・ワークブックの利用に関しては、『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』を参照してください。また、系統ワークブックのインストールと利用に関しては、本リリース・ノート第 7 章「Oracle Discoverer Administrator」の「Oracle Warehouse Builder で使用する系統ワークブックのインストール」の項をあわせて参照してください。

デモ・チュートリアル用ワークブックの日本語版の利用

1. Discoverer Administrator を使用して、Discoverer チュートリアル用 EUL をインストールします。
2. <CD-ROM>%Discoverer%sample% に含まれる次のファイルを %ORACLE_HOME%\%discoverer%demo% ディレクトリにコピーします。

vidaf5ja.dis

vidstr5ja.dis
3. Discoverer Desktop を起動し、2 でコピーしたワークブック・ファイルを
「既存のワークブックを開く」→「マイ・コンピュータ」から、開いて使用してください。

Discoverer チュートリアルのインストールおよび、利用に関する詳細は、『Oracle Discoverer Administrator チュートリアル』を参照してください。

第 II 部

製品リリース・ノート

このリリース・ノートの第 II 部では、Oracle Developer Suite 製品全般に関する情報について説明します。

第 II 部の構成は次のとおりです。

- [第 2 章「製品の名称」](#)
- [第 3 章「動作要件」](#)
- [第 4 章「既知の問題」](#)

製品の名称

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) の前のバージョンは次の製品名でリリースされていました。

- Oracle Internet Developer Suite
- Oracle9i Developer Suite (Oracle9iDS) リリース 2 (9.0.2)

Windows のコンポーネント

Windows の場合、Oracle Developer Suite 10g（9.0.4）には次のコンポーネントが含まれます。

表 2-1 Windows のコンポーネント名

Oracle Developer Suite 10g の コンポーネント	リリース 2（9.0.2）の名前	Oracle Internet Developer Suite の名前
Oracle9i JDeveloper（9.0.4）	Oracle9i JDeveloper（9.0.2）	Oracle JDeveloper
Oracle JDeveloper 10g（9.0.5） ¹		
Oracle Forms Developer	Oracle9i Forms Developer	
Oracle Reports Developer	Oracle9i Reports Developer	
Oracle Discoverer Administrator ²	Oracle9i Discoverer Administrator	Oracle Discoverer Administration Edition
Oracle Designer		
Oracle Software Configuration Manager		
Oracle Warehouse Builder 10g （10.1） ³	Oracle9i Warehouse Builder （9.0.3）	
Oracle Business Intelligence Beans	Oracle9i Business Intelligence Beans	

¹ Oracle JDeveloper 10g（9.0.5）は別 CD にて提供されます。
² Oracle Discoverer Administrator には Oracle Discoverer Desktop が含まれます。
³ Oracle Warehouse Builder 10g（10.1）は別 CD にて提供されます。

UNIX のコンポーネント

UNIX の場合、Oracle Developer Suite 10g（9.0.4）には次のコンポーネントが含まれます。

表 2-2 UNIX のコンポーネント名

Oracle Developer Suite 10g の コンポーネント	リリース 2（9.0.2）の名前	Oracle Internet Developer Suite の名前
Oracle9i JDeveloper（9.0.4）	Oracle9i JDeveloper（9.0.2）	Oracle JDeveloper
Oracle JDeveloper 10g（9.0.5） ¹		
Oracle Forms Developer	Oracle9i Forms Developer	
Oracle Reports Developer	Oracle9i Reports Developer	

表 2-2 UNIX のコンポーネント名 (続き)

Oracle Developer Suite 10g の コンポーネント	リリース 2 (9.0.2) の名前	Oracle Internet Developer Suite の名前
Oracle9i Warehouse Builder (9.2) ²		
Oracle Warehouse Builder 10g (10.1) ^{3 4}		

¹ Oracle JDeveloper 10g (9.0.5) は別 CD にて提供されます。

² Oracle9i Warehouse Builder (9.2) は Solaris 版の CD Pack でのみ別 CD にて提供されます。

³ Oracle Warehouse Builder 10g (10.1) は別 CD にて提供されます。

⁴ Oracle Warehouse Builder 10g (10.1) for AIX-Based 5L Systems は別途 OTN-J
(<http://otn.oracle.co.jp/>) よりダウンロードにて提供されます。

3

動作要件

この章では、Oracle Developer Suite の動作要件について説明します。

動作要件

動作要件はオンラインで確認できるようになりました。Oracle Developer Suite の最新の動作要件は、Oracle Developer Suite のインストレーション・ガイドを参照してください。また、最新の動作要件が記載された Web サイト (<http://www.oracle.co.jp/products/system/>) もご確認ください。

既知の問題

この章では、Oracle Developer Suite 製品全般に適用される問題とその対処方法について説明します。コンポーネント固有の問題とその対処方法については、[第 III 部「コンポーネントのリリース・ノート」](#)の章を参照してください。

この章は、次の項に分かれています。

- [インストール前の問題](#)
- [インストールの問題](#)
- [インストール後の問題](#)
- [削除の問題](#)
- [プラットフォーム固有の問題](#)
- [構成の問題](#)
- [管理の問題](#)

インストール前の問題

Oracle Business Intelligence Beans

Oracle Business Intelligence Beans (BI Beans) には、OLAP オプションがサポートされた Oracle9i Database Enterprise Edition リリース 2 (9.2.0.4 以降) が必要です。特定のパッチセット番号については、Oracle Technology Network の BI Beans 製品の項目 (<http://otn.oracle.com/docs/products/bib/content.html>) からサポート対象のパッチセットを参照してください。

OLAP オプションには次のような構成が必要です。

- 基本的な構成は『Oracle9i OLAP リファレンス』を参照してください。このガイドは、Oracle Technology Network Japan より入手できます。
- BI Beans のパフォーマンスを調整し、最適化するには、『Best Practices for Tabular Cube Aggregation and Query Operations』に記載の設定に従って、データベースを設定します。このドキュメントにアクセスするには、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp>) を参照してください。BI Beans が正しく動作し実行されるようにするには、これらの設定に従う必要があります。

Oracle Warehouse Builder 10g

Oracle Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) は、別途インストール・プログラムを収めた独立した CD として、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) CD Pack に同梱されています。

Oracle Warehouse Builder 10g に関連するドキュメントは Oracle Developer Suite 10g Documentation CD に含まれます。Oracle Warehouse Builder 10g リリース 1 (10.1) のインストール方法は『Oracle Warehouse Builder インストールおよび構成ガイド 10g リリース 1 (10.1)』を参照してください。

また、既知の問題に関しては、『Oracle Warehouse Builder リリース・ノート 10g リリース 1 (10.1)』を参照してください。

Oracle9i Warehouse Builder

Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 は、別途インストール・プログラムを収めた独立した CD として、Solaris 版の Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) CD Pack に同梱されています。

Oracle9i Warehouse Builder に関連するドキュメントは Solaris 版の Oracle Developer Suite 10g Start Here CD に含まれます。Oracle9i Warehouse Builder リリース 9.2 のインストール方法は『Oracle9i Warehouse Builder インストールおよび構成ガイド』を参照してください。また、既知の問題に関しては、『Oracle9i Warehouse Builder リリース・ノート』を参照してください。

インストールの問題

インストールに関する既知の問題はありません。

インストール後の問題

Java バージョン

Oracle Developer Suite の各コンポーネントのドキュメントには、コンポーネント別に動作確認された JDK、JRE、J2SE、J2EE などの Java 機能のバージョンが記載されている場合があります。ただし、Oracle Developer Suite 10g 9.0.4 に含まれている Java のバージョンはすべてのコンポーネントで完全に動作確認済です。

たとえば、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) for Linux には Java 1.4.2.x が含まれており、Oracle Business Intelligence Beans (BI Beans) のドキュメントには BI Beans が 1.4.1 のみで動作確認済と記載されています。しかし、BI Beans は、Oracle Developer Suite 10g for Linux とともにインストールされる Java SDK 1.4.2 でも動作確認されています。

削除の問題

削除に関する既知の問題はありません。

プラットフォーム固有の問題

プラットフォーム固有の既知の問題はありません。

構成の問題

構成に関する既知の問題はありません。

管理の問題

管理に関する既知の問題はありません。

第III部

コンポーネントのリリース・ノート

このリリース・ノートの第III部では、Oracle Developer Suite の各コンポーネントの固有の情報を章ごとに説明します。

第III部の構成は次のとおりです。

注意： Oracle Developer Suite の各コンポーネントのドキュメントには、コンポーネント別に動作確認された JDK、JRE、J2SE、J2EE などの Java 機能のバージョンが記載されている場合があります。ただし、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) に同梱されている Java のバージョンはすべてのコンポーネントで完全に動作確認済です。

たとえば、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) for Linux には Java は 1.4.2.x が含まれており、Oracle Business Intelligence Beans (BI Beans) のドキュメントには BI Beans が 1.4.1 のみで動作確認済と記載されています。しかし、BI Beans は、Oracle Developer Suite 10g for Linux とともにインストールされる Java SDK 1.4.2 でも動作確認されています。

- [第5章「Oracle9i JDeveloper」](#)
- [第6章「Oracle Business Intelligence Beans」](#)
- [第7章「Oracle Discoverer Administrator」](#)
- [第8章「Oracle Discoverer Desktop」](#)
- [第9章「Oracle Forms Developer」](#)
- [第10章「Oracle Reports」](#)
- [第11章「Oracle Designer」](#)
- [第12章「Oracle Software Configuration Manager」](#)

Oracle9i JDeveloper

この章では、次の Oracle9i JDeveloper のトピックについて説明します。

- 一般的な問題とその対処方法
- プラットフォーム固有の問題および対処方法
 - UNIX プラットフォームの問題および対処方法
- 構成に関する問題および対処方法
- 管理に関する問題および対処方法
- ドキュメントの記載内容の誤り

一般的な問題とその対処方法

概要

Oracle9i JDeveloper (JDeveloper) は、E-Business アプリケーションや Web サービスに対する開発、デバッグ、デプロイを総合的にサポートする J2EE (Java 2 Platform Enterprise Edition) 開発環境です。

最大限の開発生産性を確保するため、JDeveloper は、ソース・コントロール、モデル化、コーディング、デバッグ、テスト、プロファイリング、デプロイに至る開発ライフ・サイクルを、完全にサポートするための包括的な統合ツール群を提供します。アプレット、JavaBeans、JavaServer Pages (JSP)、サーブレット、Enterprise JavaBeans (EJB) など、高性能の標準 J2EE コンポーネントを開発するためのウィザード、エディタ、ビジュアル設計ツール、デプロイメント・ツールなどが提供されるため、J2EE 開発が大幅に簡易化されます。また、JDeveloper は、開発環境を拡張およびカスタマイズし、他社製品とシームレスに統合するためのパブリック Extension SDK を提供しています。

このリリースの詳細は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の JDeveloper のページ (<http://otn.oracle.co.jp/products/jdev/>) を参照してください。

スケーラブルで高性能の J2EE アプリケーションの開発を簡略化するために、JDeveloper では、Business Components for Java (BC4J) と呼ばれるオープンで拡張性のある J2EE フレームワークを提供しています。BC4J は、Sun の J2EE 設計パターンを実装しており、洗練された J2EE アプリケーションを開発者が短期間で構築することができます。

なお製品には Oracle JDeveloper 10g (9.0.5) が同梱されていますが、Oracle JDeveloper 10g (9.0.5) を導入するときは Oracle JDeveloper 10g (9.0.5) CD-ROM からインストールを行ってください。またリリース・ノートは Oracle JDeveloper 10g (9.0.5) のリリース・ノートを参照してください。

Oracle9i リリース 2 (9.2) のサポート

Oracle9i JDeveloper リリース 9.0.4 には、Oracle9i リリース 1 対応のドライバが含まれています。これらのドライバは次のデータベースと互換性があります。

- Oracle9i リリース 2 (9.2)
- Oracle9i リリース 1 (9.0.1)
- Oracle8i リリース 8.1.7

Oracle9i リリース 2 対応のドライバは、JDeveloper リリース 9.0.4 へのインストールはできませんが、サポートされません。

本リリースにおける制限事項

本リリースでは、次の制限事項があります。

- アクティビティ・モデリング
E-Business 統合（データベース、アドバンスド・キューイング（AQ）、Oracle Workflow との連携）のためのアクティビティ・モデリングの機能は、本リリースではサポートされません。つまり、「生成」→「E-Business 統合」を選択してコードを生成する機能はサポートされません。
- ソース・コントロール・サポート
「ツール」→「設定」→「ソース・コントロール」で設定可能なソース・コントロール・テクノロジーとして Rational ClearCase はサポートされません。

OC4J へのデプロイ

Oracle JDeveloper 9.0.4 に含まれる OC4J バージョン

デフォルトでは、Oracle9i JDeveloper リリース 9.0.4 を使用することで、埋込み OC4J サーバーを使用して JDeveloper で J2EE アプリケーションを十分にテストしてから、ターゲット・アプリケーション・サーバーにデプロイできます。OC4J 9.0.4 埋込みサーバーは、JDeveloper の次の場所にあります。

- Windows でシングルユーザーの場合: `oracle_home\jdev\system\###\oc4j-config`
- UNIX でマルチユーザーの場合: `oracle_home/jdev_user_dir/jdev/system\###/oc4j-config`

JDeveloper には OC4J 9.0.4 も含まれています。これはスタンドアロン・モードで実行できます。OC4J 9.0.4 スタンドアロン・サーバーのファイルは、次の場所にあります。

`oracle_home/j2ee/home`

関連ファイルは次の場所にあります。

`oracle_home/j2ee/home/config`

スタンドアロン OC4J にアプリケーションをデプロイする場合は、リモート OC4J に同梱されていたリモート `admin.jar` ファイルを使用してください。デプロイ先の OC4J のバージョンと一致しない `admin.jar` を使用すると、デプロイメントが失敗する可能性があります。JDeveloper のアプリケーション・サーバー接続ウィザードを使用して接続を設定するときに、OC4J スタンドアロン・インスタンスで正しい `admin.jar` を使用するようにデプロイメントを構成できます。

使用している OC4J のバージョンを確認するには、OC4J インストール・ディレクトリで次のように入力します。

```
java -jar oc4j.jar -version
```

OC4J のメモリー要件

デフォルトでは、OC4J は、パフォーマンスを向上させるために多数のクラスを事前ロードします。このため、OC4J をデプロイしようとして、`java.lang.OutOfMemoryError` を取得することがあります。

`java.lang.OutOfMemoryError` が発生した場合の対処方法には、次の 2 つがあります。

- 最大ヒープ・サイズを増やして OC4J を実行するにはコンピュータの空きメモリーが足りない場合は、OC4J を実行する Java プロセスを停止し、
`-Doracle.j2ee.dont.use.memory.archive=true` フラグを使用して再起動します。これにより、クラスの事前ロードが停止します。次に例を示します。

```
Java -Doracle.j2ee.dont.use.memory.archive=true  
-jar oc4j.jar
```

- コンピュータに最低 512MB の空きメモリーがある場合は、事前ロードを有効のままにしておくと OC4J の実行スピードが上がります。ただし、起動時間はかなり長くなります。OC4J を実行する Java プロセスを停止し、`-mx` フラグを使用して最大ヒープ・サイズを増やして再起動します。次に例を示します。

```
Java -mx512M -jar oc4j.jar
```

他のアプリケーション・サーバーへのデプロイ

Oracle 以外のアプリケーション・サーバーにデプロイされた UIX Web アプリケーション (BC4J JSP Admin ページなど) の実行に関する問題 (2577293)

Oracle 以外のアプリケーション・サーバーにデプロイした UIX Web アプリケーションを実行するか、Oracle 以外のアプリケーション・サーバーにデプロイした BC4J JSP アプリケーションの「BC4J Admin」リンクをクリックすると、次のエラーが発生することがあります。

```
[INFO] RequestProcessor - -Processing a 'GET' for Path...  
Root cause of ServletException  
java.lang.NullPointerException...
```

このエラーが発生しないようにするには、`uix-config.xml` ファイルを変更する必要があります。

Admin ページを含む BC4J JSP アプリケーションを実行している場合は、サーバーで次のような変更を行います。

1. サーバーで `bc4j.ear` ファイルを探して解凍します。
2. 抽出した `webapp.war` ファイルを解凍します。
3. 抽出した `WEB-INF/uix-config.html` ファイルをテキスト・エディタで開きます。
4. `<default-configuration>` 要素のコメント指定を解除します。
5. `<full-uri>` 要素の値として、ポート番号を含めてアプリケーション・サーバーの URL を設定します。
6. `<full-path>` 要素の値として、アプリケーション・サーバー上の `cabo` ディレクトリの親ディレクトリの完全ローカル・パスを設定します。

注意: `cabo` ディレクトリそのものではなく親ディレクトリを使用してください。

7. `webapp.war` ファイルを再パッケージします。
8. `bc4j.ear` ファイルを再パッケージします。
9. 変更した `bc4j.ear` ファイルを再デプロイします。

BC4J UIX アプリケーションを実行している場合は、JDeveloper 内で次の変更を行います。

1. システム・ナビゲータで、ファイル `uix-config.html` を探してコード・エディタで開きます。
2. `<default-configuration>` 要素のコメント指定を解除します。
3. `<full-uri>` 要素の値として、ポート番号を含めてアプリケーション・サーバーの URL を設定します。
4. `<full-path>` 要素の値として、アプリケーション・サーバー上の `cabo` ディレクトリの親ディレクトリの完全ローカル・パスを設定します。

注意: `cabo` ディレクトリそのものではなく親ディレクトリを使用してください。

5. このファイルを保存し、Oracle 以外のアプリケーション・サーバーに再デプロイします。

Apache Tomcat 4.1 への Web アプリケーションのデプロイ

Apache Tomcat 4.1 にデプロイする場合は、BC4J ランタイム・ライブラリを、`tomcat_install/lib` ではなく `tomcat_install/common/lib` にコピーする必要があります。詳細は、ヘルプ・トピック「Web アプリケーションの Apache Tomcat へのデプロイ」を参照してください。

Tomcat にデプロイした JSP アプリケーションの問題 (2615358)

Tomcat のバグのために、Tomcat にデプロイした JSP アプリケーションを実行するときに次のエラー・メッセージを受け取る可能性があります。

2 つのパラメータ ... または ... のいずれかのみ、定義してください。

これは、Tomcat のタグ・プール・メカニズムのエラーが原因です。Tomcat はプールの後でタグを解放しないため、互換性のない属性が定義されている同一のタグを後で使用するとこのエラーが発生します。

このエラーが発生しないようにするには、Tomcat のタグ・プールを無効にする必要があります。

1. ファイル `tomcat_home/conf/web.xml` をテキスト・エディタで開きます。
2. 次の要素を探します。

```
<init-param>
  <param-name>enablePooling</param-name>
  <param-value>true</param-value>
</init-param>
```

3. `<param-value>` の値を `false` に変更します。

XSQL Page の実行 (1552039)

XSQL Page Processor は展開されていない WAR ファイルから XSQL Page を読み込むことができないため、XSQL Page は、WebLogic 6.1/7.0、JBoss 3.0.4、および Tomcat 4.1.12 では実行できません。

WebLogic へのデプロイ時の型の非互換

BEA 提供の Oracle クラスを使用する場合、WebLogic にデプロイされたアプリケーションの中には、型の互換性がないものがあります。このような問題が発生しないようにするには、サーバーの `lib` ディレクトリにある `classes12.zip` ファイルおよび `classes12.jar` ファイルを、`oracle_home/jdbc/lib` ディレクトリの `classes12.jar` で置き換えます。

WebLogic 6.1 における XML ファイルの 'Windows-1252' エンコーディングの問題

WebLogic6.1 は、XML ファイルの 'Windows-1252' エンコーディングを認識できません。これは、WebLogic6.1 の xmlparser のバグです。JDeveloper のアプリケーションを WebLogic6.1 にデプロイするには、WebLogic6.1 が認識する IANA エンコーディングにエンコーディングを変更します。UTF-8 や Shift_JIS エンコーディングの使用をお勧めします。

たとえば、UTF-8 エンコーディングを使用する手順は次のとおりです。

1. JDeveloper で、「ツール」→「設定」を選択します。
2. 「環境」パネルで「エンコーディング」フィールドを「UTF-8」に変更します。
3. 「OK」をクリックします。

ここで、新規プロジェクトとアプリケーションを作成します。

CORBA によって実行時に JDK 1.3 が要求される (2685103)

JDeveloper 9.0.4 のデフォルトの JDK 1.4 を使用して、Visibroker 対応の CORBA アプリケーションを作成することはできますが、そのアプリケーションをデプロイまたは実行するには次の変更が必要です。

- JDK 1.3 を使用して Visibroker サーバーを実行します。
- デプロイする前に、プロジェクトを構成し、JDK 1.3 を使用して次の項目を Java コマンドラインに追加します。これは、「プロジェクト」→「デフォルト設定」で実行します。

```
-Dorg.omg.CORBA.ORBClass=com.inprise.vbroker.orb.ORB
-Dorg.omg.CORBA.ORBSingletonClass=com.inprise.vbroker.orb.ORBSingleton
-Djavax.rmi.CORBA.StubClass=com.inprise.vbroker.rmi.CORBA.StubImpl
-Djavax.rmi.CORBA.UtilClass=com.inprise.vbroker.rmi.CORBA.UtilImpl
-Djavax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass=com.inprise.vbroker.rmi.CORBA.
PortableRemoteObjectImpl
```

これらのオプションが必要なのは、クライアント JSP プロジェクトだけです。使い勝手をよくするために、これらをデフォルト設定で指定しておくことをお勧めします。

BC4J に関する問題

SQL スタイルで SQL92、型マップで Java を選択した場合の注意 (2693168)

Business Components Package ウィザードのステップ 2 で、SQL スタイルとして SQL92、型マップで Java を選択した場合、ステップ 3 で「使用可能な表」リストに何も表示されないことがあります。この場合は、「表」チェックボックスの選択を一度解除してから、再度選択してください。

902 プロジェクトの VO または属性名に \$ が含まれていると移行できない (2701773)

BC4J プロジェクトのコンポーネント名または属性名に \$ という文字が含まれている場合は、JDeveloper の新しいリリースにプロジェクトを移行する前に、そのコンポーネントまたは属性の名前を変更して \$ を削除する必要があります。JDeveloper 9.0.3 以降のリリースでは、BC4J の名前に \$ を使用することはできません。

JDeveloper 9.0.4 の *.jpr ファイルの形式には 9.0.3 との下位互換性がない (2682921)

以前のリリースで作成した JDeveloper プロジェクトを JDeveloper 9.0.4 で開き、.jpr ファイルを 9.0.4 の形式で保存した後は、その .jpr ファイルを再度 JDeveloper 9.0.3 で開くことはできません。具体的には、9.0.3 のプロジェクトに BC4J コンポーネントが含まれている場合に、その JPR ファイルを JDeveloper 9.0.4 の形式で保存した後は、JPR ファイルを 9.0.3 で開こうとしても、プロジェクトのロードおよびビルドを正しく行うことはできません。JDeveloper 9.0.4 を、このリリースのテストが目的で既存のプロジェクトに対して使用する場合は、JDeveloper 9.0.3 に戻せるように、JDeveloper 9.0.3 の .jpr ファイルのバックアップ・コピーを必ず作成してください。

空のエクスポート・インターフェースを含む BC4J プロジェクトの移行 (2676186)

この問題が発生するのは、9.0.2 の BC4J プロジェクトに空のエクスポート・インタフェースが含まれており、そのプロジェクトを JDeveloper の新しいリリースに移行しようとしたときだけです。空のエクスポート・インタフェースができるのは、アプリケーション・モジュールまたはビュー・オブジェクトの中でクライアント・メソッドをエクスポートし、その後でエクスポート・リストからすべてのメソッドを削除した場合です。このようなプロジェクトを JDeveloper の新しいリリースに移行すると、空のエクスポート・インタフェースは削除されますが、そのインタフェースを実装するクラスは削除されないで、コンパイル・エラーが発生します。

対処方法として、クラス・ファイル内のクラス宣言から、implements 句（たとえば implements EmpView）を削除します。この作業を行うのはプロジェクトの移行前と移行後のどちらでもかまいませんが、移行後に行うほうが、コンパイル・エラーから修正対象がわかるので簡単です。

BC4J エンティティ Facade のベースとなる Entity Bean の名前の変更 (2587916)

BC4J エンティティ Facade のベースとなっている Entity Bean の名前は変更しないでください。変更した場合、デプロイメント・プロファイルが正しく変更されないため、NullPointerException が発生します。

BC4J エンティティ Facade での Oracle データベースの SYSDATE の取得 (2525437)

BC4J エンティティ Facade での getDbCurrentTime() メソッドでは Java のシステム時刻が使用されます。これは、BC4J エンティティ Facade が SQL タイプおよび接続先データベースの情報を認識できないためです。BC4J エンティティ Facade で Oracle データベースの SYSDATE の使用が必要な場合は、getDbCurrentTime() メソッドをオーバーライドしてください。

Bean タイプをリモートからローカルへ変更しても、web.xml の <ejb-ref> が更新されない (2589997)

EJB セッション Facade として設定された BC4J コンポーネントに対する JSP アプリケーションを作成した場合、そのプロジェクトの web.xml の <ejb-ref> エントリに設定が行われます。その後、Facade のインタフェース・タイプをローカルとリモートの間で切り替えると、web.xml の <ejb-ref> エントリを更新する必要があります。たとえば、Bean 型をリモートからローカルに変更した場合は、web.xml の <ejb-ref> セクションを適切な <ejb-local-ref> タグで置換する必要があります。

BC4J エンティティ Faced と BC4J JSP でマルチメディア・コンテンツをアップロードするアプリケーションを作成する際の注意 (2887647)

BC4J エンティティ Faced と BC4J JSP で、interMedia ドメイン・オブジェクトを使用してマルチメディア・コンテンツをアップロードするアプリケーションを構築するアプリケーションを構築する場合は注意が必要です。フェイルオーバー・オプションが TRUE に設定された状態で、BC4J JSP アプリケーションがステートフル・モードで実行中の場合、アップロードに失敗します。

移行に関するドキュメントでの qView から getRowSet への変更 (2723075)

移行に関するドキュメントの中の qView は、getRowSet に読み替えてください。

ドキュメントが BC4J の「ウィザード」を参照している

コンポーネント・エディタで「ヘルプ」をクリックしたときに表示されるヘルプ・ドキュメントでは、「ウィザードまたはエディタ」とすべき箇所が「ウィザード」というコンポーネントになっています。たとえば、エンティティ・オブジェクト・エディタで「ヘルプ」をクリックしたときに表示されるヘルプ・テキストのタイトルは「エンティティ・オブジェクト・ウィザード」となっていますが、本来は「エンティティ・オブジェクト・ウィザードおよびエディタ」となるべきものです。

VB バインド・モードにおいて OC4J で BC4J JSP を実行できない (2594776)

BC4J CORBA サーバーにアクセスするときは、ORB を初期化する前に、いくつかのプロパティを設定する必要があります。これらのプロパティは内部的に設定されますが、OC4J が起動時に ORB を初期化するため、それでは遅すぎます。

対処方法として、次のシステム・プロパティを OC4J コマンドラインに手動で追加します。埋込みサーバーを使用している場合は、埋込み OC4J インスタンスが起動されるプロジェクトの VM 設定にこれらを追加します。

```
-Dorg.omg.CORBA.ORBClass=com.inprise.vbroker.orb.ORB
-Dorg.omg.CORBA.ORBSingletonClass=com.inprise.vbroker.orb.ORBSingleton
-Djavax.rmi.CORBA.UtilClass=com.inprise.vbroker.rmi.CORBA.UtilImpl
-Djavax.rmi.CORBA.PortableRemoteObjectClass=com.inprise.vbroker.rmi.CORBA
.PortableRemoteObjectImpl
```

Business Component Browser でヘルプが利用できないときがある

Business Component Browser からヘルプ・システムにアクセスできるのは、アプリケーション・モジュールを右クリックして「テスト」を選択するという方法で起動した場合だけです。モデル・プロジェクトを実行、デバッグまたはプロファイルして Business Component Browser を起動した場合は、ヘルプは利用できません。

jbo.debugoutput プロパティで、file という値を設定できる

ドキュメントには、jbo.debugoutput に silent、console および routing_classname という値を設定できると記載されていますが、これに加えて、file という値を設定して、テキスト・ファイルに BC4J のデバッグ情報を記録することもできます。

EJB に関する問題

埋め込み OC4J サーバーによる EJB 実行時の注意 (2096700、2591173)

CMP Entity Bean を持つ EJB アプリケーションを JDeveloper の埋め込み OC4J サーバーで実行しようとしたときに、アプリケーションを格納するワークスペースに複数のプロジェクトがあると、エラーが発生することがあります。エラーが発生しないようにするには、出力ディレクトリ・パスがプロジェクトごとに異なっていることを確認し、名前が衝突しないようにします。出力ディレクトリ・パスを指定するには、プロジェクトを選択して「プロジェクトの設定」→「構成」→「開発」→「パス」を右クリックし、同じワークスペース内の他のプロジェクトとは異なるディレクトリ名を、「出力ディレクトリ」テキスト・フィールドで指定します。

JClient に関する問題

JTree にバインドされたデータ値の編集 (2061405)

JTree コントロールを使うことで、BC4J データをツリー上に表示できます。ここで、プロパティ・インスペクタから「Editable」を「True」に設定することができますが、JTree からのデータ値の編集はサポートされていません。

EJB モードの JClient アプリケーションの Java Web Start 1.2 による実行 (2699458)

リソース J2EE/HOME/LIB/JAAS.JAR 内に署名付きエントリがないため、Webstart 1.2 で実行される EJB モードでは、JClient アプリケーションを実行できません。

MIME タイプの問題のために IE 5.5 で Webstart が起動しない (2573655)

JClient Web Start ウィザードで生成された local.jsp リンクを使用して、Internet Explorer 5.5 で JClient Webstart アプリケーションを実行しようすると、Java Web Start が起動しません。かわりに、ファイルを開くように IE 5.5 から求められます。

対処方法として、レジストリ・エディタ (regedit.exe) を使用して新しい MIME タイプを作成し、それを .jnlp 拡張子に関連付けます。たとえば、レジストリ・エディタで、「HKEY_CLASSES_ROOT」→「MIME」→「Database」→「Content Type」→「application/x-java-jnlp-file」を探し、プロパティ Extension を値 .jnlp に設定します。

JSSpinner コントロールがサポートするデータ型 (2738858)

手数料のような整数フィールドを表示するために、Spinner コントロールを使用して整数値をすべて順に表示できるようにするには、SpinnerNumberModel を使用して値、最小値、最大値および刻みを表します。

ただし、BC4J では、数値属性のデフォルトのマッピングは `oracle.jbo.domain.Number` となっています。現時点では、JUSpinnerBinding でサポートされている型は、Double、Float、Long、Integer、Short、Byte だけです。

したがって、基礎となる属性を `java.lang.Integer` にマッピングする必要があります。

ソース・コントロール・サポートに関する問題

Oracle SCM: Oracle9i SCM RON とは共有されないフォルダ・マッピング

Oracle SCM Repository Object Navigator (RON) を使用してファイル・システムへのダウンロードまたはファイル・システムとの同期化が行われたとしても、そのままでは JDeveloper では、ダウンロードされたファイルが認識されません。RON により格納されたマッピング情報は、JDeveloper では直接利用できないためです。

Oracle SCM で管理されたファイルをファイル・システムへダウンロードし、JDeveloper で使用するには、次のようにします。

- JDeveloper のワークエリア・ウィザードを使用してワークエリアを作成します。この場合、ワークエリアのファイルは、自動的にワークエリアのダウンロード・フォルダにダウンロードされます。
- JDeveloper のフォルダ・マッピング・ツールを使用して、ダウンロードしたいフォルダをファイル・システムにマッピングします。

Oracle SCM: JDeveloper 上で起動される VHV からの操作

JDeveloper 上から起動される Version History Viewer (VHV) からは、ファイルのマージ、チェックインまたはチェックアウトといったソース・コントロール操作を行わないでください。

Oracle SCM: Oracle Repository 6i への接続

Oracle JDeveloper は、Oracle9iDS リリース 2 (9.0.2) 以降に含まれる Oracle9i Software Configuration Manager で機能することが保証されています。Oracle JDeveloper では、Oracle Repository 6i (6.5.69) 以上との接続は不可能ではありませんが、組合せとしては保証されていません。

モデル化に関する問題：一般

モデル要素およびダイアグラムのファイルにおけるソース・コントロール操作の実行 (2211605)

モデル要素またはダイアグラムのファイルをソース・コントロール・システムで管理している場合、それらの情報をディスクに書き込んだ後でソース・コントロール操作を実行することをお勧めします。モデル要素またはダイアグラムのファイルがメモリーにしかない状態（ディスクに保存されていない状態）でソース・コントロール操作を実行すると、メモリーに保持されている情報がディスクにある情報で上書きされる可能性があります。モデル要素またはダイアグラムのファイルが不整合をおこさないために、ディスクに保存した後で、ソース・コントロール操作を実行することをお勧めします。

インストール・ディレクトリの名前にスペースが含まれている場合の起動時例外 (2709528)

JDeveloper をインストールしたディレクトリの名前にスペースが含まれている場合は、起動時に例外が発生し、新しい UML ダイアグラムを作成することができません。

モデル化に関する問題：Java クラス、BC4J または EJB コンポーネントのモデル化

モデル化された Java クラスの削除 (2706800)

他の Java クラスへの関連を持つモデル化された Java クラスをナビゲータから削除しても、その関連はモデルからは削除されません。このような孤立した関連をダイアグラム上にドラッグすると、例外がスローされます。このことを回避するには、関連を持つモデル化された Java クラスを削除するときに、ダイアグラムから削除します。

Web サービスに関する問題

モデル化された Web サービスのメソッド名の変更 (2702659)

Java クラスおよび Web サービスを UML モデリングによって作成した後でメソッド名を変更すると、Java クラスのモデルには新しいメソッド名が表示されますが、Web サービスのモデルには表示されません。

このメソッドを Web サービスとして公開するには、モデル化された Web サービスをダブルクリックし、「公開するメソッド」ページでメソッドを選択して「OK」をクリックします。

SOAP Web サービスが新規セッションを開始しない (2218102)

スコープが `session` の SOAP Web サービスに対して、異なるクライアントがアクセスしても期待どおりに新規セッションを開始しないことがあります。

OC4J での JMS Web サービスの使用

OC4J/JMS は、Oracle9iAS 9.0.3 または OC4J 9.0.3 ではサポートされていません。OJMS は、データベース内の Oracle AQ に対する JMS インタフェースであり、Oracle の J2EE 1.3 準拠の JMS プロバイダです。

OC4J 9.0.3 または Oracle9iAS 9.0.3 にデプロイされた JMS Web サービスを実行するには、JMS 実装を OJMS に渡すように OC4J を構成する必要があります。詳細は、Oracle Technology Network の『Oracle9iAS Containers for J2EE - Java Message Service FAQ』(<http://otn.oracle.com/tech/java/oc4j/htdocs/OC4J-JMS-FAQ.html>) を参照してください。

送信操作と受信操作を使用する JMS Web サービスの作成

送信操作と受信操作の両方を使用する JMS Web サービスを作成するときは、Web サービス・クライアントが同じ宛先に対して送受信する必要があることが確かでないかぎり、送信方向と返信方向について別の接続ファクトリと宛先を明示的に指定する必要があります。

JMS Web サービス・ウィザードのステップ 3 で、「受信操作で別の JMS 宛先を使用」を選択し、受信操作の接続ファクトリと宛先を入力します。送信操作とは別の接続ファクトリと宛先を設定する必要があります。

JDK 1.4 での PL/SQL Web サービス・ジェネレータの実行

PL/SQL Web サービス・ジェネレータが、JDK 1.4 において正常に動作するには、Oracle の JDK 1.4 固有の JDBC ドライバを使用して実行する必要があります。これらは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp>) からダウンロードし、`oracle_home/jdbc/lib` ディレクトリに解凍してください。

JDeveloper が JDK 1.4 JDBC ドライバを使用するように構成するには、`oracle_home/jdev/bin/jdev.conf` ファイルを修正する必要があります。次のように変更します。

```
AddJavaLibFile ../../jdbc/lib/classes12.jar
```

この行を次の行で置き換えてください。

```
AddJavaLibFile ../../jdbc/lib/ojdbc14.jar
```

これにより、JDeveloper はすべての JDBC 操作で JDK 1.4 リリースの JDBC ドライバを使用します。

生成されたスタブから Web サービスをコールするときのランタイム・エラー (2389203)

スタブ・クライアントから Web サービスをコールしたときに次のようなランタイム・エラーを取得することがあります。

```
[SOAPException: faultCode=SOAP-ENV:Client; msg=No Deserializer found to deserialize a
'<return' using encoding style
'http://schemas.xmlsoap.org/soap/encoding/'
targetException=java.lang.IllegalArgumentException: No Deserializer found to
deserialize a ':return' using encoding style
'http://schemas.xmlsoap.org/soap/encoding/']
```

これは、戻り値（上記例では 'return'）が認識されない XML 型であることを意味しています。この場合、コマンドを追加して XML 型を適切な型にデシリアライズする必要があります。次のコマンドは、String にデシリアライズするコード例です。

```
m_smr.mapTypes(Constants.NS_URI_SOAP_ENC, new QName("", "return"), null, null, new
org.apache.soap.encoding.soapenc.
StringDeserializer());
```

PL/SQL および JMS Web サービスのモデル化 (2466833)

クラス・ダイアグラム上には、PL/SQL または JMS Web サービスを表示することはできません。

オーバーロードされたメソッドを持つ .NET Web サービスに対するスタブの生成 (2689939)

同じ名前のメソッドが複数含まれる .NET Web サービスに対して生成されたスタブにはメソッドが 1 つしか存在しません。次に例を示します。

```
public Float Add(Float a, Float b) throws Exception;
```

スタブを手動で編集して、オーバーロードされたメソッドを追加する必要があります。次に例を示します。

```
public Float Add(Float a, Float b) throws Exception;
public Integer Add(Integer a, Integer b) throws Exception;
```

JDeveloper のインストール・パスにスペースがある場合に生成された Web サービス・スタブ (3068701)

JDeveloper をインストールしたパスのフォルダのいずれかの名前にスペースが含まれている場合に、Web サービスを生成して、埋込み OC4J サーバーで、または OC4J サーバーの外部インスタンスで実行すると、その Web サービスをコールしたときに Web サービスへのスタブが異常終了します。

対処方法として、フォルダ名にスペースが含まれていないパスに JDeveloper をインストールします。

他の WSDL ファイルを参照する WSDL ファイルに対するスタブの生成 (2627242)

別の WSDL ファイルを参照またはインポートする WSDL ファイルに対してスタブを生成する場合、Web サービス・スタブ / スケルトン・ウィザードは参照またはインポートの対象となる WSDL ファイルを無効と誤認するため、終了できません。

その他の問題

PL/SQL のコンパイル・エラーが表示されない (2688533)

PL/SQL ユニットの名前にスキーマ名が含まれている場合、または名前が引用符で囲まれている場合、あるいはその両方の場合は、JDeveloper の「ログ」ウィンドウにコンパイル・エラーが表示されません。たとえば、コードは次のように記述する必要があります。

```
PROCEDURE my_proc IS
```

次のような記述は避けてください。

```
PROCEDURE scott.my_proc IS
```

または

```
PROCEDURE "MY_PROC" IS
```

列の使用可能な値に対して、表示順序の指定が必要 (2717508)

JDeveloper モジュールの導出元である Designer 表定義の中で、使用可能な値が列に含まれ、その表示順序プロパティが NULL に設定されている場合は、生成された JDeveloper モジュールは無効になります。

JDeveloper 9.0.4 を使用する場合、表示順序プロパティには NULL 以外の値を指定する必要があります。この指定は、Oracle Designer のプロパティ・パレットで行います。

JDeveloper 9.0.5 ではこの動作が変更され、表示順序プロパティの値として NULL も使用できるようになる予定です。

Toystore デモに含まれる古い bc4jstruts.jar ファイル

JDeveloper 付属の Toystore デモには、bc4jstruts.jar というファイルが含まれています。この bc4jstruts.jar は古いので、このファイルを更新しなければデモは正しく動作しません。

このファイルを更新するには、プロジェクトからこのファイルを削除し、oracle_home/BC4J/jlib にある bc4jstruts.jar に置き換えます。

コンテキスト・メニュー「ソースを表示」が動作しなくなる (3146584)

依存性の表示ウィンドウで、要素のコンテキスト・メニュー「ソースを表示」は動作しなくなります。かわりに、Java 要素に対する適切なエディタを起動する項目をダブルクリックします。

プラットフォーム固有の問題および対処方法

UNIX プラットフォームの問題および対処方法

注意： UNIX の問題は、UNIX のすべてのプラットフォームで発生するものでないかぎり、プラットフォーム固有の問題として分類されます。また、プラットフォーム固有の問題は、最初に検出されたプラットフォームでしか報告されないため、プラットフォーム固有として表示される問題が、実際には複数のプラットフォームで発生する可能性があります。別段の注意書きがないかぎり、明記されたプラットフォームでプラットフォーム固有の対処方法のみを使用してください。

UNIX プラットフォームの全般的な問題および対処方法

Sun Java バグ 4751177: エラー・メッセージの無視

UNIX で JDeveloper を実行したときに、次のメッセージが表示されるかもしれませんが、これは無視しても問題ありません。

```
java.lang.SecurityException: Could not lockSystem" or "Oct 23, 2002 4:16:55 PM
java.util.prefs.FileSystemPreferences
checkLockFile0ErrorCodeWARNING: Could not lock System prefs.Unix error code 0.Oct
23, 2002 4:16:55 PM java.util.prefs.FileSystemPreferences syncWorld
WARNING: Couldn't flush system prefs:
java.util.prefs.BackingStoreException:
Couldn't get file lock.
```

これらのエラーは、JDK 1.4 の新しいシステム設定機能によって引き起こされるものです。詳細は、Sun Java バグ 4751177 を参照してください。

UNIX で、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) とともにインストールされている Oracle9i JDeveloper (9.0.4) に対して、SOAP サーバー接続を作成できない (3042893)

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) とともにインストールされている Oracle9i JDeveloper (9.0.4) から、SOAP サーバー接続を作成すると、次の java 例外が発生します。

```
java.lang.Exception: SOAP-ENV:Server: service
'urn:xml-soap-service-management-service' unknown
```

注意： これが発生するのは、Oracle9i JDeveloper 9.0.4 が、Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) とともにインストールされている場合だけです。Solaris、Linux など、すべての UNIX プラットフォームで発生します。スタンドアロンの Oracle9i JDeveloper 9.0.4 では、どのプラットフォームでも発生しません。

Solaris 固有の問題および対処方法

「コード・インサイト」リストでマウスをクリックしても選択できない (2671418)

Solaris で、「コード・インサイト」からの選択にマウスを使用すると、「コード・インサイト」リストが消去され、選択内容が失われます。対処方法として、「コード・インサイト」から選択するときはキーボードを使用します。

表ウィザードで Entity Bean 内のデータベース・オブジェクトを表示しようとすると、長い時間がかかる (2691427)

表ウィザードで Entity Bean 内のデータベース・オブジェクトを表示するときに、非常に時間がかかることがあります。この事象は一般的に、ワークスペースが空で、IDE 内でデータベース接続が定義されていない場合に発生します。対処方法として、データベース・オブジェクトの表示を待っているウィザード・パネルの「戻る」ボタンをクリックし、「次へ」ボタンをクリックします。これで、使用可能な表がすべて表示されます。

JPEG または PNG としてダイアグラムをリモートで Solaris 上に公開 (3142729)

JPEG または PNG のグラフィックとして、ダイアグラムをリモートで Solaris コンピュータに公開すると、ダイアグラム公開処理が終了するまでに時間がかかり、JDeveloper がフリーズしたように見える場合があります。対処方法として、公開処理を Solaris コンピュータで直接実行するか、ダイアグラムを SVG として公開します。

構成に関する問題および対処方法

構成に関する既知の問題はありません。

管理に関する問題および対処方法

管理に関する既知の問題はありません。

ドキュメントの記載内容の誤り

移行に関するドキュメントでの qView から getRowSet への変更 (2723075)

移行に関するドキュメントの中の qView は、getRowSet に読み替えてください。

ドキュメントが BC4J の「ウィザード」を参照している

コンポーネント・エディタで「ヘルプ」をクリックしたときに表示されるヘルプ・ドキュメントでは、「ウィザードまたはエディタ」とすべき箇所が「ウィザード」というコンポーネントになっています。たとえば、エンティティ・オブジェクト・エディタで「ヘルプ」をクリックしたときに表示されるヘルプ・テキストのタイトルは「エンティティ・オブジェクト・ウィザード」となっていますが、本来は「エンティティ・オブジェクト・ウィザードおよびエディタ」となるべきものです。

Oracle Business Intelligence Beans

この章では、次の Oracle Business Intelligence Beans (BI Beans) のトピックについて説明します。

- [概要](#)
- [一般的な問題とその対処方法](#)
- [プラットフォーム固有の問題および対処方法](#)
- [構成に関する問題および対処方法](#)
- [管理に関する問題および対処方法](#)
- [ドキュメントの記載内容の誤り](#)

概要

Oracle Business Intelligence Beans (BI Beans) は、Oracle OLAP の分析用アプリケーションの基本要素として設計できる標準ベースの JavaBeans です。Oracle JDeveloper と BI Beans を使用すると、Web アプリケーションを短期間で簡単に作成できます。このアプリケーションにより、一般的な情報の閲覧者から、非定型の詳細な問合せや分析機能を必要とするハイエンド・ユーザーまでが、Oracle データベースの高度な分析機能を利用できるようになります。詳細は、次のドキュメントを参照してください。

- Oracle Developer Suite 10g インストレーション・ガイド -- Oracle Developer Suite の CD Pack の Start Here に収録されています。
- 動作要件に関しては、次の URL を参照してください (<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>)。このリリースで動作が確認されているデータベース・バージョンとパッチセット、デプロイメント環境について記載されています。
- 「Getting Started with Business Intelligence Beans」-- JDeveloper ヘルプ・システムのトピックです。チュートリアルへのリンクも含まれています。
- BI Beans の API リファレンス -- JDeveloper ヘルプ・メニューからアクセスできます。
- BI Beans のサンプル・コード -- OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の BI Beans 製品の項目からアクセスできます。一般的なアプリケーションのコーディング作業に役立ちます。

注意： BI Beans リリース 10g (9.0.4) は J2SE 1.4.1 との動作が確認されています。キーボードやマウスによるナビゲーション、ダイアログのフォーカスなどの細部の問題がありますが、今後のリリースで解決される予定です。

一般的な問題とその対処方法

チュートリアルとサンプル

サンプル・データベース・スキーマをインストールするときに、SH アカウントがロックされているというメッセージが表示される場合があります。SH メタデータを削除し、BIBDEMO のメタデータのみを使用する場合は、DBA が SH アカウントのロックを解除する必要があります。SH メタデータを削除しない場合は、このエラーを無視してインストール・スクリプトを続行します。BI Beans には、BIBDEMO と SH の両方のメタデータが表示されます。

QueryBuilder と問合せ

- NASuppression オプションを使用する問合せを更新するときに、OLAP API の例外が発生する場合があります。この問題は、Oracle OLAP 9.2.0.4 以上で実行する場合には発生しません。
- BI Beans では、対称と非対称のドリル操作が同時にサポートされていません。そのため、Query オブジェクトの AsymmetricDrilling プロパティをそのオブジェクトの存続期間中に変更しないでください。
- DataDirector で、SuppressionState メソッドを DataDirector.ZERO_SUPPRESSION と DataDirector.NA_ZERO_SUPPRESSION のどちらかに設定しても同じ結果になります。ゼロと NULL はどちらも結果に表示されません。
- 計算と別のお気に入りをお気に入り参照するお気に入りは保存できません。保存しようとすると、NULL ポインタの例外が発生します。
- QueryBuilder を使用して非対称問合せを作成する場合、レイアウト・パネルに行う変更をプレゼンテーションに適用してから、ディメンション・パネルを変更する必要があります。これを実行しないと、例外が発生します。
- 問合せで、非対称のトップ / ボトム・ステップを作成し、ステップの選択がページ・エッジにあるディメンションに依存する場合、エラーが発生します。この問題は、Oracle OLAP 9.2.0.4 以上では発生しません。これ以下の Oracle OLAP に対して実行している場合は、メジャーをページ・エッジから特定のディメンション・メンバーに限定するとこの問題を回避できます。
- BI Beans 9.0.3 または 9.0.4 で保存した問合せに、カスタム・メジャーを参照するお気に入りが含まれていると、その問合せは BI Beans 9.0.2 では使用できません。

プレゼンテーション

- Sun J2SE 1.4 の回帰バグ 4749538 により、円グラフなどの円形の要素を使用したグラフを正確に描画できない場合があります。3D エフェクトを使用している場合は、グラフ上でグラフィックのアンチエイリアシングを使用して 3D エフェクトを削除すると、この問題を回避できます。
- フレーム内に配置した HTML プレゼンテーションを正しく機能させるには、FindMember Bean の BConstants.PAGE_EVENT の EventTarget を設定して、プレゼンテーションが配置されたフレームをターゲットに指定する必要があります。たとえば、プレゼンテーション・フレームの名前が `pres_frame` の場合は、次のコードを FindMember JSP ページに追加します。

```
<%% page import="oracle.dss.thin.beans.BConstants"%>
<%% page import="oracle.dss.thin.beans.EventTargetImpl"%>
<%% page import="oracle.dss.thin.beans.dataView.FindMember"%>
...
/orabi:BIThinSession>
<%
```

```
FindMember f = (FindMember)pageContext.findAttribute("findMember");
EventTargetImpl target=(EventTargetImpl)f.getEventTarget(BIConstants.PAGE_
EVENT);
target.setTargetFrame("pres_frame");
%>
```

- 数値書式にロケールベースの ISO 通貨記号が含まれる場合、その記号は保存されません。そのかわり、プレゼンテーションをロードしたときに、標準のロケールベースの記号（\$ など）が表示されます。

BI Beans カタログ

- 以前のリリースの BI Beans カタログでは、長いディメンション名を持つプレゼンテーションまたはセクションは保存されませんでした。この問題は、リリース 9.0.3.2 以上のカタログをインストールすると回避できます。また、これ以下のリリースのカタログを使用し続ける場合は、次のような対処方法があります。まず、次の SQL*Plus コマンドを `bi_fixcolumnwidth.sql` という名前のスクリプトにコピーします。次に、コピーしたスクリプトを `@bi_fixcolumnwidth` コマンドを使用してコールします。

```
alter table bism_objects modify comp_subtype1 varchar2(256);
alter table bism_objects modify comp_subtype2 varchar2(512);
alter table bism_objects modify comp_subtype3 varchar2(1333);
drop type bism_objects_table_t;
drop type bism_objects_table_new_t;
create or replace type bism_objects_obj_t as object
(
  USER_VISIBLE varchar2(1),
  OBJECT_TYPE_ID number(5),
  VERSION number(6),
  TIME_DATE_CREATED date,
  TIME_DATE_MODIFIED date,
  OBJECT_ID raw(16),
  CONTAINER_ID raw(16),
  FOLDER_ID raw(16),
  CREATED_BY raw(16),
  LAST_MODIFIED_BY raw(16),
  OBJECT_NAME varchar2(1333),
  TITLE varchar2(128),
  APPLICATION varchar2(256),
  DATABASE varchar2(256),
  DESCRIPTION varchar2(1333),
  KEYWORDS varchar2(1333),
  XML clob,
  APPLICATION_SUBTYPE1 varchar2(32) ,
  COMP_SUBTYPE1 varchar2(256),
  COMP_SUBTYPE2 varchar2(512) ,
  COMP_SUBTYPE3 varchar2(1333)
```



```

);
/
create or replace type bism_objects_obj_new_t as object
(
  USER_VISIBLE varchar2(1),
  OBJECT_TYPE_ID number(5),
  VERSION number(6),
  TIME_DATE_CREATED date,
  TIME_DATE_MODIFIED date,
  OBJECT_ID raw(16),
  CONTAINER_ID raw(16),
  FOLDER_ID raw(16),
  CREATED_BY VARCHAR2(64),
  LAST_MODIFIED_BY VARCHAR2(64),
  OBJECT_NAME varchar2(1333),
  TITLE varchar2(128),
  APPLICATION varchar2(256),
  DATABASE varchar2(256),
  DESCRIPTION varchar2(1333),
  KEYWORDS varchar2(1333),
  XML clob,
  APPLICATION_SUBTYPE1 varchar2(32) ,
  COMP_SUBTYPE1 varchar2(256),
  COMP_SUBTYPE2 varchar2(512) ,
  COMP_SUBTYPE3 varchar2(1333)
);
/
create or replace type bism_objects_table_t as table of bism_objects_obj_t;
/
create or replace type bism_objects_table_new_t as table of bism_objects
obj_new_t;
/

```

- JDeveloper を使用してオブジェクトを BI Beans カタログにコピーする場合、「オブジェクトをリモート・カタログにコピー」ウィザードの最初のページで「カタログ・ユーザー」を指定します。このユーザーはランタイム・カタログのルート・フォルダに対して WRITE 以上のアクセス権が許可されている必要があります。
- 次の文字はオブジェクト名に使用できません。¥ / : * ? < > |
- BI Beans カタログでのオブジェクトのコピー時に WAN にパフォーマンス上の問題が発生した場合は、6-11 ページの「JDBC ドライバ」で説明されているように、JDBC Thin ドライバではなく Oracle*i* OCI ドライバを使用することをお勧めします。
- Oracle データベースでは、BI Beans カタログに保存およびリストアするオブジェクトの名前に使用されているキャラクタ・セットと互換性がある必要があります。そのため、データベースのキャラクタ・セットはカタログのキャラクタ・セットと同じかスーパーセットである必要があります。

- BI Beans カタログのフォルダに OLAP カタログ・オブジェクト（すなわち、OLAP カタログのメタデータ・オブジェクト）が含まれている場合、そのオブジェクトと同じ名前の BI Beans オブジェクトを同じフォルダに保存すると、名前が競合します。新しいオブジェクトを保存しても、アプリケーションの実行時にそのオブジェクトは BI Beans エクスプローラに表示されず、ロードされません。その場合は、オブジェクトの名前を変更するか、そのオブジェクトを該当する BI Beans カタログ（つまり、ローカルまたはリモート）から削除する必要があります。
- ローカル・ファイルベースのカタログでファイル操作する場合は、オペレーティング・システムに備わっている機能ではなく、BI Beans エクスプローラを使用する必要があります。BI Designer には独自のローカル・カタログがあります。BI Beans エクスプローラを起動して 1 つの BI Designer のローカル・カタログを表示する手順は、次のとおりです。
 1. コマンド・プロンプトを起動し、`oracle_home/bibbeans/bin` にナビゲートします。
 2. `bi_explorer.bat` (Windows の場合) または `bi_explorer.csh` (UNIX または Linux の場合) を入力します。BI Beans エクスプローラが起動します。
 3. BI Beans エクスプローラの「ファイル」メニューから「接続」を選択します。「カタログに接続」ダイアログが表示されます。
 4. 「選択」を選択します。「カタログを選択」ウィザードが起動します。
 5. ウィザードの最初のページで「ファイル」を「カタログ・タイプ」に指定し、「次へ」を選択します。
 6. 2 番目のページでルート・ディレクトリを指定します。正しいディレクトリを検索して入力するには、JDeveloper を起動します。現在のプロジェクトでローカル・ファイルベースのカタログが含まれている BI Designer を右クリックし、「設定」を選択します。「デザイン設定」タブをクリックします。「ディレクトリ」フィールドに指定されているパスがルート・ディレクトリです。
 7. 「終了」を選択して「カタログに接続」ダイアログに戻ります。
 8. 「ユーザー名」フィールドに名前を指定します。これは BI Beans エクスプローラの「最終変更者」フィールドに表示される名前です。
 9. 「OK」を選択します。ローカル・カタログが表示されます。BI Beans エクスプローラを使用してこのカタログのオブジェクトを操作できます。

一般的なデプロイの問題

HTML クライアント・アプリケーションの場合、UNIX 上でイメージを生成する要件は次のように使用する JDK によって異なります。

- JDK 1.3 -- X サーバーを中間層で実行する必要があります。1つの選択肢として、X Virtual Frame Buffer (XVFB) を使用する方法があります。XVFB はヘッドレス環境 (フレーム・バッファ・ハードウェアのないコンピュータ上で) で実行できます。Sun Solaris 用の XVFB は Oracle Technology Network (http://otn.oracle.com/products/ias/ias_utilities.html) からダウンロードできます。他のプラットフォーム用の XVFB は各プラットフォーム・ベンダーの Web サイトからダウンロードする必要があります。
- J2SE 1.4 -- X サーバーは必要ありません。ただし、ヘルプのトピック「Requirements for the Deployment Environment」に従って、次の Java オプションを追加する必要があります。
-Djava.awt.headless=true

HTML クライアント・アプリケーションをデプロイするための構成手順

OC4J へのデプロイ

JDBC ファイルは次の適切なファイルを使用する必要があります。

- **Oracle Application Server (9.0.3 または 10g) の OC4J -- BI Beans アプリケーション**を Oracle Application Server 10g の一部である OC4J インスタンスにデプロイする場合は、OC4J インスタンスを構成しておく必要があります。詳細は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) にアクセスし、テクニカル・ノート『Oracle9i Business Intelligence Beans - BI Beans アプリケーションのための OC4J インスタンスの設定』を参照してください。テクニカル・ノートには 2 つのバージョンがあります。プラットフォームに対応するテクニカル・ノートを参照してください。

OC4J にデプロイするアプリケーションの移行

Oracle BI Beans 9.0.3 アプリケーションを OC4J 10g (9.0.4) にデプロイする場合は、次の手順を実行する必要があります。

1. public_html/webapp ディレクトリにある BITags.tld ファイルを public_html/WEB-INF ディレクトリにコピーします。
2. web.xml ファイルを開き、<taglib-location> 要素の値を BITags.tld の新しい場所に変更します。たとえば、次のように変更します。

```
<taglib>
  <taglib-uri>http://xmlns.oracle.com/bibeans/</taglib-uri>
  <taglib-location>/WEB-INF/BITags.tld</taglib-location>
</taglib>
```

注意： Oracle[®] JDeveloper (9.0.4) を使用して新しいタグを既存の 9.0.3 Oracle BI Beans アプリケーションに挿入する場合、前述の変更は自動的に実行されます。

Tomcat へのデプロイ

BI Beans アプリケーションをパッケージして Tomcat にデプロイする場合、アプリケーションの web.xml ファイルを編集して、先頭のスラッシュ (/) を url-pattern 要素に追加しておく必要があります。次の例に、アプリケーションの web.xml ファイルの servlet-mapping 要素を示します。スラッシュ (太字で表示) が url-pattern に追加されています。

```
<servlet-mapping>
  <servlet-name>webapp</servlet-name>
  <url-pattern>/webapp</url-pattern>
</servlet-mapping>
```

JBoss へのデプロイ

BI Beans アプリケーションをパッケージして JBoss にデプロイする場合、アプリケーションの application.xml ファイルを編集して、先頭のスラッシュ (/) を context-root 要素に追加しておく必要があります。次の例に、アプリケーションの application.xml ファイルの web 要素を示します。この要素は、生成した EAR ファイルにパッケージされます。スラッシュ (太字で表示) が context-root に追加されています。

```
<web>
  <web-uri>uixappz.war</web-uri>
  <context-root>/uixapp</context-root>
</web>
```

Java Web Start へのデプロイ

このリリースでは Java アプレットのデプロイはサポートされていません。ただし、次の手順の概要に示すように、Java Web Start を使用して、BI Beans Java クライアント・アプリケーションをデプロイできます。説明はバージョン 1.4.2 に適用されます。最新情報は Sun 社の Web サイトにアクセスしてください。バージョン 1.4.2 のドキュメントには <http://java.sun.com/products/javawebstart/developers.html> からアクセスできます。

注意： Java Web Start にデプロイするには、Sun 社の JDK を使用してアプリケーションをコンパイルする必要があります。

1. Web サーバーを Java Web Start 用に設定します。詳細は、『Java Web Start Developer's Guide』（<http://java.sun.com/j2se/1.4.2/docs/guide/jws/developersguide/contents.html>）を参照してください。
2. JDeveloper を使用して Java クライアント・アプリケーションを通常どおりにデプロイします。デプロイメント・プロファイルで次の手順を実行します。
 - アプリケーションを JAR ファイルとしてデプロイします。
 - ライブラリ BIBEANS Runtime、BC4J Runtime、OLAP API 92、Oracle JDBC 92 を含めます。
3. アプリケーションの JAR ファイルに署名する必要があります。詳細は、<http://java.sun.com/j2se/1.4.2/docs/tooldocs/solaris/jarsigner.html>（Solaris の場合）、または <http://java.sun.com/j2se/1.4.1/docs/tooldocs/windows/jarsigner.html>（Windows の場合）を参照してください。
4. このアプリケーションの JNLP ファイル（Java Web Start の構成ファイル）を生成し、<security> 要素にすべてのパーミッションを設定します。
5. JNLP ファイルで <j2se version> を 1.3 に設定します。たとえば、次のように設定します。


```
<resources> <j2se version="1.3"/> <jar .../> </resources>
```

注意: この手順は、J2SE 1.4 で Java Web Start を使用する際のバグを回避するために必要です。J2SE 1.4 を使用する必要がある場合は、このバグを回避するために、JDK バージョン 1.4.2 以上を使用してください。
6. 署名済 JAR ファイルと JNLP ファイルを Web サーバーにコピーします。
7. JNLP ファイルを開く HTML ページを作成します。

国際化の問題

- データをエクスポートする際のデフォルトのキャラクタ・セットは UTF-8 です。別のキャラクタ・セットを使用する場合は、エクスポートの文字コードを次のように指定する必要があります。
 - 生成した JSP アプリケーション -- エクスポート・ページの BIThinSession タグに setExportCharacterEncoding メソッドを使用してエクスポート・エンコードを設定します。たとえば、次のように設定します。


```
<orabi:BIThinSession id="BIThinSession1"
configuration="/Project1BICConfig1.xml">
<orabi:Presentation id="untitled1_Presentation1"
location="Presentation1"/>
<orabi:DialogLink id="untitled1_DialogLink1"
presentationId="untitled1_Presentation1"
```

```
targetPage="untitled2.jsp" targetToolId="untitled2_ExportOptions1"
text="Export" />
<% untitled1_Presentation1.setExportCharacterEncoding("SJIS"); %>
</orabi:BIThinSession>
```

- 生成した uiXML アプリケーション -- biuixappn.java ファイル (n は、JDeveloper プロジェクトの一意の番号) を変更し、`Analyze_preRendering()` メソッドに `dataview.setExportCharacterEncoding` を設定します。たとえば、次のように設定します。 `dataview.setExportCharacterEncoding("SJIS")`
- 生成したサーブレット・アプリケーション -- プロジェクト・ノードの `web.xml` ファイルに `exportCharacterEncoding` パラメータを追加します。Shift-JIS などの IANA エンコード名を使用します。たとえば、次のように設定します。
`exportCharacterEncoding=Shift-JIS`
- JSP を実行するときに、JSP エンコーディングの `charset` 属性の値が `BIThinSession` タグの値と一致しない場合は、エラーが発生します。この問題を回避するには、値を一致させるか、`BIThinSession` から `charset` の値を削除します。

アクセシビリティの制限

- 現行バージョンの JAWS スクリーン・リーダーでは、Java アプリケーション内の表を識別および読み取ることができません。この問題は、BI Beans Help システムが組み込まれた JDeveloper Help システムに発生します。Oracle Technology Network にアクセスすれば、JAWS で表を正しく読み取ることができる形式のスタンドアロンの BI Beans Help システムと統合された JDeveloper Help システムを入手できます。
- その他のアクセシビリティの問題は次のとおりです。
 - QueryBuilder の非表示アイテムのパネルでキーボードが使用できません。
 - J2SE 1.4.1 を使用している場合、キーボードを使用してツールバー・ボタンを操作できません。
 - [Esc] キーを押してもパネルが閉じない場合があります。
 - 線の太さを選択するコンボ・ボックスで、JAWS がラベルを正しく読み取れません。JAWS は、「線の太さ」コンボ・ボックスの <ピクセル数> を読み取るかわりに、「線幅」コンボ・ボックスの <ピクセル数> を読み取ります。
 - JAWS は、「OLAP 接続」ウィザードの一部のパネルの文字を読み取れません。
 - J2SE 1.4.1 を使用する場合、「新規表示形式」ウィザードでショートカット・キーが正しく機能しません。
 - どのグラフ軸の UI パネルで [Tab] キーを押しても、フォーカスが正しく移動しません。

プラットフォーム固有の問題および対処方法

プラットフォーム固有の既知の問題はありません。

構成に関する問題および対処方法

JDBC ドライバ

ドライバの自動アップグレード

BI Beans には Oracle9i リリース 2 JDBC ドライバが必要です。これは BI Beans に同梱されています。ただし、JDeveloper に同梱されているのはリリース 1 のドライバであるため、アップグレード・プログラムを実行するまで BI Beans 関連の操作を実行できません。BI Beans 設計時ウィザードにアクセスするか BI Designer のオブジェクトを開く場合に、アップグレード・プログラムを実行するように要求されます。

注意： BI Beans 10g (9.0.4) では、JDBC JAR ファイルの場所が変更されているため、リリース 9.0.3 でアップグレードしていても、もう一度アップグレードする必要があります。

アップグレード・プログラムは次の手順を実行します。

- `oracle_home/bibeans/jdbc/lib_92` ディレクトリにあるリリース 2 JDBC JAR ファイルが `oracle_home/jdev/lib/patches` ディレクトリにコピーされます。この変更は JDeveloper 環境全体に反映されます。
- BI Beans オブジェクトを追加するプロジェクトに対して「プロジェクトの設定」が自動的に実行されます。

この自動手順により、新しい BI Beans プロジェクトを作成する場合でも、既存のプロジェクトを使用する場合でも、適切なドライバおよび設計時設定を使用できるようになります。

ドライバの手動アップグレード

プロジェクトが自動的にアップグレードされていない場合は、次の手順を実行してプロジェクトを実行し、デプロイする必要があります。

- **実行するには** -- アプリケーションを実行する前に、「プロジェクトの設定」を次のように編集します。手順の詳細は、Oracle Developer Suite 10g のインストレーション・ガイドを参照してください。
 - UNIX プラットフォームの場合は、`-Djava.ext.dirs=oracle_home/jdev/lib/patches` を Java オプションに追加し、`oracle_home` をフルパスに置き換えます。Windows の場合は、`oracle_home¥jdev¥lib¥patches` を追加します。この設定は Java クライアント・アプリケーションで重要ですが、HTML クライアント・アプリケーションでは特に重要です。
 - 「選択済のライブラリ」リストの Oracle JDBC を Oracle JDBC 92 に置き換えます。
- **デプロイするには** -- JDeveloper にデプロイメント・プロファイルを作成する前に、次のいずれかを実行します。
 - HTML クライアント・アプリケーションの場合は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) にアクセスし、テクニカル・ノート『Oracle9i Business Intelligence Beans - BI Beans アプリケーションのための OC4J インスタンスの設定』を参照してください。テクニカル・ノートには 2 つのバージョンがあります。プラットフォームに対応するテクニカル・ノートを参照してください。
 - Java クライアント・アプリケーションの場合は、すでにプロジェクトの設定を編集し、Oracle JDBC を Oracle JDBC 92 に置き換えている場合は、さらに変更する必要はありません。まだ置き換えていない場合は、前述の手順に従い、「プロジェクトの設定」を編集します。

元のドライバへのリストア

元のドライバにリストアするには、次の手順を実行します。

1. `oracle_home/jdev/lib/patches` ディレクトリから `classes12.jar`、`classes12dms.jar` および `nls_charset12.jar` を削除します。
2. Java オプション `-Djava.ext.dirs` を削除します。
3. 選択したライブラリ・リストから Oracle JDBC 92 を削除し、Oracle JDBC に置き換えます。

Thin ドライバから OCI ドライバへの変更

アプリケーションでデフォルトの Oracle JDBC Thin (Pure Java) ドライバではなく Oracle JDBC Thick (OCI) ドライバを使用する必要がある、BI Beans 付属のデフォルトのプラグイン接続ドライバを使用している場合は、アプリケーション構成ファイルを編集する必要があります。編集するには、次のいずれかの手順を実行します。

- **BI Designer によって生成された JDeveloper 内の構成ファイルを編集する場合** -- BI Designer を右クリックし、「設定」を選択します。「実行設定」タブを選択し、変更する接続に「新規」または「編集」のいずれかを選択し、表示されるウィザードの手順に従います。ドライバ・タイプが接続定義に含まれています。BI Beans カタログとデータ・ソースの一方または両方の接続を指定できます。
- **構成ファイルを直接編集する場合** -- project ディレクトリの下で src ディレクトリで構成ファイルを検索します。ファイル名は `project_namebiconfig#.xml` です。# は JDeveloper プロジェクト内の一意の番号です。ファイル内で、`<PersistenceConnection>` 要素 (BI Beans カタログ接続) と `<OLAPConnection>` 要素 (データ接続) を検索します。一方または両方の要素の `JdbcDriverType` の値を `oci8` に変更します。

BI Beans 構成診断ユーティリティ

BI Beans にはクライアント環境の構成を検証し、レポートするユーティリティが含まれています。この構成診断ユーティリティの目的は、問題を診断するために構成に関する情報を収集することです。このユーティリティには、BI Beans、JDeveloper および Oracle データベースのリリース番号などの情報を表示する機能や、OLAP カタログのメタデータに診断テストを実行する機能があります。詳細は、`oracle_home/bibeans/bi_checkconfig/bi_checkconfig_tn.html` を参照してください。

ただし、ユーティリティを実行する前に、JDBC ドライバを新しいバージョンにアップグレードする必要があります。アップグレード手順は、[6-11 ページの「JDBC ドライバ」](#)を参照してください。詳細は、ユーティリティに関するテクニカル・ノート (`oracle_home/bibeans/bi_checkconfig/bi_checkconfig_tn.html`) を参照してください。

接続

- `Connection` オブジェクトの `executeCommand` メソッドが、64 ビット UNIX サーバー・インスタンスに接続される BI Beans アプリケーションで機能しない場合があります。この問題が発生した場合は、JDBC 接続で DBMS_AW PL/SQL パッケージを使用することで回避できます。
- J2SE 1.4 の変更に伴い、BI Beans リリース 9.0.3 では、`BIException` クラスとそのサブクラスの `getCause` メソッド名が `getBIRootCause` に変更されています。

管理に関する問題および対処方法

管理に関する既知の問題はありません。

ドキュメントの記載内容の誤り

ドキュメントの記載内容に関する既知の誤りはありません。

Oracle Discoverer Administrator

この章では、Oracle Discoverer Administrator (Discoverer Administrator) の問題とその対処方法について説明します。この章は次の項目で構成されています。

- 一般的な問題とその対処方法
- プラットフォーム固有の問題および対処方法
- 構成に関する問題および対処方法
- 管理に関する問題および対処方法
- 有益な情報
- ドキュメントの記載内容の誤り

一般的な問題とその対処方法

この項では、Oracle Discoverer Administrator の一般的な問題とその対処方法について記載します。

Oracle Discoverer 9.0.4 をインストールした後に 9.0.2 を起動すると表示されるエラー・メッセージ「要求されたファイルが見つかりません。: dcmresus.msb」(3125060)

Oracle Discoverer Administrator 9.0.2 がインストールされた同じコンピュータに Discoverer Administrator 9.0.4 をインストールした場合、Windows の「スタート」メニューから Discoverer Administrator 9.0.2 を起動すると、次のエラー・メッセージが表示されます。

要求されたファイルが見つかりません。: dcmresus.msb

複数の Oracle ホームを有する 1 台のコンピュータ上で特定のライブラリをロードする問題が原因でメッセージが表示されます。また、Windows のエクスプローラから dis51adm.exe をダブルクリックして Discoverer Administrator 9.0.2 を起動する場合も同じエラー・メッセージが表示されます。

この問題に対処するには、次の作業を実施します。

- **対処方法 1:** Windows コマンドラインから Discoverer Administrator 9.0.2 を実行します。手順は次のとおりです。
 1. Windows の「スタート」メニューから、「コマンド プロンプト」を選択して「コマンド プロンプト」ウィンドウを表示します。
 2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
902_oracle_home¥discoverer902¥bin¥dis51adm.exe
```

902_oracle_home には、Discoverer Administrator 9.0.2 がインストールされているディレクトリを指定します。
- **対処方法 2:** バッチ・ファイルから Discoverer Administrator 9.0.2 を実行します。手順は次のとおりです。
 1. テキスト・エディタ（メモ帳など）で新規ファイルを開きます。
 2. 新規テキスト・ファイルに次のように入力します。

```
dis51adm.exe
```
 3. このファイルをディレクトリ 902_oracle_home¥discoverer902¥bin に保存します。ファイル名には .bat の拡張子を付けます（たとえば、startdiscoadmin902.bat のようになります）。

4. Discoverer Administrator 9.0.2 を起動するには、次のいずれか、または両方の手順を実行します。
 - Windows のエクスプローラで、新規に作成した .bat ファイルをダブルクリックします。
 - 「プログラム」メニューの「Discoverer Administrator 9.0.2」への既存のショートカットを新しい .bat ファイルへのショートカットに置き換えます。

注意： 前述の対処方法は、すでに Oracle Home Selector（通常、複数の Oracle ホームを作成しているコンピュータに必要）を使用していることを前提にしています。

Oracle Discoverer Administrator に異機種間データ・サービスを使用する場合に表示される ORA-3113 エラー・メッセージ (2671291)

Discoverer Administrator を使用して Oracle 以外のデータ・ソースのデータにアクセスする場合（ビジネスエリアを作成する場合など）、エラー・メッセージ ORA-3113 が表示されます。その場合は、次を実行します。

- 最新のバージョンの Oracle データベース（リリース 9.0.1.4 以降）を使用します。

JOB_QUEUE_INTERVAL 設定と Oracle Applications ユーザー (2883736)

『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』では、JOB_QUEUE_INTERVAL パラメータを 600 に設定するように推奨されています。ただし、この 600 は Oracle Applications に Discoverer を使用していない場合にのみ適した値です。Oracle Applications に Discoverer を使用する場合は、JOB_QUEUE_INTERVAL パラメータをデフォルトの 90 の値に設定してください。

Oracle Discoverer 9.0.2 で作成されたバッチ・リポジトリの更新の推奨 (2777560)

BATCHUSR.SQL スクリプト (`oracle_home¥discoverer¥sql`) では、スケジュール済ワークブック（旧バージョンの Discoverer ではバッチ・リポジトリ・ユーザーに相当）の結果を保存するスキーマが作成されます。

BATCHUSR.SQL スクリプト (`oracle_home¥discoverer¥sql`) は、Discoverer 9.0.2 から 9.0.4 に移行する際に更新されています。

更新された BATCHUSR.SQL スクリプトには次の 2 つの特長があります。

- このスクリプトでは、スケジュール済ワークブックの結果スキーマを作成および管理する場合に、データベースのセキュリティが強化されています。不要な権限は削除されます。

- このスクリプトでは、スケジュール済ワークブックに使用される SQL 文のサイズの上限が 32KB から 64KB に増加しています。SQL 文のサイズの上限が増加することで、Oracle データベースにサポートされる上限も増加します。この増加により、特にワークブックをスケジュールする際にエラー・メッセージ「最大問合せサイズを超えました。」が表示されていた問題が解消されます。

この更新により、現在のスケジュール済ワークブックが上書きされたり、影響されることはありません。

Discoverer 9.0.2 で作成された EUL を使用している場合は、これらのフィックスを適用するようにオラクル社では推奨しています。データベースにデータベース管理者（たとえば、SYSTEM）として接続し、BATCHUSR.SQL スクリプトを実行すると簡単に適用できます。

Discoverer 9.0.4 で作成された EUL を使用している場合は、スケジュール済ワークブックの結果スキーマを作成するときに、更新された BATCHUSR.SQL スクリプトを使用できるため、対処する必要はありません。

プラットフォーム固有の問題および対処方法

プラットフォーム固有の既知の問題は現在ありません。

構成に関する問題および対処方法

構成に関する既知の問題は現在ありません。

管理に関する問題および対処方法

管理に関する既知の問題は現在ありません。

有益な情報

この項では、Oracle Discoverer Administrator に役立つ情報について記載します。

Oracle Discoverer 3.1 からのアップグレード

Oracle Discoverer 3.1 からアップグレードする場合は、『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』に記載されている手順の中の EUL から Discoverer 4.1 にアップグレードするための要件を参照してください。

このアップグレードに必要な Oracle Discoverer Administration Edition 4.1 をまだ入手していない場合は、Internet Developer Suite (1.0.2) の CD Pack を入手して、Discoverer Administrator Edition 4.1 をご使用ください。

End User Layer 表の手動による編集

End User Layer (EUL) 表とその内容は、オラクル社カスタマ・サポート・センターの指示がないかぎり、(SQL*Plus などを使用して) 手動で編集しないでください。EUL 表の手動による編集はサポートされていません。手動で変更した場合、EUL が破損することがあります。

HWOnline ファイルの入手

Oracle Discoverer の前のバージョンには、HWOnline.htm と Memo.doc というファイルが同梱されていました。これらのファイルは、ドリル・アウト機能のデモに使用されていたものです。これらのファイルとその使用方法に関しては、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp/>) を参照してください。

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java のコマンドに使用する Oracle Discoverer レジストリ変数の設定

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java によって提供されるコマンドを使用する場合は、次に示すように特定の Discoverer レジストリ変数を明示的に設定する必要があります。

コマンド	Discoverer レジストリ変数
-export	■ ArchiveCacheFlushInterval ■ FormatXML ■ ExportJoinFromMaster
refresh_object	■ DefaultPreserveDisplayPropertyForRefresh ■ EnableTriggers
-import	■ FormatXML
-connect -apps_user	■ AppsFNDNAM ■ AppsGWYUID
-load	■ SetNULLItemHeadingOnBulkLoad ■ MaxNumberJoinPredicates
すべてのコマンド	■ SqlTrace

Windows プラットフォームの場合、Discoverer レジストリ変数は Windows レジストリに保存されます。UNIX プラットフォームの場合、Discoverer レジストリ変数は .reg_key.dc ファイルに保存されます。

これらの Discoverer レジストリ変数を設定するには、次のいずれかの手順を実行します。

- **Windows のみの場合:** regedit または regedt32 を使用して Windows レジストリを編集し、必要なレジストリ変数の値を指定します。
- **Windows と UNIX の場合:** コマンド・プロンプトで次のコマンドを入力して、必要なレジストリ変数の値を指定します。

```
dis51pr -setadminpref registry_variable_name value
```

Discoverer レジストリ変数の説明、デフォルト値、許容値などの詳細は、次のマニュアルを参照してください。

- 『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』
- 『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』

その他の Oracle Discoverer レジストリ変数

『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』と『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』に記載されている以外にも、次の Discoverer レジストリ変数を使用できます。

カテゴリ	Discoverer レジストリ変数	説明	デフォルト	有効値
データベース	DefaultPreserve DisplayProperty ForRefresh	リフレッシュ時に、更新されたアイテム説明を破棄して元のアイテム説明に置き換えるか、または更新されたアイテム説明を保存するかを指定します。	0	■ 0 = 更新された説明を使用 ■ 1 = 元の説明を使用
データベース	EnableTriggers	データベース・トリガーを無効にするかどうかを指定します。 たとえば、リフレッシュ時に見つかったあらゆる新しい列に対するデータベース・コールが Discoverer によって試行されます。この値を 0 に設定した場合、Discoverer によるデータベース・コールは実行されません。	0	■ 0 = データベース・トリガーを無効化 ■ 1 = データベース・トリガーを有効化

(続き)

カテゴリ	Discoverer レジストリ変数	説明	デフォルト	有効値
データベース	ExportJoinFrom Master	ビジネスエリアのエクスポート時に、マスター・フォルダに基づく結合もエクスポートするかどうかを指定します。	0	■ 0 = マスター・フォルダに基づく結合をエクスポートする ■ 0 以外の値 = マスター・フォルダに基づく結合をエクスポートしない
データベース	SetNULLItem HeadingOnBulk Load	バルク・ロードの実行時に、アイテム見出しをアイテム表示名と同じ値に設定するか、または NULL に設定するかを指定します。	0	■ 0 = アイテム見出しをアイテム表示名に設定する ■ 1 = アイテム見出しを NULL に設定する

スケジュール済ワークブックの結果スキーマに必要な権限

スケジュール済ワークブックの実行に必要なシノニム v\$parameter への SELECT 権限を許可する方法

スケジュール済ワークブックを実行するには、スケジュール済ワークブックの結果スキーマに、シノニム v\$parameter への SELECT 権限が必要です。シノニム v\$parameter への SELECT 権限は、本来のビュー v_\$parameter で SELECT 権限を取得することにより付与されます。

しかし、v_\$parameter ビューは一般ユーザーからアクセスできず、SYS ユーザーによって所有されています。そのため、スケジュール済ワークブックの結果スキーマに対して、v_\$parameter (およびそのシノニムである v\$parameter に対しても) の SELECT 権限を付与するには、SYS ユーザーとしてログインし、その権限を明示的に付与する必要があります。

スケジュール済ワークブックの結果スキーマの詳細は、『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』の第7章のスケジュール済ワークブックの結果を含む表の所有者の指定方法についての項を参照してください。

v_\$parameter への SELECT 権限を付与する方法は、次のように Oracle データベースのバージョンによって異なります。

■ Oracle9i データベースを使用している場合：

1. SQL*Plus をまだ起動していない場合は起動し、SYS ユーザーとして（または SYSDBA 権限が付与されているユーザーとして）接続します。

たとえば、SQL*Plus がすでに起動している場合、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT SYS/sys_pw@database AS SYSDBA;
```

sys_pw には SYS ユーザーのパスワードを指定します。SYS ユーザーとしてログインできない場合、または SYS パスワードがわからない場合は、データベース管理者に確認してください。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> grant SELECT on v_$parameter to user;
```

user にはスケジュール済ワークブックの結果スキーマの名前を指定します。

■ Oracle9i よりも前のバージョンの Oracle データベースを使用している場合：

1. データベース・サーバー・コンピュータで DBA ファシリティを起動し、SYS ユーザーとしてログインします（たとえば、Windows コンピュータで Windows の「スタート」メニューから「ファイル名を指定して実行」を選択し、「SVRMGRL」と入力します）。
2. DBA ファシリティで「connect internal」と入力します。
3. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> grant SELECT on v_$parameter to user;
```

user にはスケジュール済ワークブックの結果スキーマの名前を指定します。

スケジュール済ワークブックの結果スキーマに *v_\$parameter* への SELECT 権限が付与されたことを確認するには、次の手順に従います。

1. SQL*Plus をまだ起動していない場合は起動し、スケジュール済ワークブックの結果スキーマとして接続します。

たとえば、SQL*Plus がすでに起動している場合、コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> CONNECT user/user_pw@database;
```

user にはスケジュール済ワークブックの結果スキーマのユーザー名を指定し、*user_pw* にはスケジュール済ワークブックの結果スキーマのパスワードを指定します。

2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
SQL> select count (*) from v$parameter;
```

v_\$parameter ビューへの SELECT 権限がスケジュール済ワークブックの結果スキーマに付与されている場合は、SQL*Plus に v\$parameter シノニムの行数が表示されます。

v_\$parameter ビューへの SELECT 権限がスケジュール済ワークブックの結果スキーマに付与されていない場合は、SQL*Plus に次のメッセージが表示されます。

```
ORA - 01031 権限が不足しています。
```

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java の実行（UNIX のみ）

UNIX で Oracle Discoverer EUL Command Line for Java を実行するには、環境変数を正しく設定する必要があります。環境変数は次に示すように discwb.sh スクリプトを使用して明示的に設定することも、eulapi スクリプトを使用して黙示的に設定することもできます。

- Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを発行する前に環境変数を明示的に設定するには、そのコマンドを発行するコマンドライン・プロンプトに次のコマンドを入力します。

```
oracle_home_path/discoverer/discwb.sh
```

この後に、次のように Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを入力できます。

```
java -jar oracle_home_path/discoverer/lib/eulbuilder.jar -command_list
```

たとえば、「Sales1」という名前のフォルダをリフレッシュするには、次のように入力します。

```
java -jar oracle_home_path/discoverer/lib/eulbuilder.jar -connect jchan/12345@my_database -refresh_folder Sales1
```

- Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを実行するときに、環境変数を黙示的に設定するには、ディレクトリ oracle_home_path/bin にある eulapi スクリプトを使用してそのコマンドを実行します。たとえば、「Sales1」という名前のフォルダをリフレッシュするには、次のように入力します。

```
oracle_home_path/bin/eulapi -connect jchan/12345@my_database -refresh_folder Sales1
```

ヒント:eulapi スクリプトを実行するたびに、oracle_home_path/bin を入力しなくても済むようにするには、最初に discwb.sh を実行します。

Oracle Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF)

Oracle Discoverer による Real Application Cluster (RAC) コンピュータ上の透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF) のサポートには、select のフェイルオーバー・モードが必要です。tnsnames.ora エントリの例を次に示します。

```
NAME =
  (DESCRIPTION=
    (ADDRESS=
      (PROTOCOL=tcp)
      (HOST=servername)
      (PORT=1521))
    (CONNECT_DATA=
      (SERVICE_NAME= NAME)
      (FAILOVER_MODE=
        (TYPE=select)
        (METHOD=basic)
        (RETRIES=4)
        (DELAY=15))))
```

RETRIES と DELAY には、前述の例で指定した値（それぞれ 4 と 15）を最初に設定するよう推奨しています。ただし、使用するコンピュータに応じてこれらの値を増やすことができます。

使用例によっては、フェイルオーバーが生じた場合にエンド・ユーザーに対しエラー・メッセージが表示されることがあります。エラー・メッセージを確認すると、セッションは通常どおり継続されます。このような使用例の修正は、9.0.4 リリースのパッチ・リリースとして予定されています。

Oracle Warehouse Builder で使用する系統ワークブックのインストール

Oracle Warehouse Builder (OWB) Discoverer ブリッジの説明は、『Oracle Warehouse Builder ユーザーズ・ガイド 10g リリース 1 (10.1)』（部品番号 B13517-01）の第 22 章「その他の BI 製品と Warehouse Builder のメタデータの統合」を参照してください。

系統ワークブックを使用する場合は、最初に OWB と Discoverer ブリッジを使用して Discoverer EUL を生成する必要があります。Discoverer ブリッジにより、OWB 内のフォルダや項目の系統を保持する Discoverer インポート・ファイル (.eex) が生成されます。これにより、この .eex ファイルを Discoverer EUL にインポートできます。系統ワークブックは、次の方法で生成されたビジネス領域内でのみ有効です。

1. Oracle Discoverer Administrator に Discoverer EUL のスキーマ所有者としてログインします。
2. lineage.eex ファイルをインポートします。
3. SQL*Plus に Discoverer EUL のスキーマ所有者としてログインします。

例

```
> SQLPLUS myeul/myeul@myconnection
```

4. lineage.sql ファイルを実行します。

例

```
SQL> start d:¥%ORACLE_HOME%¥discoverer¥lineage.sql
```

このスクリプトでは、次の情報の入力と確認を求められます。

- OWB URL マシン名・ドメイン名 : ポート
例 : http://myserver.us.mycompany.com:7777
- mod_plsql への OWB 仮想パス (デフォルトは pls)
例 : pls
- OWB データベース・アクセス記述子 DAD (デフォルトは portal30)
例 : portal30
- OWB ブラウザ・スキーマ
例 : myowbinstall
- OWB のホスト名 (OWB リポジトリを実行するマシン名)
例 : myserver
この名前は、OWB ブラウザ登録で使用する名前と正確に一致する必要があります。
- OWB SID (データベース・インスタンス名)
例 : ASdB
- OWB リポジトリの格納先となる OWB スキーマ
例 : owbrep

5. OracleAS Discoverer Plus、OracleAS Discoverer Viewer、または Oracle Discoverer Desktop に、EUL のスキーマ所有者としてログインし、系統ワークブックを開きます。

EUL をエクスポートして再度インポートする場合は、lineage.sql ファイルを再度実行する必要があります。

また、あらかじめ EUL5.eex ファイルがインポート済の場合は、すでに系統ワークブックがデータベースに存在します。この場合に必要な作業は、lineage.sql ファイルの実行のみです。

日本語版の系統ワークブックは、別途 CD Pack に同梱されています。詳細は、本リリース・ノート第 1 章「日本語環境での使用上の注意」(CD Pack に同梱されるパッチの適用について)の「Oracle Discoverer 定義済ワークブックの日本語版」を参照してください。

Discoverer ワークブック・ダンプ・ユーティリティの使用法

Discoverer Administrator には、ワークブック・ダンプ・ユーティリティ（d51wkdump.exe）があります。これにより、Discoverer Desktop でワークブックを開かなくても、ワークブックで使用されている EUL 要素を確認できます。このユーティリティは、ワークブックを開けないとき（結合が欠落している場合など）には特に役に立ちます。

ワークブックを分析するには、コマンド・プロンプトで d51wkdump.exe ファイルを実行します。この d51wkdump.exe ファイルは、%ORACLE_HOME%\bin ディレクトリにあります。

ワークブック・ダンプ・ユーティリティを使用するための構文は次のとおりです。

```
d51wkdump <Workbook_Name> <Output_File> <DB|FS> <Connect_String>
<Eul_Schema> -f
```

パラメータの詳細は、次の表に示します。

パラメータ	必須またはオプション	説明
<Workbook_Name>	必須	調査するワークブックの名前（ファイル・システムに格納されている場合はそのパスも含む）。
<Output_File>	必須	出力先のファイル。
<DB FS>	必須	DB = データベースのワークブックを開く。 FS = ファイル・システムのワークブックを開く。
<Connect_String>	必須	ユーザー名、パスワードおよびデータベース SID の組合せ。例：user/passwd@database。
<Eul_Schema>	必須	EUL 表を所有するデータベース・ユーザーの名前。
-f	オプション	指定の EUL に特定の要素があるかどうかを調査するときなど、ワークブックが使用する EUL オブジェクトの詳細を出力するために、このパラメータを使用します。

注意点：

- 接続文字列やワークブック名に空白を使用するときは、その接続文字列またはワークブック名を二重引用符で囲みます。
- パラメータは、前述の構文どおりの順序で指定します。
- データベース内にあるワークブックについては、そのワークブックが接続文字列で指定した名前のユーザーに所有されている場合のみ分析可能です。

- `eul_schema` パラメータには、大文字と小文字を正確に入力する必要があります。つまり、EUL が SDC というユーザーによって所有されている場合、SDC と入力する必要があります。ここで、`sdc` と入力すると、次のようなエラー・メッセージが表示されます。

Connect Error - EUL schema is not accessible. EUL 表を含むデフォルト・スキーマまたは指定スキーマにアクセスできません。

次に、Discoverer チュートリアルの一部である Video Tutorial Workbook の使用例を示します。この例は、ワークブック・ダンプ・ユーティリティの出力を示しています。

例 1: 次のコマンドを実行すると、Video Tutorial Workbook の内容が `video.txt` ファイルに出力されます。この例では、`-f` オプションを指定しません。

```
d51wkdump "Video Tutorial Workbook" video.txt DB
disco/disco@orcl.world disco
```

`video.txt` ファイルの内容は次のとおりです。

```

////////////////////////////////////
Sheet Number 1
////////////////////////////////////
Sheet Name = Tabular Layout
Sheet Unique Name = {8690F66A-B9C8-11D1-ADB2-0080C7CDEA89}
Query(s) used =
Query 1
Items :-
EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
EUL Item - Video Analysis Information.Department
EUL Item - Video Analysis Information.Region
Calculation - Profit SUM
Sort On   EUL Item - Video Analysis Information.Region
Filters :-
EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video Rental or Video Sale
////////////////////////////////////
Sheet Number 2
////////////////////////////////////
Sheet Name = Crosstab Layout
Sheet Unique Name = {8690F66B-B9C8-11D1-ADB2-0080C7CDEA89}
Query(s) used =
Query 2
Items :-
EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
EUL Item - Video Analysis Information.Department
EUL Item - Video Analysis Information.Region
Calculation - Profit SUM
Filters :-
EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video Rental or Video Sale
////////////////////////////////////
```

例 2: 次のコマンドを実行すると、Video Tutorial Workbook の内容が video.txt ファイルに出力されます。この例では、-f オプションを指定します。

```
d51wkdump "Video Tutorial Workbook" video.txt DB
disco/disco@orcl.world disco -f
```

video.txt ファイルの内容は次のとおりです。

```
EUL Item Reference
  IoId = 16
  Id = 100177
  Identifier = REGION
  Name = Region
  Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
  Folder Name = Video Analysis Information
  *** Found in EUL by Identifier ***
EUL Item Reference
  IoId = 24
  Id = 100153
  Identifier = DEPARTMENT
  Name = Department
  Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
  Folder Name = Video Analysis Information
  *** Found in EUL by Identifier ***
EUL Item Reference
  IoId = 32
  Id = 100175
  Identifier = PROFIT
  Name = Profit
  Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
  Folder Name = Video Analysis Information
  *** Found in EUL by Identifier ***
EUL Private Item
  Id = -105
  Name = Profit SUM
  Identifier = 1
  Desc = Total profit for one store, one product in one day
  DataType = 2
  Placement = 1
  Hidden = 0
  IsACalc = 0
  IOFormula = [1,1] ([6,32])
  DisplayFormula = SUM(Profit)
EUL Item Reference
  IoId = 41
  Id = 100139
  Identifier = CALENDAR_YEAR
  Name = Calendar Year
```



```

Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
Folder Name = Video Analysis Information
*** Found in EUL by Identifier ***
EUL Filter Reference
Id = 100218
Identifier = DEPARTMENT_IS_VIDEO_RENTAL_OR_VIDEO_SALE
Name = Department is Video Rental or Video Sale
Folder Identifier = DC_VIDEO_ANALYSIS_INFORMATION
Folder Name = Video Analysis Information
*** Found in EUL by Identifier ***
EUL Sort Item Reference
Item = EUL Item - Video Analysis Information.Region
Identifier = 14
Direction = 1
Query Request QR1
Distinct = 1
Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Department
Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Region
Measure Item Usage - Name = Calculation - Profit SUM
Sort Item Usage - Name = Sort On EUL Item - Video Analysis
Information.Region
Filter Usage - Name = EUL Filter - Video Analysis Information.Department is
Video Rental or
Video Sale
Identifier = 58
////////////////////////////////////
Sheet Number 1
////////////////////////////////////
Sheet Name = Tabular Layout
Sheet Unique Name = {8690F66A-B9C8-11D1-ADB2-0080C7CDEA89}
Sheet Identifier = 7
Query(s) used =
Query 1
Items :-
EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
EUL Item - Video Analysis Information.Department
EUL Item - Video Analysis Information.Region
Calculation - Profit SUM
Sort On EUL Item - Video Analysis Information.Region
Filters :-
EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video Rental or Video Sale
////////////////////////////////////
Query Request QR2
Distinct = 1
Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Department

```

```
Axis Item Usage - Name = EUL Item - Video Analysis Information.Region
Measure Item Usage - Name = Calculation - Profit SUM
Filter Usage - Name = EUL Filter - Video Analysis Information.Department is
Video Rental or
Video Sale
Identifier = 95
////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////
Sheet Number 2
////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////
Sheet Name = Crosstab Layout
Sheet Unique Name = {8690F66B-B9C8-11D1-ADB2-0080C7CDEA89}
Sheet Identifier = 12
Query(s) used =
Query 2
Items :-
EUL Item - Video Analysis Information.Calendar Year
EUL Item - Video Analysis Information.Department
EUL Item - Video Analysis Information.Region
Calculation - Profit SUM
Filters :-
EUL Filter - Video Analysis Information.Department is Video Rental or Video Sale
////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////////
```

ドキュメントの記載内容の誤り

この項では、ドキュメント内容の既知の誤りについて記載します。

アイテム・クラス・ウィザード：「属性の選択」ダイアログの説明

『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』の「[アイテム・クラス・ウィザード：属性の選択] ダイアログ」の説明に関する「注意」には、次の箇条書きを追加してください。

- 値リストに使用する項目とソート順序に使用する項目には、1 対 1 の関係が存在している必要があります。

/export (EUL オブジェクト) 例の訂正

『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』の「/export (EUL オブジェクト)」の例は、次のように訂正します。

eul_sales という名前の EUL にある、2 つのビジネスエリア「Test BA」と「Final BA」をファイル export.eex にエクスポートし、ログ・ファイル export.log に書き込むには、次のコマンドを入力します。

```
dis51adm.exe /connect me/mypassword /export export.eex /business_
area "Test BA" /business_area "Final BA" /all /eul eul_sales /log
export.log
```

Oracle Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを実行する構文例に欠落している '-jar'

『Oracle Discoverer EUL Command Line for Java ユーザーズ・ガイド』の「Discoverer EUL Command Line for Java コマンドの実行方法」および「ワイルドカードを使用した EUL オブジェクトの指定」の項にあるコマンドライン構文の例では "-jar" が欠落しています。Oracle Discoverer EUL Command Line for Java コマンドを実行する場合は、次の構文を使用してください。

```
java -jar eulbuilder.jar -command list
```

スケジュール・ワークブックと、Discoverer の現行リリースおよび以前のリリースとの間の互換性

『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』の「スケジュール・ワークブックと、Discoverer の現行リリースおよび以前のリリースとの間の互換性」の項には次の説明があります。

この場合は、SQL スクリプト batchusr.sql を使用して、新しいバッチ PL/SQL パッケージ (EUL5_BATCH_USER) をインストールする必要があります。

この文を次のように訂正します。

この場合は、SQL スクリプト batchusr.sql を使用して、新しいバッチ PL/SQL パッケージ (EUL5_BATCH_REPOSITORY) をインストールする必要があります。

<ORACLE_HOME>%discoverer%util は、<ORACLE_HOME>%discoverer%sql

『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』と『Oracle Discoverer Administrator チュー
トリアル』の中で、指示されているファイルの場所に誤りがあります。

次のように置き換えてください。

(誤)

```
<ORACLE_HOME>%discoverer%util
```

(正)

```
<ORACLE_HOME>%discoverer%sql
```

たとえば、次のパスは、

```
<ORACLE_HOME>%discoverer%util%eul5_id.sql
```

次のパスに置き換えます。

```
<ORACLE_HOME>%discoverer%sql%eul5_id.sql
```

Oracle Discoverer Desktop

この章では、Oracle Discoverer Desktop（Discoverer Desktop）の問題とその対処方法について説明します。この章は次の項目で構成されています。

- 一般的な問題とその対処方法
- プラットフォーム固有の問題および対処方法
- 構成に関する問題および対処方法
- 管理に関する問題および対処方法
- 有益な情報
- ドキュメントの記載内容の誤り

一般的な問題とその対処方法

この項では、Oracle Discoverer Desktop の一般的な問題とその対処方法について記載します。

Oracle Discoverer 9.0.4 をインストールした後に 9.0.2 を起動すると表示されるエラー・メッセージ「要求されたファイルが見つかりません。: dcmresus.msb」(3125060)

Oracle Discoverer Desktop 9.0.2 がインストールされた同じコンピュータに Oracle Discoverer Desktop 9.0.4 をインストールした場合、Windows の「スタート」メニューから Discoverer Desktop 9.0.2 を起動すると、次のエラー・メッセージが表示されます。

要求されたファイルが見つかりません。: dcmresus.msb

複数の Oracle ホームを有する 1 台のコンピュータ上で特定のライブラリをロードする問題が原因でメッセージが表示されます。また、Windows のエクスプローラから `dis51usr.exe` をダブルクリックして Discoverer Desktop 9.0.2 を起動する場合も同じエラー・メッセージが表示されます。

この問題に対処するには、次の作業を実施します。

- **対処方法 1:** Windows コマンドラインから Discoverer Desktop 9.0.2 を実行します。手順は次のとおりです。

1. Windows の「スタート」メニューから、「コマンド プロンプト」を選択して「コマンド プロンプト」ウィンドウを表示します。
2. コマンド・プロンプトで次のように入力します。

```
902_ORACLE_HOME¥discoverer902¥bin¥dis51usr.exe
```

902_ORACLE_HOME には、Discoverer Desktop 9.0.2 がインストールされているディレクトリを指定します。

- **対処方法 2:** バッチ・ファイルから Discoverer Desktop 9.0.2 を実行します。手順は次のとおりです。

1. テキスト・エディタ（メモ帳など）で新規ファイルを開きます。
2. 新規テキスト・ファイルに次のように入力します。

```
dis51usr.exe
```

3. このファイルをディレクトリ `902_ORACLE_HOME¥discoverer902¥bin` に保存します。ファイル名には `.bat` の拡張子を付けます（たとえば、`startdisdesktop902.bat` のようになります）。

4. Discoverer Desktop 9.0.2 を起動するには、次のいずれか、または両方の手順を実行します。
 - Windows のエクスプローラで、新規に作成した .bat ファイルをダブルクリックします。
 - 「プログラム」メニューの「Discoverer Desktop 9.0.2」への既存のショートカットを新しい .bat ファイルへのショートカットに置き換えます。

注意： 前述の対処方法は、すでに Oracle Home Selector（通常、複数の Oracle ホームを作成しているコンピュータに必要）を使用していることを前提にしています。

プラットフォーム固有の問題および対処方法

プラットフォーム固有の既知の問題は現在ありません。

構成に関する問題および対処方法

構成に関する既知の問題は現在ありません。

管理に関する問題および対処方法

管理に関する既知の問題は現在ありません。

有益な情報

この項では、Oracle Discoverer Desktop に役立つ情報について記載します。

End User Layer 表の手動による編集

End User Layer (EUL) 表とその内容は、オラクル社カスタマ・サポート・センターの指示がないかぎり、(SQL*Plus などを使用して) 手動で編集しないでください。EUL 表の手動による編集はサポートされていません。手動で変更した場合、EUL が破損することがあります。

スケジュール済ワークブックを実行できるユーザーの問合せのリフレッシュ

スケジュール済ワークブックを実行できるエンド・ユーザーの場合、「スケジュール・マネージャ」ダイアログの「リフレッシュ」ボタンを実行しても、元表から問合せを再実行できません。スケジュール済ワークブックの結果が保存された表から再実行できます。これは、「オプション」ダイアログの「一般」タブから「問合せを自動的に実行」を選択した場合も同様です。

HWOnline ファイルの入手

Oracle Discoverer の前のバージョンには、HWOnline.htm と Memo.doc というファイルが同梱されていました。これらのファイルは、ドリル・アウト機能のデモに使用されていたものです。これらのファイルとその使用方法に関しては、OTN-J（Oracle Technology Network Japan）（<http://otn.oracle.co.jp/>）を参照してください。

その他の Oracle Discoverer レジストリ変数

『Oracle Discoverer Administrator 管理ガイド』と『Oracle Application Server Discoverer 構成ガイド』に記載されている以外にも、次の Oracle Discoverer レジストリ変数を使用できます。

カテゴリ	Discoverer レジストリ変数	説明	デフォルト	有効値
データベース	DefaultPreserve DisplayProperty ForRefresh	リフレッシュ時に、更新されたアイテム説明を破棄して元のアイテム説明に置き換えるか、または更新されたアイテム説明を保存するかを指定します。	0	0 = 更新された説明を使用 1 = 元の説明を使用
データベース	EnableTriggers	データベース・トリガーを無効にするかどうかを指定します。 たとえば、リフレッシュ時に見つかったあらゆる新しい列に対するデータベース・コールが Discoverer によって試行されます。この値を 0 に設定した場合、Discoverer によるデータベース・コールは実行されません。	0	0 = データベース・トリガーを無効化 1 = データベース・トリガーを有効化

(続き)

カテゴリ	Discoverer レジストリ変数	説明	デフォルト	有効値
データベース	ExportJoinFrom Master	ビジネスエリアのエクスポート時に、マスター・フォルダに基づく結合もエクスポートするかどうかを指定します。	0	0 = マスター・フォルダに基づく結合をエクスポートする 0 以外の値 = マスター・フォルダに基づく結合をエクスポートしない
データベース	SetNULLItem HeadingOnBulk Load	バルク・ロードの実行時に、アイテム見出しをアイテム表示名と同じ値に設定するか、または NULL に設定するかを指定します。	0	0 = アイテム見出しをアイテム表示名に設定する 1 = アイテム見出しを NULL に設定する

Oracle Discoverer と Real Application Clusters (RAC) / 透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF)

Oracle Discoverer による Real Application Cluster (RAC) コンピュータ上の透過的アプリケーション・フェイルオーバー (TAF) のサポートには、select のフェイルオーバー・モードが必要です。tnsnames.ora エントリの例を次に示します。

```
NAME =
  (DESCRIPTION=
    (ADDRESS=
      (PROTOCOL=tcp)
      (HOST=servername)
      (PORT=1521))
    (CONNECT_DATA=
      (SERVICE_NAME= NAME)
      (FAILOVER_MODE=
        (TYPE=select)
        (METHOD=basic)
        (RETRIES=4)
        (DELAY=15))))
```

RETRIES と DELAY には、前述の例で指定した値（それぞれ 4 と 15）を最初に設定するよう推奨しています。ただし、使用するコンピュータに応じてこれらの値を増やすことができます。

使用例によっては、フェイルオーバーが生じた場合にエンド・ユーザーに対しエラー・メッセージが表示されることがあります。エラー・メッセージを確認すると、セッションは通常どおり継続されます。このような使用例の修正は、9.0.4 リリースのパッチ・リリースとして予定されています。

ドキュメントの記載内容の誤り

ドキュメントの記載内容に関する既知の誤りは現在ありません。

Oracle Forms Developer

この章では、次の Oracle Forms Developer のトピックについて説明します。

- 一般的な問題とその対処方法
- プラットフォーム固有の問題および対処方法
 - Windows プラットフォームの問題および対処方法
 - UNIX プラットフォームの問題および対処方法
- 構成に関する問題および対処方法
- ドキュメントの記載内容の誤り

これらのトピックには、Oracle Forms Developer (Forms Developer)、Oracle Forms Builder プログラム (Forms Builder) および全般的な Oracle Forms 環境 (Forms) に関する情報が含まれています。

一般的な問題とその対処方法

この項では、Oracle Forms Developer (Forms Developer) の一般的な問題とその対処方法について説明します。

Oracle Forms 10g (9.0.4) と Oracle9i Forms の互換性

前のバージョンの Oracle9i Forms から Oracle Forms 10g (9.0.4) にアップグレードした場合、Forms アプリケーションを再コンパイルする必要はありません。

ただし、配布プラットフォームが開発プラットフォームと異なる場合は（開発に Windows、配布に Solaris を使用する場合など）、ソース・ファイル (.FMB、.PLL、.MMB) を配布プラットフォームで再コンパイルする必要があります。

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) と Oracle Application Server 10g (9.0.4) のどちらの場合でも、Forms Compiler 実行可能ファイルを使用して配布プラットフォーム用の Forms ランタイム・ファイル (.FMX、.PLX、.MMX) を、ソース・ファイルとモジュール (.FMB、.PLL、.MMB) から新規作成できます。

V8 モードにおける環境ハンドルとサービス・コンテキストの取得

Oracle Forms の以前のリリースとは異なり、SQLLIB 関数の `sqlghp()` を使用しても有効なホスト定義が返されなくなりました。

この問題への対処方法として、動作が保証されている SQLLIB 関数である `SQLEnvGet()` と `SQLSvcCtxGet()` をかわりに使用してください。V8 モードの環境では、2 つの新しい関数を使用して現行の環境ハンドルとサービス・コンテキストを取得できます。

これらの関数の動作は次のとおりです。

- `SQLEnvGet()` : ほとんどの OCI 操作で必要とされる環境ハンドルを取得します。
- `SQLSvcCtxGet()` : サービス・コンテキストを取得します。

環境ハンドルとサービス・コンテキストを使用すると、OCI で現在サポートされている操作をすべて実行できます。

Forms で正しく処理できないマルチバイト CLOB データ

(3148851 および 1480307) Forms アプリケーションからマルチバイトの CLOB データのレコードをフェッチすると、FRM-40505 エラー・メッセージが表示されます。

Forms Developer の埋込みフォント

(2972738) Forms アプリケーション上のテキストで、Builder からフォント設定ができないものがあります。

たとえば、次のような場所があります。

- ウィンドウのタイトル
- コンソール行
- 「問合せ取消」ダイアログ
- LOV ウィンドウの検索ボックス
- フィールドのヘルプ・ダイアログ

これらのオブジェクトに使用されるフォントは明確ではなく、場合によっては（たとえばコンソール行やヘルプ・ダイアログ）、値が Forms アプレットにハードコード化されていることもあります。コンソールやフィールド・ヘルプ・ダイアログでハードコード化されるフォントは 12pt Sans Serif です。

アイコン・プッシュ・ボタン

Forms Developer ではアイコン・プッシュ・ボタンを作成できます。つまり、プッシュ・ボタンのテキストのかわりにイメージを使用できます。Forms 6i では、プロパティ・パレットで「アイコン・ファイル名」を指定できました。このファイル名はドキュメントで説明されているように、.ico 拡張子を付ける必要はありません。

また、UI_ICON という変数があります。この変数の変更はなく、バージョンが更新されても使用できます。

Oracle Forms では Web で使用できるイメージ・タイプがサポートされています。現在はこれらのイメージを設計時に確認できるように、新しいオプションの環境 / レジストリ変数である UI_ICON_EXTENSION が用意されています。この変数は次のように設定できます。

- gif (大 / 小文字区別なし) : この場合、「アイコン・ファイル名」に追加する拡張子は .gif です。
- jpg: .jpg
- ico: .ico
- 未設定、または設定が間違っている場合: .ico

「データ・ブロック」ウィザードの制限

(2217028) Oracle データベースでは、数字などの無効な文字で始まる名前のオブジェクトを作成できます。その場合は、無効な文字を二重引用符で囲みます。たとえば、`'create table "123" (c char)'` のように囲みます。このようなデータベース・オブジェクトの場合は、「データ・ブロック」ウィザードを使用せずに手動でブロックやアイテムを作成する必要があります。「データ・ブロック」ウィザードを使用すると、ORA-00911、ORA-00931、ORA-04043 などのエラー・メッセージが表示されます。

プラットフォーム固有の問題および対処方法

Windows プラットフォームの問題および対処方法

Oracle Forms のユーザー補助機能についての情報

弊社では、Oracle 製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを身体の不自由な方にも不便なくご利用いただけるよう努力しています。

オラクル社では、ユーザー補助機能を最大限に活用できるように、次のソフトウェア構成をお薦めします。

- Microsoft Windows NT 4.0 (Service Pack 6) または Windows 2000 (Service Pack 1)
- Sun Java Access Bridge 1.0.2
- Microsoft Internet Explorer 5.5
- JDK 1.3.1

Oracle Forms でのスクリーン・リーダーと Java Access Bridge の使用方法 スクリーン・リーダーなどの補助機能を Java ベースのアプリケーションやアプレットで使用するには、後述のとおり、Windows ベースのコンピュータに Sun 社の Java Access Bridge をインストールする必要があります。

Oracle Developer Suite のインストール方法については、Oracle Developer Suite CD のルート・ディレクトリ (`%oracle_home%\doc\core904\install\toc.htm`) にある Oracle Developer Suite 10g のインストレーション・ガイドを参照してください。ユーザー補助機能の詳細は、Oracle Developer Suite CD のドキュメントで「はじめに」(`%oracle_home%\doc\core904\install\pref.htm`) を参照してください。

Oracle Forms でのスクリーン・リーダーと Java Access Bridge の設定方法

1. スクリーン・リーダーがない場合は、インストールします。

インストール方法の詳細は、スクリーン・リーダーに関するドキュメントを参照してください。

2. Oracle Forms をインストールします。
3. 詳細は、Oracle Developer Suite 10g のインストレーション・ガイドを参照してください。
4. Java Access Bridge 1.0.2 をダウンロードします。ダウンロードするファイルは `accessbridge-1_0_2.zip` です。このファイルは、<http://java.sun.com/products/accessbridge> で提供されています。
Java Access Bridge とそのインストール方法の詳細は、この Web サイトで Java Access Bridge のドキュメントを参照してください。
5. ファイルのダウンロード後に、そのファイルを `accessbridge_home` などのフォルダで解凍します。
6. `%accessbridge_home%\installer` フォルダの `Install.exe` を実行して、Java Access Bridge をインストールします。
7. ダイアログに表示される各 Java Virtual Machine に対して Java Access Bridge をインストールすることを確認します。インストールが完了したことを示すメッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。
8. インストール時に、`access-bridge.jar` および `jaccess-1_3.jar` という 2 つの JAR ファイルが `%oracle_home%\jdk\jre\lib\ext` フォルダに追加されたことを確認します。必要に応じて、これらのファイルを `%accessbridge_home%\installer\installerFiles` から `%oracle_home%\jdk\jre\lib\ext` にコピーします。
9. `JavaAccessBridge.dll` および `WindowsAccessBridge.dll` という 2 つの DLL ファイルが `%oracle_home%\jdk\jre\lib\ext` フォルダに追加されたことを確認します。必要に応じて、これらのファイルを `%accessbridge_home%\installer\installerFiles` から `%oracle_home%\jdk\jre\lib\ext` にコピーします。
10. 前述のファイル (`JavaAccessBridge.dll` と `WindowsAccessBridge.dll`) を `Winnt\System32` フォルダに追加します。Oracle Forms で実行するには、システム・パスに配置する必要があるためです。
11. `PATH` 環境変数が更新され、DLL ファイルのインストール場所であるディレクトリ (`%oracle_home%\jdk\jre\lib\ext`) を指定していることを確認します。
12. `%oracle_home%\jdk\jre\lib\accessibility.properties` ファイルに、次の行があることを確認します。
`assistive_technologies=com.sun.java.accessibility.AccessBridge`
必要に応じて、`accessibility.properties` ファイルを `%accessbridge_home%\installer\installerFiles` から `%oracle_home%\jdk\jre\lib` にコピーします。
13. 該当するユーザー補助機能のファイルを Oracle JInitiator ディレクトリにコピーします。

14. access-bridge.jar と jaccess-1_3.jar を Program Files¥Oracle¥Jinitiator1.*¥lib¥ext フォルダにコピーします。
15. accessibility.properties を Program Files¥Oracle¥Jinitiator1.*¥lib¥ext にコピーします。
16. スクリーン・リーダーを起動します。
17. %Oracle_Home%¥bin の ifbld90.exe ファイルを実行して、Oracle Forms を起動します。

これらの手順では、Windows 上で Windows ベースのスクリーン・リーダーを使用することを前提にしています。

JAWS で読み取れない Java 関連のダイアログおよびウィンドウ

(3032246) access-bridge.jar と jaccess-1_3.jar を CLASSPATH に追加する必要があります。詳細は、「Oracle Forms でのスクリーン・リーダーと Java Access Bridge の使用方法」を参照してください。

PL/SQL エラー・メッセージの補助機能を読み取るための対処方法

コンパイル・エラーは、PL/SQL コンパイル・メッセージ・ウィンドウに表示されますが、キーボード補助機能に制限があります。エラー・メッセージがウィンドウに収まらないときの対処方法として、ファイルを保存してからコマンドライン・ジェネレータを実行できます。これにより、エラー・ファイル (.err) が生成され、このファイルを任意のテキスト・エディタで参照できます。

エラー・ファイルを生成および参照するには：

1. Oracle Forms で .fmb ファイルを保存します。
2. MS-DOS のプロンプトで、ifcmp90 と .fmb ファイルの場所を入力します。たとえば、次のように指定します。

```
ifcmp90 module=d:\temp\module1.fmb  
userid=[username/password@database]
```

エラーが存在する場合は、エラー・メッセージを含む .err ファイルが生成されます。この .err ファイルは .fmb ファイルと同じディレクトリに保存され、ルート名も同じになります。任意のテキスト・エディタで、.err ファイルを開いてください。

JAWS スクリプトの場所

JAWS は Forms Developer とともにインストールされます。このスクリプトのインストール先は oracle_home¥forms90¥ScreenReader¥ です。

Graphics が 64 ビット Database に対して失敗する問題

(3080826) 8.0.6 RSF の制限により、Windows 上で Oracle Graphics 6i から 64 ビット・データベースに接続できません。そのため、Forms 9.0.4 を使用して、64 ビット・データベースに接続し、Oracle Graphics と統合する必要がある場合は、Oracle Graphics 6i ホームの RSF をアップグレードして、8.0.6.4 RSF を使用する必要があります。

デフォルト・カラー・パレットのカラー・リスト

Oracle Forms で使用可能なデフォルト・カラーのリストについては、オンライン・ヘルプの「デフォルト・カラー・パレットのカラー」を参照してください。

プロパティ・インスペクタとナビゲータのルック・アンド・フィールの変更

プロパティ・インスペクタとナビゲータのルック・アンド・フィールを Forms 6i と同じになるように変更して、ユーザー補助機能のカラーを使用できます。そのためには、Oracle ホームのレジストリ変数 SET FORMS90_CLAF を 1 に設定します。

デザイン・キャプチャをクリックするとエラー FRM-18113 が発生する事象

(3071580) デザイン・キャプチャをクリックするとエラー・メッセージ「FRM-18113: Form Builder は Automation Server として Oracle Designer を初期化できませんでした。」が表示されます。このエラーが発生する理由は、適切な Windows レジストリ設定が存在しないためです。適切なレジストリ設定をインポートするには、%OACLE_HOME%\CGENF61¥de9i.reg をダブルクリックします。次に、Oracle Forms をいったん終了してから再起動します。

UNIX プラットフォームの問題および対処方法

UNIX プラットフォームの全般的な問題および対処方法

UNIX 上の USER_EXIT UNIX と Linux 上に Oracle Developer Suite をインストールしている場合、USER_EXIT ディレクトリは使用できません。

Forms 9i ではデモ用ユーザー・イグジットは提供されません。ただし、oracle_home/forms90/lib にある makefile を使用できます。

1. Forms 6i (oracle_home/forms60/USEREXIT) から次のファイルをコピーします。
 - UE.H: 定義が含まれたヘッダー・ファイル。これは変更しないでください。
 - UE_SAMP.H: ユーザー・イグジット・ファンクションのプロトタイプが含まれたヘッダー・ファイル
 - UE_SAMP.PC: デモ用ユーザー・イグジットのコード。ユーザー独自のユーザー・イグジットのテンプレートとして使用できます。

- UE_XTB.C: このファイルにはユーザー・イグジットの表が含まれています。
- 次のように、ユーザー・イグジット・コードをプリコンパイルおよびコンパイルします。

```
proc ue_samp.pc
cc -c ue_samp.c
```

2. 次のように、ユーザー・イグジットの表を含むファイル `ue_xtb.c` をコンパイルします。

```
cc -c ue_xtb.c
```

3. Forms 実行可能ファイルをユーザー・イグジットと再リンクします。

```
make -f ins_forms.mk f90webmx EXITS="ue_xtb.o ue_samp.o"
```

この `make` コマンドでは、ユーザーのユーザー・イグジットのソース・コードが `ue_samp.pc` にあることを前提としています。ユーザーのファイル名が異なる場合は、コマンドラインで `make` コマンド（行 `EXITS=ue_xtb.o ue_samp.o`）を変更するか、ファイル名を渡す必要があります。

たとえば、次のように指定します。

```
make -f ins_forms.mk f90webmx EXITS="ue_xtb.o myexit.o"
```

4. `f90webmx` を作成した後、`web.xml` ファイルで `Listener Servlet` 初期化パラメータを指定する必要があります。このファイルは、次の場所にあります。

```
middletier_home/j2ee/
OC4J_BI_Forms/applications/forms90app/forms90web/
WEB-INF/web.xml
```

たとえば、次のように指定します。

```
oracle_home/forms90/j2ee/forms90app/forms90web/WEB-INF
<init-param>
  <param-name>Executable</param-name>
  <param-value>f90webmx</param-value>
</init-param>
```

5. フォームを作成し、ユーザーのユーザー・イグジットをテストします。デモ用ユーザー・イグジットは `BLOCK1.ITEM1` と `BLOCK1.ITEM2` の2つのアイテムを追加し、その結果を `BLOCK1.ITEM3` に格納します。
 1. `BLOCK1` と呼ばれる実表でないブロックと、`ITEM1`、`ITEM2`、`ITEM3` の3つのテキスト・アイテムを含む `ue_samp.fmb` というフォームを作成します。
 2. `WHEN-BUTTON-PRESSED` トリガーを使用して次のコードを含むボタンを作成します。

```
user_exit('UE_SAMP');
```

テスト・フォームはデータベースに接続する必要はありません。

3. フォーム・レベルで次のコードを含む ON_LOGON トリガーを作成します。

```
null;
```

6. フォームを保存して生成します。

制限事項 : 使用するプリコンパイラに必要なバージョンは、Forms の Required Support Files (RSF) のバージョンと一致する必要があります。Pro*C 9.0.1 は Oracle Developer Suite と Oracle Application Server のどちらにも同梱されています。

FRM-40800 エラーが発生した場合は、f90webmx の名前を f90webm に変更してください。

TK90_UNKNOWN の使用

(3193143) UNIX 環境では、Forms は、ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/<language> 以下の Tk2Motif.rgb ファイルを参照します (<language> は NLS_LANG の言語設定より導出)。このため、NLS_LANG が AMERICAN_AMERICA.JA16EUC の場合、\$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/Tk2Motif.rgb が参照されます。しかし、\$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/Tk2Motif.rgb は JA16EUC キャラクター・セットに対応していないため、エラーが発生します。

Tk2Motif.rgb ファイルの位置を指定したい場合は、TK90_UNKNOWN 環境変数を使用します。たとえば、上記例の場合、TK90_UNKNOWN に \$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/JA を指定することで正しく動作するようになります。

HP-UX の問題および対処方法

NLS_LANG=JAPANESE_JAPAN.JA16SJIS に設定された HP-UX 日本語環境で Forms を使用する場合は、Forms を使用する前に、EUC でエンコードされた日本語リソースを含む次のファイルを変更する必要があります。

次のファイルを SJIS エンコードに変換するか、ファイルの最後にある 7 つのエントリを削除します。この作業を実行しないと、Forms でエラー・メッセージ (FRM-91500) が表示されます。

- \$ORACLE_HOME/guicommon9/tk90/admin/JA/Tk2Motif.rgb

次のファイルを SJIS エンコードに変換します。

- \$ORACLE_HOME/forms90/admin/resource/JA/fmrweb.res
- \$ORACLE_HOME/forms90/admin/resource/JA/fmrpcweb.res

この変換を行わないと、Forms で次のエラー・メッセージが表示されます。

Oracle*Terminal ファイル : frmweb を開けませんでした。

構成に関する問題および対処方法

Forms と Reports の統合

Form Builder から起動できない Reports Builder (2228305)

Forms Builder で Oracle Forms と Oracle Reports の統合を設定するには、ファイル `f90desm.sh` 内の `reports.sh` をコールする行のコメントを解除します。

Forms Migration Assistant: オブジェクト・ライブラリで作成されない RUN_PRODUCT (Reports) rp2rro Reports オブジェクト

(3151894) Oracle Forms 6i モジュールに Reports をコールする RUN_PRODUCT ビルトインが含まれていると、Forms Migration Assistant によって変換後に 11 のパラメータと RP2RRO Reports オブジェクトが作成されます。

ただし、同じビルトインを含む Forms 6i のオブジェクト・ライブラリが Forms Migration Assistant によって変換されると、新しい「オブジェクト・ライブラリ」タブと 11 個すべてのパラメータを含む rp2rro パラメータが作成されますが、Reports オブジェクト RP2RRO は作成されません。

この場合、Reports オブジェクトは手動で追加してください。

ドキュメントの記載内容の誤り

この項では、次のドキュメントの記載内容の誤りについて説明します。

- 「[Oracle Forms Developer \(Builder\) のオンライン・ヘルプ](#)」

また、ドキュメントの記載内容の誤りの最新情報については、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp/products/forms/>) にアクセスしてください。

Oracle Forms Developer (Builder) のオンライン・ヘルプ

フォームの実行について

(3500089) このトピックの「OC4J HTTP リスナーの起動」の正しいパスは次のとおりです。

```
%10G_HOME%\j2ee\DevSuite\startinst.bat
```

次のような記述は避けてください。

```
<10G_HOME>\j2ee\Oracle10G\startinst.bat
```

Oracle Reports

この章では、Oracle Reports Developer (Reports Developer) と Oracle Application Server Reports Services (OracleAS Reports Services) を含む Oracle Reports の問題とその対処方法について説明します。この章は次の項目で構成されています。

- 一般的な問題とその対処方法
- プラットフォーム固有の問題および対処方法
 - Windows プラットフォームの問題および対処方法
 - UNIX プラットフォームの問題および対処方法
- 構成に関する問題および対処方法
- 管理に関する問題および対処方法
- ドキュメントの記載内容の誤り

この章では Oracle Reports 10g のマニュアルやオンライン・ヘルプに記載されていない問題や対処方法について説明します。このリリースの新機能の詳細は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) の Oracle Reports 10g のページ (<http://otn.oracle.co.jp/products/reports/>) と Reports Builder オンライン・ヘルプのトピック「このリリースについて」を参照してください。

一般的な問題とその対処方法

この項では、Oracle Reports の一般的な問題とその対処方法について説明します。

CGI を使用したレポート要求の実行

Oracle9i Reports 以降では、Reports CGI は下位互換性を維持するためにのみサポートされています。Reports CGI のかわりに Reports Servlet を使用することを強くお勧めします。

Reports CGI では、要求ごとに 1 つの新しい JVM を内部的に起動しているため、大量のレポート要求の実行時にパフォーマンスが低下するためです。一方、Reports Servlet は OC4J インスタンスにデプロイされ、サーブレット機能を利用するため、Reports CGI よりも優れたパフォーマンスを提供します。

OLAP Server 問合せの作成

適切なファイルがインストールされていない状態で OLAP Server 問合せを作成すると、次のエラー・メッセージが表示されます。

```
REP-0069:Internal Error
XR-3013: The Express xConnect.ini file is missing or incomplete
```

対処方法

OLAP Server 問合せを作成する前に、必要な OLAP Server 接続ファイルがマシン上にあることを確認してください。

グループ別マトリックス・レポートのペーパー・デザイン・ビューへのグラフの挿入

グループ別マトリックス・レポートのペーパー・デザイン・ビューで、グループ位置ごとに 1 つのグラフを挿入すると、Reports Builder で障害が発生します。

対処方法

グラフは、ペーパー・デザイン・ビューではなく、ペーパー・レイアウト・ビューで挿入してください。

Internet Explorer にエンコードされていない URL ストリームを含むレポートの実行

Internet Explorer では、セキュリティ修正プログラム 818529 の適用後にエンコードされていない URL ストリームをプラグインで実行できません。そのため、エンコードされていない URL をレポート定義の `destype=cache` と `desformat=PDF` に含むレポートを実行すると、エラーが発生します。

対処方法

レポート定義の URL は必ずエンコードしてください。

Reports Builder でサポートされない FTP と WebDAV の送信先

現在 Reports Builder 環境では FTP と WebDAV の送信先はサポートされていません。ただし、Reports Runtime および Reports Server 環境ではサポートされています。

Oracle9i JDeveloper の統合

この項では、Oracle JDeveloper との統合に関する問題について説明します。この項のトピックは次のとおりです。

Oracle9i JDeveloper で JSP レポートをデバッグする際のデッドロック

Oracle9i JDeveloper (JDeveloper) で OracleAS Reports Services JSP をデバッグする場合は、ソース・タイプでないブレークポイントを無効にする必要があります。これらのブレークポイントを無効にしないとデッドロックが発生します。ソース・タイプでないブレークポイントは「ブレークポイント」ウィンドウで無効にできます。

Oracle9i JDeveloper で表示されないグラフ

JDeveloper で `rw:graph` タグのある JSP レポートを実行すると、そのグラフ・イメージがブラウザに表示されません。この問題を解決するには、`oracle_home/reports/conf` にある `rwervlet.properties` ファイルで、`IMAGEURL` パラメータを次のように設定します。

```
IMAGEURL=http://host:port/Workspace-Project-context-root/servlet/  
oracle.reports.rwclient.RWClient
```

Reports のインプロセス・サーバー

JDeveloper の Java Virtual Machine (JVM) (「プロジェクトの設定」→「実行」→「仮想マシン」) を `ojvm`、`minimal` または `vanilla` に設定していると、JDeveloper の埋込み OC4J サーバーを終了しても、`rwsvrlet` のインプロセス・サーバーが停止しません。そのため、OC4J の次回起動時にポートの競合が発生します。この問題を回避するには、次のいずれかを実行します。

- JVM を `hotspot` に設定します。
- `oracle_home/reports/conf/rwsvrlet.properties` で `server_in_process=no` を設定し、インプロセス・サーバーを無効にします。
- そのかわりに、スタンドアロン Reports Server を使用します。

Reports サーバーに対する Graphics6i 使用のための構成

Forms/Reports/Graphics を統合するため、次の手順を実行して Reports/Graphics を正しく設定します。

1. `g90runm.sh` スクリプトに、次のように入力します。

```
ORACLE_GRAPHICS6I_HOME=<location forms6i>
export ORACLE_GRAPHICS6I_HOME
PRINTER=<real printer>
export PRINTER
```

2. `reports.sh` スクリプトに、次のように入力します。

```
ORACLE_GRAPHICS6I_HOME=<location forms6i>; export ORACLE_GRAPHICS6I_HOME
REPORTS_DEFAULT_DISPLAY=NO; export REPORTS_DEFAULT_DISPLAY
DISPLAY=<machine name>:0.0; export DISPLAY
```

プラットフォーム固有の問題および対処方法

この項では、Oracle Developer Suite でサポートされているオペレーティング環境別に問題とその対処方法について説明します。

Windows プラットフォームの問題および対処方法

この項では、Microsoft Windows プラットフォーム固有の問題とその対処方法について説明します。

Oracle Enterprise Manager を使用した Windows サブネット上のインプロセス・サーバーの管理

対象: Linux マシンを含む Windows サブネット

インプロセス Reports Server を Windows システムで管理している場合、Oracle Enterprise Manager の Application Server Control にあるインプロセス Reports Server のステータスが「不明」と表示されることがあります。この状況は、1 台以上の Linux マシンを含むネットワーク・サブネット上に Windows ホストがある場合で、Linux ホストのいずれかで 1 つ以上の OSAgent 実行可能ファイルが実行されているときに発生します。この問題を解決するには、EM_OC4J_OPTS 環境変数の値を増やします。

Application Server Control ホーム・ページでの非 OPMN 管理のコンポーネントの、ステータスおよびホスト関連メトリック取得に対するタイムアウト（デフォルトは 2 秒）を増やすには、環境変数 EM_OC4J_OPTS を次のように定義してから Application Server Control を起動します。

```
-Doracle.sysman.ias.ApplicationServerObject.timeout=true
```

JDK 1.4 での osfind の使用

Oracle Reports のアーキテクチャでは、ネットワーク上で実行されているサーバーの検出に、VisiBroker の osagent が使用されます。

そのため、osfind を使用すると、ネットワーク上で実行されている osagent インスタンスを検出できます。ただし、osfind は、Oracle Application Server に使用されている JDK（バージョン 1.4）では動作しません。この問題を解決し、ネットワーク上で実行されている osagent インスタンスを検出するには、次の設定を使用して osfind を実行する必要があります。

```
osfind -J-Xbootclasspath /p:oracle_home¥vbroker4¥lib¥vbjboot.jar
```

Reports Builder での「スタート・ガイド」ページの起動

Reports Builder から「スタート・ガイド」ページを起動すると、次のいずれかのエラー・メッセージが表示される可能性があります。

- エラー：REP-0911：クイック・ツアーは見つかりません。クイック・ツアーを再インストールし、再試行してください。
- ブラウザの起動に失敗しました（Netscape 7.0）。

対処方法

この問題を解決する手順は次のとおりです。

1. レジストリ・エディタ（regedit.exe など）を使用して Windows レジストリを編集します。

注意： レジストリを編集する前にバックアップを作成してください。

2. 次のキーにナビゲートします。

HKEY_CURRENT_USER¥Software¥Oracle¥Toolkit¥Tkbrowser

3. レジストリの TKBrowser 設定を調べます。
4. BrowserName キーと BrowserPath キーの値が正しいことを確認します。

たとえば、次のような形式になります。

値のデータ (BrowserName)= Netscape 7

値のデータ (BrowserPath)= C:¥Program
Files¥Netscape¥Netscape¥Netscp.exe

5. Reports Builder を実行し、「スタート・ガイド」を選択します。
6. 「OK」をクリックします。「Information Navigator 設定」ダイアログ・ボックスが表示されます。
7. ブラウザに「Netscape Navigator 7.0+」を選択します。

パスとブラウザのプログラム名が正しいことを確認します。パスまたはプログラム名が正しくない場合にブラウザの場所を変更する手順は、次のとおりです。

 - a. 「参照」をクリックします。
 - b. 目的の場所にナビゲートします。
 - c. 「OK」をクリックします。
8. 「Information Navigator 設定」ダイアログ・ボックスで「OK」をクリックします。

ハードウェアベースの左マージンのないレポートの出力

Oracle Reports 10g (9.0.4) では、実際の用紙の左上隅に対応するレポート出力を生成できるようになりました。従来の方法ではプリンタの印刷可能領域が使用されていたため、プリンタの機種が異なると、レポートの出力位置が一致しない問題がありました。

従来の方式に戻す必要がある場合は、レジストリ・キー REPORTS_ADD_HWMARGIN を YES に設定します。

REPORTS_ADD_HWMARGIN レジストリ・キーを YES に設定する手順は次のとおりです。

1. Windows レジストリのバックアップを作成し、regedit.exe などのレジストリ・エディタを使用して編集します。

注意： レジストリのバックアップの作成方法は、Windows のオンライン・ヘルプを参照してください。

2. キー HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\ORACLE にナビゲートし、Reports がある Oracle ホームのディレクトリが含まれた HOMEn キーを探します。
3. このキーを選択し、REPORTS_ADD_HWMARGIN という新しい String サブキーを追加し、その値を YES に設定します。

デフォルトでは、プリンタの印刷可能領域ではない左マージンは無視されます。印刷は、印刷可能領域ではなく実際の用紙の左上隅 (0,0) から開始されます。レジストリ・キーを YES に設定した後でデフォルトに戻す場合は、そのキー値を NO に設定するか、キーを削除します。

レポートのレイアウトではデータが印刷可能領域に収まる十分なマージンを指定する必要があります。Reports Builder の「ページ設定」ダイアログ・ボックスにあるマージンのフィールドは、OracleAS Reports Services と一致させるために無効に設定されています。

UNIX プラットフォームの問題および対処方法

注意： UNIX の問題は、UNIX のすべてのプラットフォームで発生するものでないかぎり、プラットフォーム固有の問題として分類されます。また、プラットフォーム固有の問題は、最初に検出されたプラットフォームでしか報告されないため、プラットフォーム固有として表示される問題が、実際には複数のプラットフォームで発生する可能性があります。別段の注意書きがないかぎり、明記されたプラットフォームでプラットフォーム固有の対処方法のみを使用してください。

UNIX プラットフォームの全般的な問題および対処方法

この項では、SPARC Solaris、HP HP-UX、Linux x86 などのサポートされているすべての UNIX プラットフォームの問題とその対処方法について説明します。

DISPLAY とプリンタ依存性の実装廃止 Oracle Reports 10g (9.0.4) では、実行時に環境変数 DISPLAY または有効なプリンタを定義する必要がなくなりました。

環境変数 REPORTS_DEFAULT_DISPLAY を使用して、Oracle Reports 10g (9.0.4) で導入された次の組み込み機能を実装するかどうかを指定します。

- 環境変数 DISPLAY への依存性の排除（以前のリリースでは、イメージの作成およびビクセル解像度の取得には、ウィンドウ表示システム表示面を定義するためにこの環境変数が必要でした）。

- フォント情報のために有効なプリンタを定義する依存性（有効なプリンタに設定する環境変数 `PRINTER` および `TK_PRINTER`、または `uiprint.txt` への有効なエントリ）の排除。
- イメージおよびフォント情報の表面解像度に対する `screenprinter.ppd` の使用。
- 拡張イメージのサポート。

注意：

- 以前からのユーザーによる Oracle Reports 10g (9.0.4) へのアップグレードでは、`REPORTS_DEFAULT_DISPLAY` のデフォルト設定（YES）が、表示、ページ数、出力ファイル・サイズまたは既存のレポートのパフォーマンスに影響を与える可能性があります。
 - 環境変数 `DISPLAY` を設定している場合でも、`REPORTS_DEFAULT_DISPLAY` を NO に設定しないかぎり使用されません。
-

関連項目：

- 環境変数 `REPORTS_DEFAULT_DISPLAY` および `screenprinter.ppd` の詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』および Reports Builder のオンライン・ヘルプを参照してください。
- 『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

Solaris の問題および対処方法

注意： これらの問題は、Solaris で確認されていますが、Linux や HP-UX などの UNIX プラットフォームでも発生する可能性があります。

マルチバイト環境でのグラフ・ウィザードの起動 Solaris のマルチバイト環境（日本語、簡体字中国語および韓国語）でグラフ・ウィザードを起動すると、Reports Developer の応答が停止します。

この問題を解決する手順は次のとおりです。

1. 使用しているコンピュータに J2SE バージョン 1.4.2 をインストールします。J2SE 1.4.2 は Sun 社の Java Web サイト (<http://java.sun.com>) からダウンロードできます。
2. 次のように、`reports.sh` ファイルで J2SE ホームへのパスを設定します。

```
PATH=$J2SEHOME/bin:$ORACLE_HOME/jdk/bin:
$ORACLE_HOME/bin:${PATH};export PATH
```

3. `reports.sh` の `LD_LIBRARY_PATH` を、J2SE ホームの場所を示すように変更します。

```
LD_LIBRARY_PATH=$J2SEHOME/jre/lib/sparc:
$ORACLE_HOME/jdk/jre/lib/sparc:$ORACLE_HOME/lib:
${LD_LIBRARY_PATH}; export LD_LIBRARY_PATH
```

Solaris バージョン 2.9 での印刷 Solaris 2.9 で `destype=printer` および `desname=printer_name` のコマンドライン・オプションを使用してレポートを印刷すると、次のエラーが表示されます。

```
REP-0069: Internal error
REP-57054: Inprocess job terminated with error
REP-50157: Error while sending file to printer 2op837a.Exit with error code 1
```

この問題を解決するには、次の手順を実行する必要があります。

注意： 手順を進める前に、`rwlp.sh` ファイルのバックアップを作成してください。Solaris の場合、`rwlp.sh` は印刷スクリプト・ファイルで、`ORACLE_HOME/bin/` ディレクトリに格納されています。このスクリプト・ファイルは、デフォルトで `lp` および `lpr` コマンドをサポートしています。

1. ファイルの最後にある次の行にナビゲートします。

```
#either LPR or LP Command was found
```

2. 既存の `if...else` 条件式に `OR` 演算子を追加します。

```
if [ `uname -r` = "5.8" ] || [ `uname -r` = "5.9" ] # If Solaris Release 5.8 / 5.9
...
else
# parse and Fix the command Line as Required by lp
...
    if [ `uname -r` = "5.8" ] || [ `uname -r` = "5.9" ]# If Solaris Release
    5.8/ 5.9
```

`if...else if` 条件式により、Solaris Release のバージョンがチェックされます。バージョン番号に従ってプリンタ名から引用符が削除され、そのプリンタ名が印刷コマンドに渡されます。

HP-UX の問題および対処方法

HP-UX の既知の問題は現在ありません。

構成に関する問題および対処方法

この章では、Oracle Reports の構成に関する問題とその対処方法について説明します。

Reports Queue Manager を使用した管理者ログインの変更

Oracle Reports では、Reports Queue Manager を使用して管理者パスワードを変更すると、Oracle Enterprise Manager または OPMN で次の操作を実行できなくなります。

- Reports Server の起動と停止
- Reports Server メトリックの表示

推奨事項

Reports Server の管理は、Oracle Enterprise Manager または OPMN で行うことをお勧めします。

Reports Queue Manager を使用して管理者パスワードを変更した場合は、次のことを行う必要があります。

1. 変更したユーザー名とパスワードを、指定の Reports Server エントリにある `targets.xml` ファイルに追加します。
2. `ENCRYPTED=FALSE` に設定します。

たとえば、次のような形式になります。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="foo" ENCRYPTED="FALSE"/>
...
...
<Property NAME="Password" VALUE="hello123" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

3. Oracle Enterprise Manager を再起動します。Oracle Enterprise Manager が再起動する際に、ユーザー名とパスワードが暗号化され、`ENCRYPTED=TRUE` に設定されます。

Web ソース・ビューに正しく表示されないフォントの修正

Reports Builder のユーザー・インタフェースに表示されるウィンドウ・タイトルなどのテキストには、現行の言語のシステム・リソース・ファイルから取得したフォントが使用されます。これらのシステム・リソース・ファイルは、Oracle Reports インストールに含まれています。Oracle Reports では、`uifont.ali` の `[RWBUILDER]` セクションでこれらのフォントのマッピングを指定できます。マップされているフォントが見つかった場合は、元のフォントのかわりにそのフォントが使用され、見つからない場合は、元のフォントが使用されます。

注意： マップするフォントは固定幅のフォントである必要があります。

Report Editor の Web ソース・ビューでは、アラビア語、中央ヨーロッパ言語、キリル文字、ギリシャ語、ヘブライ語、日本語、タイ語、トルコ語が文字化けして表示される場合があります。この問題を解決するには、uifont.ali の Reports Builder のフォント名を次のように設定します。

```
[rwbuilder]
.....AR8MSWIN1256="Courier New"
.....CL8MSWIN1251="Courier New"
.....EE8MSWIN1250="Courier New"
.....EL8MSWIN1253="Courier New"
.....IW8MSWIN1255="Courier New"
.....JA16SJIS="MS Gothic"
.....TH8TISASCII="Andale Duospace WT"
.....TR8MSWIN1254="Courier New"
```

負荷が高いマシンでの Reports Server の構成

処理速度が遅いマシンや負荷のある状態で実行しているマシンにレポートをデプロイするには、次の構成が必要になる可能性があります。

- ping タイムアウト (OPMN 側) : ping タイムアウトとは、OPMN がタイムアウトの判断に使用する単位です。OPMN は、(OC4J_BI_FORMS で) インプロセス Reports Server からのコールバックを指定時間待機した後、タイムアウトと判断します。

デフォルトのタイムアウト時間は 150 です。この時間は、ping タイムアウト、ping 間隔およびリトライ回数から算出されます。それぞれのデフォルト値は次のとおりです。

ping タイムアウト = 30 秒

ping 間隔 = 20 秒

リトライ回数 = 3 回

注意： リトライ回数は、OPMN が OC4J に正常に接続し、プロセスから定期的に ONS 通知を受信する場合にのみ適用可能です。

これらの数値を使用する場合は、30 秒のタイムアウトと 20 秒の間隔で ping が 3 回試行されます。最初の ping は指定された ping 間隔の後に試行されます。したがって、OPMN が OC4J を起動して約 150 (20 + 3*30 + 2*20) 秒が経過した時点で、そのプロセスに応答がないと判断されて再起動されます。OPMN が OC4J に接続しても、OC4J から定期的に ONS 通知を送信するのが遅すぎる場合、30 秒のタイムアウトが適用されます。

関連項目： opmn.xml ファイルの詳細は、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

- コールバック・タイムアウト（Reports Server 側）：コールバック・タイムアウトとは、Reports Server がタイムアウトの判断に使用する単位で、エンジンからの応答を指定時間待機した後、タイムアウトと判断します。この値は、Reports Server 構成ファイル `server_name.conf` で指定できます。このタイムアウト時間の単位はミリ秒です。

次に例を示します。

```
<engine id="rwEng" class="oracle.reports.engine.EngineImpl" initEngine="1"
maxEngine="1" minEngine="0" engLife="50" maxIdle="30" callbackTimeOut="80000">
```

注意： マシンの処理速度が非常に遅い場合はタイムアウトの値を増加してください。

PDF ファイルまたはプリンタへのグラフ出力のイメージ解像度の改善

環境変数 `REPORTS_GRAPH_IMAGE_DPI` は、PDF ファイルまたはプリンタにグラフを出力する際の 1 インチ当たりのドット数（DPI）を指定します。この環境変数のデフォルト値は、レポートの生成時間をできるかぎり短縮してレポート・ファイル・サイズも小さくなるように、72DPI に設定されています。

72DPI よりも高い値を指定すると、PDF ファイルまたはプリンタに送信されるグラフのイメージ解像度が向上します。ただし、レポート出力の生成時間およびファイル・サイズに影響を与えます。

注意： この環境変数に 250 の値を指定すると、次のようになります。

- Oracle Reports のグラフを挿入したレポートの生成時間は、72dpi に設定した値で同じレポートを生成する場合に比べて 5 ～ 6 倍必要です。
 - PDF ファイル・サイズも 5 ～ 6 倍に増加します。
-

有効な値 72 ～ 300

デフォルト 72

使用方法

- Unix の場合は、`reports.sh` で環境変数を設定します。
- 250 よりも大きい DPI 値を設定し、グラフが約 5 × 5 インチよりも大きい場合は、JVM のメモリ不足エラーを回避するために、`REPORTS_JVM_OPTIONS` を使用して JVM ヒープ・サイズの値も変更する必要があります。

関連項目： JVM オプションの設定方法については、『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』を参照してください。

- この変数は、PDF およびプリンタへの出力に限定されているため、Oracle Reports の配布機能では現在サポートされません。

Oracle Reports の Java 仮想マシンに対する値の指定

JVM オプションを使用して、JVM のデフォルト以外の機能を明示的に指定できます。その場合は、コマンドライン・オプション JVMOPTIONS を使用します。

たとえば、次のコマンドを使用してヒープ領域が 512MB の Reports Builder を起動できます。

```
rwbuilder jvmoptions=-Xmx512M
```

複数のオプションを指定できます。その場合はオプションを引用符で囲む必要があります。

```
rwbuilder jvmoptions="-Xmx256M -Xms=128M"
```

構文 JVMOPTIONS={options in reports runtime, reports builder, reports converter JVM}

デフォルト -Xmx256M

注意： jvmoptions キーワードを使用して値を設定すると、その値は環境変数 REPORTS_JVM_OPTIONS の値よりも優先されます。

OID でのリソース作成時の Oracle Reports と Oracle Portal の統合エラーの解決

OracleAS Portal で、Oracle Reports セキュリティの設定を Reports 定義ファイル・アクセスに対して構成している場合は、Reports 定義ファイルの編集時に、「実行」または「ポートレットとして実行」をクリックすると、エラーが発生する可能性があります。

```
500 Internal Server Error
Unexpected Error. Please contact Administrator
```

このエラーは、次の条件すべてに当てはまる場合に発生します。

- 実行環境が、9.0.4 MT（中間層）、9.0.4 IM（識別管理）および 9.0.2 MR（メタデータ・リポジトリ）を相互に実行するように構成された、相互運用デプロイ（9.0.2 と 9.0.4 の複合環境を許可）の場合。
- SSOCONN パラメータを使用して OracleAS Portal で Oracle Reports を実行している場合。
- SSOCONN パラメータに指定した接続リソースが、Oracle Internet Directory サーバーで作成されていない場合。

この問題を回避する手順は、次のとおりです。

1. 9.0.4 IM の `ORACLE_HOME` にある次のファイルをテキスト・エディタでオープンします。

```
ORACLE_HOME/Apache/Apache/conf/mod_osso.conf
```

2. 次のフラグを追加します。

```
OssRedirectByForm on
```

次に例を示します。

```
<IfModule mod_osso.c>
OssIpCheck off
OssIdleTimeout off
OssConfigFile
/private1/iasinst/install_set1/904infra/Apache/Apache/conf/osso/osso.conf
OssRedirectByForm on
</IfModule>
```

Reports Builder の Web レイアウトを実行機能

Web レイアウトを実行機能を使用すると、Reports Builder からレポートをプレビューできます。この機能を使用するために Reports Server を構成する必要はありません。Reports Builder には Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) サーバーが組み込まれています。

Oracle9i Reports リリース 2 (9.0.2) から Oracle Reports 10g (9.0.4) にアップグレードした場合は、CLASSPATH または REPORTS_CLASSPATH 環境変数の場所が 10g (9.0.4) Oracle ホームの `oc4j.jar` ファイルのみを参照している必要があります。REPORTS_CLASSPATH または CLASSPATH に 9.0.2 Oracle ホームの `oc4j.jar` を参照しているパスがある場合は、そのパスを削除する必要があります。

CLASSPATH または REPORTS_CLASSPATH に 9.0.2 の `oc4j.jar` ファイルへのパスが含まれている場合、Web レイアウトを実行機能を実行すると次のエラー・メッセージが表示されます。

```
The major.minor version '48.0' is too recent for this tool to understand
```

管理に関する問題および対処方法

この章では、Oracle Reports Developer の管理上の問題とその対処方法について説明します。

Reports Server 情報にアクセスする Enterprise Manager の認証

`server_name.conf` の `identifier` 要素には、`SERVERACCESSKEY` という新しい値が含まれています。この値は Oracle Enterprise Manager (Enterprise Manager) で Reports Server 情報を保護するために使用します。実装されている認証は次のとおりです。

- `server_name.conf` ファイルの `identifier` 要素の値が暗号化され、`%SERVERACCESSKEY_USER%/%SERVERACCESSKEY_PASSWORD%` の形式になります。次に例を示します。

```
<identifier confidential="yes" encrypted="no">  
%SERVERACCESSKEY_USER%/%SERVERACCESSKEY_PASSWORD%</identifier>
```

- `targets.xml` ファイルの対応するエントリを次に示します。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="%SERVERACCESSKEY_USER%" ENCRYPTED="FALSE"/>  
<Property NAME="Password" VALUE="%SERVERACCESSKEY_PASSWORD%" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

デフォルトのインストールでは、インストール時の `%SERVERACCESSKEY_USER%` 値と `%SERVERACCESSKEY_PASSWORD%` 値は、`targets.xml` の値と必ず一致します。

注意： Enterprise Manager で Reports Server のページにデータを正しく表示するためには、`server_name.conf` と `targets.xml` の `%SERVERACCESSKEY_USER%` と `%SERVERACCESSKEY_PASSWORD%` が一致する必要があります。

ユーザー名とパスワードを変更する手順は、次のとおりです。

1. `ORACLE_HOME/reports/conf/server_name.conf` ファイルを次のように編集します。

```
<identifier confidential="yes" encrypted="no">  
    new_username/new_password  
</identifier>
```

2. `ORACLE_HOME/sysman/emd/targets.xml` ファイルを次のように編集します。

```
<Property NAME="UserName" VALUE="new_username" ENCRYPTED="FALSE"/>  
<Property NAME="Password" VALUE="new_password" ENCRYPTED="FALSE"/>
```

3. Enterprise Manager と Reports Server を再起動します。`server_name.conf` と `targets.xml` のユーザー名とパスワードは再起動後に暗号化されます。

注意： Oracle Reports 10g (9.0.4) から、Enterprise Manager は、Reports Server 情報へのアクセスに OID 認証を使用しません。Enterprise Manager では、SERVERACCESSKEY 値を使用して認証を実装します。

OracleAS Portal でのアイテム・リンクとしてのレポートの実行

デフォルト以外の言語設定で OracleAS Portal をインストールした場合は、ポータル・ページ上のアイテム・リンクとしてのレポートの公開に必要な複数のエントリが、自動的にインストールされません。rwlang.sql スクリプトを使用して、選択した言語をインストールする必要があります。

したがって、次の場合は rwlang.sql スクリプト (`ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwd/`) を実行する必要があります。

- OracleAS Portal のインストール時に、デフォルト (US) に加えて少なくとも 1 つの言語を選択した場合。
および
- OracleAS Portal のアイテム・リンクとしてレポートを公開する場合。

注意： これはインストール完了後 1 回かぎりのタスクです。1 回実行すると OracleAS Portal でアイテム・リンクとしてレポートを公開できるようになります。

スクリプトを実行する手順は、次のとおりです。

1. `ORACLE_HOME/portal/admin/plsql/wwd/` ディレクトリに変更します。
2. `sqlplus` を実行します。
3. ポータル・スキーマを使用して OracleAS Portal にログインします。

注意： これは、OracleAS Portal PL/ SQL パッケージのインストールに使用するポータル・スキーマです。

4. 次のパラメータを使用して `rwlang.sql` スクリプトを実行します。

```
@rwlang.sql language_list
```

ここで、

`language_list` は、カンマ区切りの言語リストです。

たとえば、フランス語と日本語をインストールするには、次のように指定します。

```
@rwlang.sql f,ja
```

使用方法

- `sqlplus` は、カンマ (,) 区切りの 1 つのパラメータではなく、2 つのパラメータとして言語リストを取り扱うため、カンマ (,) の前後には空白を使用できません。
- `rwlang.sql` スクリプトのヘッダーには、全言語の省略形のリストが含まれています。様々な省略形を確認するには、テキスト・エディタを使用してスクリプト・ファイルを開いてください。

ドキュメントの記載内容の誤り

この項では、ドキュメント内容の既知の誤りについて説明します。

Oracle Reports における動的な環境の切替え

『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の一部の項（1.4.3、1.4.4、18.2 など）には、次のような制限事項が記載されています。

- 各言語で 1 つ以上の Reports Servers をセットアップします。
- 各言語で 1 つ以上のクラスタをセットアップします。
- 各言語で別個のホスト・マシンをセットアップします。

しかし、Oracle9iAS リリース 2 のパッチ 1 以降から提供されている環境切替えの機能を使用すると、同一の Reports Server 上で多種多様な環境設定（言語の違いも含む）のレポート・エンジンを生成できます。

最新ではないスクリーンショット

『Oracle Application Server Reports Services レポート Web 公開ガイド』の第 19 章「OracleAS Reports Services の管理と監視」にあるスクリーンショットは、Oracle Enterprise Manager ユーザー・インタフェースに対する最新の更新内容を反映していない場合があります。

Oracle Designer

この章では、次の Oracle Designer のトピックについて説明します。

- 一般的な問題とその対処方法
- プラットフォーム固有の問題および対処方法
- 構成に関する問題および対処方法
- 管理に関する問題および対処方法
- ドキュメントの記載内容の誤り

これらのリリース・ノートに加えて、[第 12 章「Oracle Software Configuration Manager」](#)で SCM のリリース・ノートもお読みください。

一般的な問題とその対処方法

この項では、Oracle Designer の一般的な問題とその対処方法について説明します。

インストール

この項では、インストールの問題とその対処方法について説明します。

Oracle Designer/SCM の 9.0.4 用パッチセット

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) JP Update CD に Oracle Designer/SCM の最新のパッチセットが含まれている場合には、最新の 9.0.4 パッチセットを既存の Oracle ホームにインストールしてクライアント・ソフトウェアをアップグレードしてください。

多言語環境における日本語

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) をクライアント・コンピュータにインストールするときには、1 つ以上の製品言語を選択できます。製品言語の 1 つに日本語を選択する（たとえば、日本語、韓国語および英語を選択する）と、**Designer** 製品のユーザー・インタフェースのテキストは、常に日本語で表示されます。クライアント・コンピュータの NLS 言語設定を後から変更しても、この表示は変更できません。製品言語に日本語を選択しない（たとえば、中国語、韓国語および英語を選択する）場合、**Designer** 製品のユーザー・インタフェースのテキストは、常に英語で表示されます。

ユーザー・インタフェースのテキストを日本語で表示する必要がない場合は、製品言語に日本語を選択しないでください。ユーザー・インタフェースのテキストを日本語で表示する必要がある場合は、製品言語の 1 つに日本語を選択し、日本語フォントがインストールされていることを確認してください。

NLS 操作のためのリポジトリ設定

National Language Support (NLS) バージョンのリポジトリを使用する場合は、次のテキストの表示言語を変更できます。

- Repository コア・モデル
 - データ型の値
 - 要素タイプ名
 - プロパティ名
 - テキスト・タイプ記述
 - レポート・グループ名
 - レポート・パラメータ
 - レポート・タイトル名

- Designer モデル
- 有効な作業環境の意味
- ユーザー作業環境名

現行、有効な表示言語はデフォルト（英語）または日本語です。

Oracle Designer で生成ツールを使用する場合、ジェネレータ作業環境の説明および有効値の意味を表示する言語を変更できます。「有効な作業環境名」の表示言語を変更すると、Repository Object Browser (ROB) の表示言語も変更されます。

NLS バージョンのリポジトリの場合、リポジトリでサポートされる表示言語用の翻訳テキスト・ファイルは、`oracle_home\REPADMIN\NLS` ディレクトリにインストールされます。

注意： `\NLS` ディレクトリに翻訳ファイルがない場合は、表示言語を変更できません。

NLS 操作のためにリポジトリを設定する手順は次のとおりです。

1. 言語テキスト・ファイルをロードします (Repository Administration Utility のオンライン・ヘルプの「言語テキスト・ファイルのロード」を参照してください)。
2. 目的の表示言語に変更します (Repository Administration Utility のオンライン・ヘルプの「表示言語の変更」を参照してください)。
3. ロード完了後、「リポジトリ言語」グループの「言語」ドロップダウン・リストから「Japanese」を選択し、「設定」ボタンをクリックします (Repository Administration Utility のオンライン・ヘルプ「表示言語の変更」を参照してください)。

コア・オブジェクトのみをサポートするリポジトリに対する Oracle Designer オブジェクトのサポートの有効化

Repository Administration Utility (RAU) からリポジトリをインストールするときには、「リポジトリ (コア) オブジェクトのサポート」または Oracle Designer オブジェクトのサポート」を選択できます。「リポジトリ (コア) オブジェクトのサポート」オプションを選択してリポジトリをインストールした場合に、その後で Oracle Designer クライアント・ツールでリポジトリを使用する場合は、「Oracle Designer オブジェクトのサポート」を追加でインストールする必要があります。これは RAU を再実行して、必要となるサポート・ファイルをインストールすることで実施されます。さらに、リポジトリのアップグレードも必要な場合は、次のいずれかを実行します。

- 最新バージョンの RAU を使用してまずリポジトリをアップグレードし、「Oracle Designer オブジェクトのサポート」をインストールします。
- 既存のリポジトリと互換性があるバージョンの RAU を使用して「Oracle Designer オブジェクトのサポート」をインストールし、最新バージョンの RAU を使用してリポジトリをアップグレードします。

Oracle Designer オブジェクトのサポートを有効にすると、リポジトリはバージョンングされていらないリポジトリになります。コア・リポジトリのみでのバージョン履歴情報はすべて表示されなくなります。再度バージョンングされた状態に切り替えるには、**Repository Administration Utility** で「オプション」→「バージョン・サポートの有効化」を選択します。これでバージョン履歴情報が表示されるようになります（Bug 1419412）。

システム・モデリングと設計ツール

この項では、Process Modeler、Entity Relationship Diagrammer、Function Hierarchy Diagrammer、Dataflow Diagrammer および Design Editor の各ツールの問題とその対処方法について説明します。

コピー、移動および共有

オブジェクト・セットをコピーし、それらの間の参照を保持するには、「拡張コピー」を使用します。

コンテナのコピー

「編集」→「コピー」を使用してコンテナをコピーした場合は、コンテナ内の各オブジェクトが別のオブジェクトとしてコピーされます。コンテナ内の 2 つ以上のオブジェクトが相互に参照している場合は、新しいコンテナ内の新しいオブジェクトを指すように参照が更新されず、依然として元のコンテナ内のオブジェクトを参照しています。次に例を示します。

アプリケーション・システム ABC

表 DEPT

表 EMP

FK : DEPT へ

ABC をコピーし、新しいアプリケーション・システム XYZ を作成します。

アプリケーション・システム XYZ

表 DEPT

表 EMP

FK : ABC.DEPT へ (XYZ.DEPT ではない)

リンクを維持する（この例では外部キーが XYZ.DEPT を指すようにする）には、コンテナ内のすべてのオブジェクトを選択し、「ユーティリティ」→「拡張コピー」を選択します。

既知の問題とその対処方法

Windows 2000 で Oracle Designer ダイアグラマを起動時に " レジストリの更新に失敗しました " エラーが発生する (Bug 1472195)

原因: ローカルの Power Users グループまたは Administrator グループのメンバーでない Windows ユーザーが Oracle Designer ダイアグラマを起動した場合、警告ボックスに「レジストリの更新に失敗しました」が表示されます。このエラーは、ユーザーが Oracle Designer で HKEY_CLASSES_ROOT レジストリ・キーへの書込みを行う権限を持たないために発生します。

処置: 「OK」をクリックしてエラー・メッセージのダイアログ・ボックスを閉じます。次に、Oracle Designer を使用する Windows ユーザーをローカルの Power Users または Administrator グループに追加します。

アプリケーション・ロジックの構文チェックでエラーが不正に報告される (Bug 1366816)

原因: アプリケーション・ロジックで構文チェックを実行すると、エラーが不正に報告される場合があります。この問題が発生する例を、次に 2 つ示します。

- DECLARE が BEGIN より前に現れる場合。この場合は、ワード DECLARE を削除できます (変数宣言はそのままの位置でかまいません)。
- アプリケーション・ロジックが、FORMS_MDI_WINDOW や WINDOW_STATE などの Forms ビルトインを使用する場合。構文チェックではこれらのビルトインを認識しないため、それらを宣言する必要があると報告されますが、Forms Developer 環境ではビルトインが認識されるので、フォームは正しく実行されます。

処置: なし。このような場合、アプリケーション・ロジックが正しく機能していることを確認する最適な方法は、フォームを生成してそのフォームが正しく機能するか確認することです。

ワークエリア・ルールの変更後、Design Editor でのアプリケーション・ロジックが再問合せされない (Bug 1317918)

原因: ワークエリア・ルールが変更された後でも、Design Editor ではアプリケーション・ロジックの誤ったバージョンが表示されたままで再問合せされません。このため、たとえば表の旧バージョンを含めるようにワークエリアを編集したときに、その表に関連付けられているアプリケーション・ロジックが旧バージョンのものになるよう再問合せされません。アプリケーション・ロジックを編集した場合に、そのロジックが古いことを示すメッセージが表示されることがあります。

処置: 次のいずれかの操作を実行します。

- 「ファイル」→「接続の変更」を選択してリポジトリに再接続します。
- 「ファイル」→「ワークエリアの変更」を選択してワークエリアを再選択します。
- Design Editor で別の「ナビゲータ」タブを選択し、元のタブを再選択します。
- Design Editor を再起動します。

Repository Object Navigator で選択するモジュールに対して、「新規言語でコピー」が機能しない (Bug 1317853)

原因: Repository Object Navigator でモジュールを選択する場合に、「ユーティリティ」→「Designer」→「新規言語でコピー」を選択し、言語を選択して「OK」をクリックすると、メッセージ「CDR-00114: コンテナ・テキストが設定されていません」が表示されます。

処置: Design Editor からユーティリティを実行します（「ユーティリティ」→「新規言語でコピー」を選択）。

キャプチャされたキューおよびキュー表をコミットできない (Bug 1290408)

原因: キュー表インプリメントを持たないデータベース・ユーザーへの永続キューおよび対応するキュー表のデザイン・キャプチャでは、妥当性チェックで CDA-02186 エラーが発生することがあります。

永続キュー・インプリメントが「キュー表のデータベース・ユーザー」プロパティを持つデータベース・ユーザーを参照している場合は、データベース・ユーザーにキュー表インプリメントが必要です。妥当性チェックでは、これらのオブジェクトはデザイン・キャプチャに続いて未定義の順序で進められるので、データベース・ユーザーは、永続キュー・インプリメントが検証されるときにキュー表インプリメントを持っていない場合があります。

処置: 最初にキュー表のデザイン・キャプチャを実行し、永続キューのデザイン・キャプチャを再び起動します。

OLE の問題 (Bug 1114261、951673、837571、781670、755568、636409、625193、595590、529856、373015)

原因: OLE を使用した Designer ダイアグラムへのオブジェクトの埋込みまたは他のアプリケーションへの Designer ダイアグラムの埋込みでは、多数の問題が報告されています。

注意: ダイアグラムを開くときの OLE エラーを処理するために、いくつかの特別な例外処理がダイアグラムに追加されました。これにより、前のリリースでは不可能だった一部のダイアグラムの部分的なリカバリが可能になります。

影響を受けるコンポーネント：

- CASEDE - Design Editor
- CASEDFD - CASE Dataflow Diagrammer
- CASEFHD - CASE Function Hierarchy Diagrammer
- CASEERD - CASE Entity Relationship Diagrammer
- CASEPM - CASE Process Modeler

処置：OLE を多く使用しないようにします。

Oracle Designer ダイアグラムにあまり多くのオブジェクトを埋め込まないでください。

たとえば、Microsoft Word 文書にダイアグラムを含める場合には、「編集」→「形式を指定して貼り付け」や「挿入」→「オブジェクト」ではなく、「編集」→「貼り付け」を使用してください。

Process Modeler ダイアグラム内のテキストのオーバーラップ (Bug 995298、627818)

原因：Process Modeler でレイアウトしたときに、記述とラベルがオーバーラップすることがあります。

影響を受けるコンポーネント：CASEPM - CASE Process Modeler

処置：オーバーラップしているテキストを手動で移動するか、可能であれば短いテキストを使用します。

バージョン・ユーティリティを起動した後にダイアグラム表示がおかしくなることがある (Bug 897686)

原因：この問題は次のような場合に発生します。

1. 「バージョン」メニューでユーティリティの1つを起動します。
2. ダイアグラマを起動していない場合は、起動します。
3. 「選択」アイコンをクリックします。
4. 選択領域をダイアグラムにドラッグすると、水平線と垂直線（および点線の選択領域の四角形）が表示されます。これはすべてのツールに共通です。

影響を受けるコンポーネント：

- CASEDE - Design Editor
- CASEDFD - CASE Dataflow Diagrammer
- CASEFHD - CASE Function Hierarchy Diagrammer
- CASEERD - CASE Entity Relationship Diagrammer
- CASEPM - CASE Process Modeler

処置：ツールを再起動します。

印刷スケーリング (Bug 896032、674453、481734)

原因:「印刷」ダイアログ・ボックスでダイアグラムをスケーリングするときに、ダイアグラムが正しく印刷されないことがあります。

影響を受けるコンポーネント:

- CASEDFD - CASE Dataflow Diagrammer
- CASEFHD - CASE Function Hierarchy Diagrammer
- CASEERD - CASE Entity Relationship Diagrammer

処置: 対処方法は、現在ありません。

サーバー・モデルのデザイン・キャプチャでエラー「CDI 22051 - 表がダイアグラム上でオーバーラップしています」が発生する (Bug 749724)

原因: 大きなスキーマをキャプチャして結果をダイアグラムに表示した場合に、自動レイアウトでいくつかのオーバーラップを解決できないことがあります。

影響を受けるコンポーネント: CASEDE - Design Editor

処置: 新しいサーバー・モデル・ダイアグラムに（「データベースからサーバー・モデルのキャプチャ」ダイアログ・ボックスの「ソース」タブにある）「結果を表示」オプションを無効にした状態でデザインをキャプチャし、ダイアグラムには一度に少数のサーバー・モデル定義を含めてください。

バッチ生成がメニュー・モジュールに対して機能しない (Bug 745824)

原因: バッチ・インタフェースで Forms メニュー・モジュールを生成できません。

影響を受けるコンポーネント: CASEDE - Design Editor

処置: Design Editor から Generator を使用します。

プリンタにおけるプロッタの使用 (Bug 660322、344117)

原因: ラスター・デバイス（ほとんどのプリンタ）とは対照的に、プロッタ（ベクター・デバイス）の使用では多くの問題が報告されています。

影響を受けるコンポーネント:

- CASEDE - Design Editor
- CASEERD - CASE Entity Relationship Diagrammer

処置: プロッタのドライバが最新であることを確認してください。プロッタ・ドライバでラスターからベクターへの変換がサポートされている場合は、良好な結果が得られます。ダイアグラムではカスタム色の使用を避けてください。

2つのマスターを持つコンポーネントに対する Module Diagrammer のレイアウトの問題 (Bug 463149)

原因: モジュール・コンポーネントに2つのマスターがある場合は、レイアウトが劣悪になることがあります。

影響を受けるコンポーネント: CASEDE - Design Editor

処置: 対処方法は、現在ありません。

「選択したものの最適表示」に関する問題 (Bug 326606)

原因: 「編集」→「すべて選択」の後に「選択したものの最適表示」を選択すると、ダイアグラムが現在のウィンドウの中央に非常に小さく表示されることがあります。

影響を受けるコンポーネント: CASEFHD - CASE Function Hierarchy Diagrammer

処置: 「編集」→「すべて選択」のかわりに、「編集」→「選択」を選択してからダイアログ・ボックスで「すべて選択」を選択します。この場合は、「選択したものの最適表示」が正しく機能します。

自動レイアウトの「元に戻す」が使用できない (Bug 315136)

原因: 自動レイアウトを何回か実行するまで、「元に戻す」レイアウト・オプションが使用できない場合があります。

影響を受けるコンポーネント: CASEDFD - CASE Dataflow Diagrammer

処置: 対処方法は、現在ありません。

Database Design Transformer

ビューにマップされたエンティティ

選択したアプリケーション・システムに、ビューにマップされたエンティティが含まれている場合は、Database Design Transformer を起動したときにこれらのエンティティ・マッピング情報が削除されます。削除のたびに表エンティティ・マッピングが削除されることを示すダイアログ・ボックスが表示され、確認を求められます。

Entity Relationship Diagrammer から Database Design Transformer を実行するとダイアグラムがロックされる (Bug 1662205)

原因: Entity Relationship Diagrammer から Database Design Transformer を起動すると、エンティティ・リレーションシップ・ダイアグラムにアクセスできなくなります。

処置: 次のいずれかの操作を実行します。

- ダイアグラムを開く前に、Entity Relationship Diagrammer を閉じます。
- ERD から Database Transformer を実行しないようにします。フロント・パネルから Database Transformer を実行します。

Form Generator

Oracle Developer Suite のインストール後に、生成した Form をローカルで実行するには：

1. JInitiator がクライアントにインストールされていることを確認します。
2. startinst.bat ファイル (`oracle_home¥j2ee¥DevSuite¥startinst.bat`) を実行して、OracleAS Containers for J2EE (OC4J) を起動します。
3. Form モジュールを生成します。
4. テキスト・エディタで default.env ファイル (`oracle_home¥forms90¥server¥default.env`) を開きます。
5. Forms90_Path セクションのコメントを解除し、現在 .fmx ファイルがあるサブフォルダのパスおよび `oracle_home¥cgenf61¥admin` を追加します。
6. default.env ファイルを保存して閉じます。
7. Form を実行します。

指定したブラウザに Form が表示されます。

Oracle Application Server のインストール後に、生成した Form をローカルで実行するには：

1. JInitiator がクライアントにインストールされていることを確認します。
2. Form Generator 作業環境 WEBURL に、`appserver_host_name:port/forms90/servlet` を設定します。
3. Form モジュールを作成し、生成した .fmx ファイルの場所をメモしておきます。
4. Oracle Application Server の Oracle ホーム (Oracle Application Server をインストールしたクライアントの場所) の forms90 フォルダにサブフォルダを作成します。
5. 生成した .fmx ファイルを、前の手順で作成したサブフォルダに移動します。
6. テキスト・エディタで default.env ファイル (`appserver_oracle_home¥forms90¥server¥default.env`) を開きます。
7. Forms90_Path セクションのコメントを解除し、現在 .fmx ファイルがあるサブフォルダのパスおよび `oracle_home¥cgenf61¥admin` を追加します。
8. default.env ファイルを保存して閉じます。
9. Web ブラウザ (Internet Explorer を推奨) を起動し、次のように URL を入力します。

```
app_hostname:port  
/forms90/servlet/?form=form.fmx&userid=user/pwd@connect
```

生成した Form が Web ブラウザで実行されます。

Oracle Designer の OCX/OLE 項目タイプ (Bug 1978769)

OCX コントロールまたは OLE コンテナ・タイプの項目はモデル化できますが、これらのタイプは現在テキスト項目として生成されます。このような生成を行ったときに警告メッセージ 39 が表示されます。

Form レベル・トリガーの作成レベルに関する仕様変更の影響 (Bug 2037694)

Oracle Forms で一部のトリガーに制限が追加されました。次のトリガーは、現在フォームまたはブロック・レベルでのみ許可されます。

```
WHEN-CLEAR-BLOCK  
WHEN-CREATE-RECORD  
WHEN-DATABASE-RECORD  
WHEN-NEW-RECORD-INSTANCE  
WHEN-REMOVE-RECORD
```

次のトリガーは、現在フォーム・レベルでのみ許可されます。

```
WHEN-NEW-FORM-INSTANCE
```

以前は、ブロックまたは項目レベルでこれらのトリガーの追加作成が許可されていました。Oracle Designer は、引続き設計ステージではこの機能をサポートしますが、この機能は使用しないでください。

生成時に使用する名前の文字数 (Bug 2061520)

Oracle Designer でオブジェクト名として許可される文字数は名目上 30 バイトですが、生成中に追加される接頭辞に 8 バイトが必要です。このため、実際のオブジェクト名の最大文字数は 22 バイトになります。

Oracle Forms のメニュー置換パラメータ (Bug 2067988)

Oracle9i Forms (9.0.2) 以降では、メニュー置換パラメータはサポートされません。そのため、Oracle Designer は、置換パラメータを使用したユーザー定義のメニュー生成をサポートしていません。Oracle9i Designer 以降では、ユーザー定義のメニュー・パラメータ (*myparm* など) は、実際には置き換えられず、「:myparm」のようにメニュー上にそのまま表示され、Generator によって警告されます。同様の結果に達成するためには、このようなパラメータではなく他のコードや方法を使用することをお勧めします。

サブコンポーネントがある場合、レイアウトを保持するオプションを指定したフォームの生成ができない (Bug 1317873)

レイアウトを保持した生成は、サブコンポーネントでは機能しません。

表の名前の一意性に関する注意事項

Form Generator では、表の名前とそのキーが最初の 21 バイト以内で一意でなければなりません。表名は、プログラム・ユニットの名前を作成するために使用され、30 バイトに制限されています。

Form Generator は、様々な機能領域をサポートするために、プログラム・ユニットに名前を付けるときに名前の前に次のようなテキストを付加します。

CGRI\$CHK_ table_name または CGRI\$DEL_ table_name

レイアウトの保持の生成で、タブ上のブロック・レイアウト機能がサポートされない

一度生成したフォームにタブ・キャンバスを追加したりすると、追加挿入されたブロックの順序およびサイズの影響で、再生成時にレイアウトを保持して生成できません。一般に、タブ上のブロック・レイアウト機能で設計されたフォームに対して、レイアウトの保持モードで生成を行うと、正しく実行されない場合があります。フォーム・レイアウトを手動で変更した場合は、デザインをリポジトリにキャプチャしてから再生成します。

オブジェクト・ライブラリ名

Oracle Form Generator に付属の標準オブジェクト・ライブラリの名前は、バージョン 6i、9i および 10g で変更されていません。リリース 6i で生成されたフォームは、9i または 10g のオブジェクト・ライブラリではコンパイルされない場合があります（その逆も当てはまりません）。これは、ユーザーが 1 つの領域に両方のリリースで生成された .FMB ファイルを持つ場合に、混乱の原因になります。

作業環境 ITMMPW および ITMPPE

作業環境 ITMMPW（最小許可幅）および ITMPPE（許可されている拡張の割合）は、ブロック・タイトルに適用されるようになったため、モジュール・レベルまたはモジュール・コンポーネント・レベルで設定されている場合は、既存のタイトルに対する余分な空間が追加され、レイアウトが変わる可能性があります。

Web PL/SQL Generator

Web PL/SQL Generator library (WSGL) の新しい "隠しデータ" 表示タイプ

Web PL/SQL Generator は、生成時に、プロシージャ、関数、および定数の WSGL PL/SQL ライブラリ・パッケージを使用します。このパッケージは新しい "隠しデータ" 表示タイプを組み込むために再構築されたため、この機能を使用するにはこのパッケージを再インストールする必要があります。

パッケージ仕様ファイルは wsgl.pks で、パッケージ本体は wsgl.pkb です。両方のファイルは、Oracle Designer インストール・ディレクトリの CGENW61¥CVWETC ディレクトリにあり、PL/SQL Toolkit スキーマにインストールする必要があります。設定方法は、ヘルプ・トピック「PL/SQL Toolkit スキーマの設定」を参照してください。

Web PL/SQL で生成された Single Sign-On モジュールでの DAD (データベース・アクセス記述子) 構成 (Bug 2288798)

WSGSSO パッケージで WSG アプリケーションの SSO 認証を提供したとしても、DAD を使用して生成したアプリケーションにアクセスするには、認証モードとして "Basic 認証" を使用する必要があります。

これは、生成されたアプリケーションが、SSO サーバーでの認証と共に、WSGSSO セキュリティ・パッケージを使用してアプリケーション自身が所有するセキュリティ管理表を使用するためです。

注意： DAD の設定方法の詳細は、Oracle Application Server の管理者ガイドを参照してください。

Oracle Application Server で Portal Single Sign-On の設定時にポート番号指定が必要

Oracle Application Server 環境で OracleAS Portal の Single Sign-On (SSO) を設定する場合は、ポート番号を指定する必要があります。このポート番号は、Oracle Enterprise Manager の HTTP Server ページの仮想ホスト・セクションで指定されているものでなければなりません。

次の場合にポート番号を指定してください。

- OracleAS Portal インスタンスのパートナー・アプリケーションを追加する場合に、ホーム URL および成功 URL に対して指定。
- REGAPP.SQL を編集したとき、p_lsnr_token の値として指定 (例: servername.domain.com:3340)。
- Web PL/SQL Generator の Web Agent URL オプションを指定するときに指定 (例: http://servername.domain.com:3340/BASIC_DAD/)。

このため、Portal 管理者は、適切な DAD を作成した後に、正確なポート番号を含む Web Agent URL を Portal ユーザーに通知する必要があります。

Report Generator、デザイン・キャプチャおよびアプリケーション・ロジック・キャプチャ

モジュール短縮名およびインプリメント名に対する Report Generator の制約

現在、Report Generator には、モジュール短縮名とインプリメント名に空白を含めることができないという制約があります。空白を含めると、次のエラーが発生して生成が失敗します。

CGEN-03448 エラー：モジュール名：無効な Oracle 名です。'module_name' に変更してください

module_name は、空白を含まないモジュール名です。

対処方法は、モジュール短縮名とインプリメント名に空白を含めないことです。

RDF ファイルから ORDER BY 句のキャプチャができない

デザイン・キャプチャ・ツールでは、順序の並べ替え構文が `select` 文中の項目の順序に対応する数値に基づいている場合、その順序の並べ替えのキャプチャはサポートされません。次に例を示します。

```
select empno, deptno, job from emp order by 2;
```

ここで、順序の並べ替えは `deptno` に基づいていますが、リカバリはされません。

`select` 文の次の構文の場合は、並べ替え情報がリカバリされます。

```
select empno, deptno, job from emp order by deptno;
```

アプリケーション・ロジックをリカバリする前に Report Generator によって生成されたタグを変更してはならない

Report Generator は、イベントまたは名前付きルーチンが定義されたリポジトリ要素を識別するために、生成されたプログラム・ユニットにタグ（例：CG\$PV0001.5642752）を含めます。アプリケーション・ロジックをキャプチャするときに、Report Generator はこのタグを使用してアプリケーション・ロジックを適切なリポジトリ要素に関連付けます。

タグを変更または削除し、アプリケーション・ロジックをキャプチャしようとする、Report Generator はキャプチャされたアプリケーション・ロジックに関連付けられているリポジトリ要素を識別できません。このため、Report Generator は、キャプチャされたアプリケーション・ロジックをリポジトリのウィンドウ定義に関連付けます。

生成されたプログラム・ユニットをキャプチャする場合は、生成されたプログラム・ユニットに埋め込まれているタグを変更または削除しないでください。

ヒント : Report Builder を使用してユーザー・アプリケーション・ロジックを追加する場合は、まず最初に、該当のリポジトリ要素に中身のないイベント・コードまたは名前付きルーチンを作成することをお薦めします。これによって、Report Generator が、レポート内に有効なタグを含むコードを生成します。その後、Report Builder を使用してコードを変更できます。デザイン・キャプチャ中に、Report Generator はアプリケーション・ロジックをキャプチャし、タグを使用してそのアプリケーション・ロジックを適切なリポジトリ要素に割り当てます。リポジトリでアプリケーション・ロジックを最初に定義しない場合は、有効なタグが存在せず、Report Generator はアプリケーション・ロジックをキャプチャしてウィンドウ定義に関連付けます。

変更された生成済アプリケーション・ロジックの指定

生成されたアプリケーション・ロジックは、Report Builder で変更できます。その後の生成でこの変更されたアプリケーション・ロジックを保持するには、リポジトリにキャプチャする必要があります。デフォルトでは、生成されたアプリケーション・ロジックを変更したことを指定しないかぎり、Report Generator ではそのアプリケーション・ロジックはキャプチャされません。

生成されたアプリケーション・ロジックを変更したことを指定するには、1 つ以上の英数字（空白以外）をコメント記号（--）と生成されたタグの先頭の間に追加します。

たとえば、生成されたタグを含む行は、次のようになります。

```
-- CG$PV0001.5642752
```

このアプリケーション・ロジックを変更し、それがキャプチャ対象であることを指示するには、タグを次のように変更します。

```
-- modified CG$PV0001.5642752
```

バッチ生成ツールから生成しようとすると、Report 生成が失敗する場合がある (Bug 2106132)

原因 : バッチ生成ツールから、同一のバッチで Form も生成する場合、Report は生成できません。

処置 : Report と Form を別々に生成します。

レポート・テンプレート内のヘッダー・セクションおよびフッター・セクションが使用できない (Bug 1386933)

原因 : Designer 2.1.2 までは、ヘッダー、ボディおよびトレーラの各テンプレートをレポートに適用できました。しかし、Oracle Reports 6.0 以降では、機能変更によってレポート・ヘッダーおよびトレーラにはテンプレートを使用できなくなりました。

処置 : 対処方法は、現在ありません。

Server Generator

設計されたモデル定義と生成対象のデータベースのもつ機能の違い

Oracle Designer では多くの洗練されたデータベース機能のモデリングが可能です。ただし、すべてのデータベースがそれらの機能を実装しているとはかぎりません。生成対象のデータベースでサポートされていない機能を生成した場合は、エラーが発生します。

列のデフォルト値はユーザー定義ファンクションから導出できない (Bug 2030889)

Oracle データベースでは、ユーザー定義ファンクションから列のデフォルト値を導出することはできません。Design Editor でそのような列を持つ表を作成した場合、見かけ上エラーが発生することなく表が作成されます。しかし、モデル設計をデータベースに生成しても、ユーザー定義ファンクションがデフォルト値として有効でないというエラーが表示され、Server Generator は失敗します。

Server Generator 用の ODBC ドライバ

Microsoft SQL Server 7.0 に接続するには、SQL Server 7.0 クライアント・ソフトウェアに付属の Microsoft SQL Server ODBC ドライバを使用します (Server Generator は、SQLSVR32.DLL バージョン 3.70.06.23 を使用してテストされています)。

IBM DB2/MVS v5 ODBC 接続のログオンの詳細を指定する場合は、ユーザー名を大文字で入力して、サーバー・モデルをキャプチャするために任意のオブジェクトを参照できるようにする必要があります (Bug 1314224 を参照)。

DB2/MVS v5 に接続する場合は、IBM DB2 ODBC ドライバを使用して接続します (Bug 1314307 を参照)。

Server Generator では、ODBC または Oracle Network レイヤーを使用したオンライン・データベースへの接続が提供されます。

以前のバージョンの RDBMS 用に設計された古いドライバを使用すると、新しい RDBMS で導入された正しいタイプや構文構成を認識できないなど、予期しない動作が発生する場合があります。

データベース・プロバイダまたは各ベンダーから Oracle データベース以外の ODBC ドライバを入手することをお勧めします。

Sybase System 11 データベースでの Server Generator の使用

生成またはキャプチャのために Sybase System 11 データベースにアクセスする前に、Sybase のパッチ (ref. EBF 7704) を Sybase クライアントに適用する必要があります。このパッチが適用されていない場合は、Design Editor が予期せず終了することがあります。

「分散機能を生成」が機能しない (Bug 771052)

原因: Server Generator は、データベース・リンクを介してオブジェクトを参照するシノニムを生成しません。したがって、「Database Generator オプション」ダイアログ・ボックスの「分散機能を生成」チェックボックスは効果がありません。

処置: 対処方法は、現在ありません。

Design Editor からのレプリケーション・グループの生成で、正しいファイルが生成されない (Bug 675058)

原因: Server Generator は、マスター・レプリケーション・グループまたはレプリケート・グループのコードを生成しません。したがって、「データベース管理オブジェクトを生成します」ダイアログ・ボックスの「レプリケーション・ステートメントを生成」チェックボックスと、「Database Generator オプション」ダイアログ・ボックスの「オブジェクトをレプリケーション・コードに割当て」チェックボックスは効果がありません。

処置: 対処方法は、現在ありません。

同じサーバー・モデル・ダイアグラムを 2 回開くことができる (Bug 641532)

原因: Design Editor のサーバー・ダイアグラムでは、同じサーバー・ダイアグラムを何回でも開くことができます。

処置: 各ダイアグラムは 1 回だけ開いてください。

Repository Reports

デフォルト日付書式

次の状況は、デフォルト日付書式を YYYY-MM-DD に明示的に設定することですべて解決されます。このように設定するには、Design Editor または Repository Object Navigator で「オプション」→「一般設定」を選択し、「日付書式」フィールドにこの値を入力します。

- YY-MM-DD という書式で日付を入力し、マウスで別のパラメータを選択するか、レポートを即時に実行した場合は、正しい日付書式 YYYY-MM-DD に対して妥当性チェックの警告は表示されません。妥当性チェック・メッセージは、日付フィールドで [Tab] を押した場合、またはその後レポートを実行した場合にのみ表示されます。妥当性チェック・メッセージが表示された後でも、たとえば 99-01-01 などと指定された日付でレポートを実行できます。この場合、日付は 0099-01-01 に変換されます (Bug 1308455)。
- 開始日のパラメータ値が終了日のパラメータ値より後の場合でも、妥当性チェックが実行されません (Bug 1308455)。
- Design Editor または Repository Object Navigator で日付書式を YY-MM-DD に変更し、Repository Reports を起動した場合は、レポートは Y2K 対応ではなくなります。日付書式に対して妥当性チェックは実行されず、YYYY-MM-DD という書式で日付を入力した場合でも出力は生成されません。

Matrix Diagrammer

Matrix Diagrammer: マトリックス・ダイアグラムからの VHV の起動

マトリックス・ダイアグラムから初めて VHV を起動しようとする、次のエラーが表示されます。

Diff またはマージを実行しようとしたがメモリー不足です。

対処方法としては、Designer でマトリックス・ダイアグラム以外から VHV を起動します。

Matrix Diagrammer: 一部の要素タイプを作成、更新、削除またはバージョンニングできない

Matrix Diagrammer を使用して、コンテナ、ワークエリアまたはコンフィグレーションを作成、更新、削除またはバージョンニングできません。また、要素とコンフィグレーションの間のコンフィグレーション・メンバーシップを作成または削除することもできません。

対処方法としては、Repository Object Navigator を使用してこれらの操作を実行します。

交差部が外部キーの場合、Matrix Diagrammer で一般保護違反が発生する (Bug 1456480)

交差部が外部キーの場合（たとえば、「表定義」対「リレーション定義」で選択した場合）、Matrix Diagrammer で一般保護違反が発生します。交差部が外部キーでない場合は正常に動作します。

アクセシビリティ

全般 (Bug 2023560)

Microsoft Windows 2000 では、[Alt] キーを押すまで Oracle Designer のダイアログ・ボックスやメニューのニーモニック（ショートカットを示すアンダースコア）は表示されません。

Form Generator (Bug 2055467)

原因: 生成したナビゲーションのアクション・アイテムへのキーボード・アクセスに制限があります。

処置: メニュー・オプション「ブロック」→「次へ」を使用してアクション・アイテムにフォーカスを移動します。次に、[Enter] キーを使用して項目を選択します。

Repository Reports (Bug 1549890)

原因: Repository Reports Navigator を使用しているときに、ノード間でフォーカスが移動すると、JAWS が誤った文を読み取る場合があります。

処置: マウスを使用して Navigator にアクセスしない場合は、この問題は発生しません。

Design Editor (Bug 1549933)

原因: Design Editor で Navigator を使用しているときに [Insert] キーを押しながら [↑] キーを押すと、JAWS が正常に動作しない場合があります。

処置: マウスを使用して Navigator にアクセスしない場合は、この問題は発生しません。

その他の問題および制限事項

著作権

「Copyright 2002」の表示がある箇所は、「Copyright 2003」も適用されますのでご注意ください。

リポジトリ・データのエクスポートには、異なる Oracle ホームに適切なバージョンのインポートおよびエクスポート・ユーティリティが必要

リポジトリ・データをエクスポートするには、使用するリポジトリに適したバージョンの Oracle インポート・ユーティリティおよびエクスポート・ユーティリティ (IMP と EXP) をインストールする必要があります。つまり、8.1.6 データベースに対しては 8.1.6 のユーティリティを、8.1.7 データベースに対しては 8.1.7 のユーティリティを使用する必要があります。これらのユーティリティは、Oracle Developer Suite と同じ Oracle ホームにはインストールしないでください。

Oracle Designer/Oracle Developer オートメーションを使用する場合の制限

状況によっては、Design Editor から実行する Oracle Forms Developer のインスタンスを取得できないことがあります。たとえば、フォームの生成後にアクション・アイテム・リストをクリックし、**Form Builder** を実行するオプションを選択しても何も起きません。つまり、Oracle Forms Developer は起動しません。この場合は、レジストリ・ファイルで次のエントリを変更する必要があります。

```
HKEY_CLASSES_ROOT
¥CLSID¥{4271DF00-B54A-11CF-864B-0020AF1D40D7}
¥LocalServer32
ifbld90.exe /AUTOMATION
```

このエントリを次のように変更します。

```
HKEY_CLASSES_ROOT
¥CLSID¥{4271DF00-B54A-11CF-864B-0020AF1D40D7}¥LocalServer32
oracle_home¥ifbld90.exe /AUTOMATION
```

画面の解像度タイプ

Oracle Designer は、SVGA（推奨）と VGA のどちらでも実行できます。

システム・フォント・サイズ

システム・フォントのサイズは「小さいフォント」に設定することをお薦めします（「コントロール パネル」→「画面」→「設定」→「フォント サイズ」から変更できます）。

SQL または PL/SQL の予約語

要素のインスタンスは、名前に SQL または PL/SQL の予約語を指定して作成できます。ただし、これらの要素名が SQL または PL/SQL 文で使用される可能性があることに注意する必要があります。また、SQL または PL/SQL の予約語と同じ名前を持つシステム・モデル化要素が作成された場合、その要素をシステム・デザイン要素に変換できない場合があります。

ORA-12514 Message not found

状況によっては、メッセージ ORA-12514 に対象のテキストが表示されないことがあります。「ORA-12514: TNS:Listener は与えられた接続識別子から SERVICE_NAME を解決できません」がメッセージのテキストです。

原因: CONNECT_DATA 内の SERVICE_NAME がリスナーの表に見つかりませんでした。

処置: 指定された SERVICE_NAME が正しいことを確認します。

データベース・インスタンスがリスナーに登録されていないと、このエラーが返されます。インスタンスを再起動する必要がある場合があります。

プラットフォーム固有の問題および対処方法

プラットフォーム固有の問題は現在ありません。

構成に関する問題および対処方法

構成に関する問題は現在ありません。

管理に関する問題および対処方法

管理に関する問題は現在ありません。

ドキュメントの記載内容の誤り

ドキュメントに関する既知の問題は現在ありません。

Oracle Software Configuration Manager

この章では、次の Oracle Software Configuration Manager (SCM) のトピックについて説明します。

- 一般的な問題とその対処方法
- 既知の問題と制限事項
- キーボード制御に関する既知の制限事項
- プラットフォーム固有の問題および対処方法
- 構成に関する問題および対処方法
- 管理に関する問題および対処方法
- ドキュメントの記載内容の誤り

一般的な問題とその対処方法

パッチセット

Oracle Developer Suite 10g (9.0.4) JP Update CD に Oracle Designer/SCM の最新のパッチセットが含まれている場合には、最新の 9.0.4 パッチセットを既存の Oracle ホームにインストールしてクライアント・ソフトウェアをアップグレードしてください。

リポジトリを構築可能な Oracle データベース

本リリースでは、リポジトリを構築可能な Oracle データベースとして、8.1.7.4、9.0.1.4、9.2.0.4 が保証されています。より最新の情報は、次のシステム要件のページを参照してください。

<http://www.oracle.co.jp/products/system/index.html>

多言語環境

Oracle SCM をインストールするときに、異なる製品言語を組み合わせで同じコンピュータ上にインストールすることができます。その言語の 1 つとして日本語を選択する場合（たとえば日本語と韓国語と英語を選択）は、ユーザー・インタフェース（翻訳）は日本語で表示されますが、これはクライアント・コンピュータの NLS 言語を変更しても変えられないことに注意してください。日本語を選択しない場合（たとえば中国語と韓国語と英語を選択）は、ユーザー・インタフェースは英語で表示されます。したがって、ユーザー・インタフェースを日本語で表示する必要がある場合は、製品言語として日本語を選択しないでください。

製品言語の 1 つに日本語を選択した場合は、日本語フォントがインストールされていることを確認してください。

API およびモデルのリファレンス・ガイド

API およびモデルのリファレンス・ガイドは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp>) から入手できます。画面左のナビゲータ・フレームで、「ドキュメント」→「Oracle Software Configuration Manager」→「Oracle SCM Repository API およびモデル リファレンス・ガイド」を選択します。

既知の問題と制限事項

この項では、次の内容に関する既知の問題と制限事項について説明します。

- [移行](#)
- [SCM Java ツール](#)
- [Repository Administration Utility \(RAU\)](#)
- [Repository Object Navigator](#)
- [比較ユーティリティ](#)
- [マージ](#)
- [Version History Viewer](#)
- [Version Event Viewer](#)
- [インポートとエクスポート](#)
- [Dependency Manager](#)
- [Command Line Tool](#)
- [その他の既知の問題と制限事項](#)

移行

Designer リリース 6.0 からの移行中に、ORA-02063 が発生 (Bug 2758364)

原因: 移行プロセス実行中に、ステージ CK_UPGRADE_MOD で次のエラーが発生しています。

```
ORA-02063: 先行のエラー・メッセージを参照してください。 R212
```

```
..
```

```
RME-02124: SQL 文を実行できませんでした: begin ck_upgrade_mod.init(:b1, b2);  
end;
```

この他にも、同様のエラーが移行プロセスの各ステージで発生する場合があるので注意してください。

RAU コントロール・パネルの再試行ボタンをクリックするか、インスタンスを停止および再起動してからエラー発生箇所から移行をやりなおすことにより、この問題が解決することがありますが、この問題が続いて発生する場合は、移行元または移行先のインスタンスが正しく設定されていないことが原因として考えられます（次の説明を参照してください）。

処置: このようなエラーが発生した場合、移行元の Designer 6.0 インスタンスで設定されているオープン・カーソルが不足していることが考えられます。

確認するには、init.ora パラメータ・ファイルで open_cursors の設定を調べます。この設定がない場合は、デフォルトである 50 が使用されます。

次の SQL コマンドを SYS から実行して、設定を確認してください（リリース 8.0.x）。

```
SQL> select NAME, VALUE
2 from V$PARAMETER
3 where upper(NAME) like 'OPEN_CURSORS'
/

Name          Value
-----
open_cursors  50
```

注意: init.ora ファイルでの値は、インスタンスに適用されている値と異なることがあるため、この SQL を実行することをお薦めします。8i 以上では、次のコマンドを使用します。

```
SQL> show parameter open_cursors
```

```
NAME          TYPE      VALUE
-----
open_cursors  integer   50
```

処置: 使用している Designer 6.0 インスタンスのインストール・ガイド（第 2 章）を参照してください。ハードウェア環境によっては、open_cursors 設定を最小推奨値以上にする必要があります。たとえば、PC では、最小値として open_cursors=400 が推奨されています。変更内容を適用するには、インスタンスを停止して再起動します。それでも問題が解決しない場合は、オラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

init.ora のすべてのパラメータが、製品付属のドキュメントに記載されている最小推奨値以上に設定されているかどうかを確認することをお薦めします。これは、Designer 6.0（移行元インスタンス）と SCM（移行先インスタンス）の両方に当てはまります。

ユーザー拡張の要素名と 9i の要素名との競合（Bug 1386747）

原因: リリース 9.0.2 または 9.0.4 のリポジトリへ移行するときに、9i で予約されている名前（たとえば "Project"）を持つユーザー拡張要素を移行しようとするすると、次の警告メッセージが返されます。

複数名が重複しているため、要素 element_ID の挿入をスキップします。

処置: 対処方法はありますが、この件に関してはオラクル社カスタマ・サポート・センターにお問い合わせください。

PL/SQL 定義が正しく移行できない (Bug 2247066)

原因: 最新の Oracle Designer リポジトリに Designer 6.0 データを移行しようとした場合、PL/SQL 定義が正しく移行できません。エラー・メッセージは何も表示されませんが、移行後、PL/SQL 定義の「PL/SQL ブロック」プロパティの任意テキストは、PL/SQL 定義の「プライベート宣言」プロパティに移動されてしまいます。

処置: これは、データベース側のバグに起因します。この修正は Oracle8i 8.1.7.4、Oracle9i Release 1 9.0.1.4 または、Oracle9i Release 2 (9.2) に含まれており、そのバージョンを使用することで回避できます。

異なるマルチバイト・キャラクタ・セットを使用する場合の移行

原因: 新しいインスタンスをホストするデータベースの作成時にマルチバイト・キャラクタ・セットが指定されており、このキャラクタ・セットが、既存の 6.0 インスタンスをホストするデータベースのものとは異なる場合、文字データが大きすぎることが原因で移行時にエラーが発生することがあります。たとえば、6.0 のリポジトリで使用されるキャラクタ・セットが WE8ISO8859P1 で、移行先データベースでは UTF8 が使用される場合、128 ～ 255 の範囲の文字に必要なバイト数が 1 バイトから 2 バイトに増えます。これにはすべての非 ASCII 文字が含まれます。リポジトリ内のオブジェクトの名前にこのような文字が含まれており、その名前の長さが名前の列の定義で定められた最大長に達している場合は、移行されるデータが大きすぎることになり、移行時に新しいリポジトリに挿入しようとしたときにエラーが発生します。

処置: データベースの初期化パラメータとして NLS_LENGTH_SEMANTICS=CHAR を指定します。これにより、データ長をキャラクタ単位で計算するようになります。

SCM Java ツール

TNSNAMES.ORA の構成によって、SCM Java ツールの起動に失敗することがある (Bug 2181931)

原因: Oracle9i サーバー上にあるリポジトリに接続するときに、SCM の Java ツールを起動することができません。この問題は、SCM Java ツールの次のいずれかを起動しようとしたときに発生します。

- Command Line Tool
- Dependency Manager
- Version History Viewer (VHV)
- Version Event Viewer (VEV)
- 比較ユーティリティ
- マージ・ユーティリティ

Java ツールの起動に失敗した場合は、次の現象がみられます。

1. 問題点 : Java アプリケーションが起動しない

ショートカットまたは Repository Object Navigator から Command Line Tool を起動したときに発生します。

2. 問題点 : [JDK2] No message error at ... RepositoryConnection.setConnection (RepositoryConnection.java:608)

Command Line Tool から 'connect' コマンドを実行しようとしたときに発生します。

3. 問題点 : java.lang.IllegalArgumentException : ErrorDialog: null message vector

Dependency Manager (ckdm61) を DOS コマンド・プロンプトから実行したときに発生します。

4. 問題点 : CDR-03120 : 内部エラー - リポジトリ接続の確立エラー

VHV、VEV または比較ユーティリティを Repository Object Navigator から起動したときに発生します。

5. 問題点 : 接続ダイアログが表示されたままになる

Dependency Manager を Repository Object Navigator または Oracle Designer Front Panel から起動したときに発生します。

これらの問題はいずれも同じ原因によるものです。Thin JDBC ドライバにバグがあり (Bug 2346116)、接続文字列の長さが 184 ~ 192 文字のときに接続に失敗します。

注意 : この問題が発生するのは、Oracle9i サーバーに接続する場合のみです。Oracle 8.1.7 サーバーに接続する場合は、SQL*Plus およびリポジトリの C++ ツールが動作するように TNSNAMES.ORA が設定されていれば、Java ツールは起動できます。

処置 : JDBC ドライバに渡される接続文字列の長さが 184 ~ 192 文字の範囲内でないことを確認してください。この文字列の長さには様々な環境面の要素が関係しますが、次にその例を示します。

- データベース・インスタンス名
- データベース・ホスト名
- データベース・ホスト・ドメイン
- クライアント・コンピュータのネットワーク名
- クライアント・コンピュータのユーザー名
- Oracle SCM 用の Oracle ホーム・ディレクトリの名前

したがって、どのような状況でも解決できる簡単な対処方法はありません。特定の TNS 別名を使用するときにこの問題が発生する場合は、TNSNAMES.ORA ファイルにあるその別名のエントリの長さを変更してください。エントリの長さを増減するときは、9 文字以上にすることをお薦めします。このようにする最も簡単な方法は、次のように、Oracle Net 構成ツールを使用してホスト名にドメインを追加するか、ホスト名からドメインを削除することです。

- まだドメインを指定していない場合は、*host* ではなく *host.domain* を使用します。
- すでにドメインを指定してある場合は、*host.domain* ではなく *host* を使用します。

Repository Administration Utility (RAU)

アップグレード時にステージ CKREPINI で通信チャネル終了エラーが発生する (Bug 1889920)

原因: リポジトリ・データベースが Oracle8i 8.1.7 の場合、アップグレード時に、次のエラーが発生してステージ CKREPINI が異常終了することがあります。

```
end-of-file-communication channel  
ORA-24323: 値が許可されていません。  
エラー・アクセス・パッケージ DBMS_APPLICATION_INFO  
ORA-03114: ORACLE に接続されていません。
```

処置: サーバー・パッチ 1408453 を適用します。必ずデータベースのバージョンに応じたパッチをダウンロードしてください。サーバーにパッチを適用した後で、Repository Administration Utility から完全調整を実行します。これによって、ステージ CKREPINI が再実行されますが、このときは正常終了します。

従属ユーザーが移行を実行するには明示的な権限付与が必要

原因: 以前のリリースの Repository Administration Utility では、従属ユーザーもリポジトリ所有者と同様に移行を実行することができました。これはこのリリースで変更されており、デフォルトでは、移行ユーティリティを実行できるのはリポジトリ所有者のみです。ただし、状況によっては従属ユーザーが移行を実行できるようにする場合もあります。

処置: リポジトリ所有者は、Repository Administration Utility で従属ユーザーの「リポジトリ・ユーザー・プロパティ」ダイアログの「移行ユーティリティ (RAU)」チェックボックスを選択することにより、移行ユーティリティを実行する権限をこのユーザーに明示的に付与できます。

ユーザー拡張の再マップの後に調整を実行するという指示が表示されない (Bug 1304800)

原因: Repository Administration Utility で、既存のユーザー拡張要素タイプを再マップした後に、完全調整を実行するようという指示が表示されません。

処置: ユーザー拡張要素タイプの再マップの後に、必ず完全調整を実行してください。

Repository Object Navigator

ファイルとフォルダ

ファイルとフォルダのみを使用する場合は、「ナビゲータ」ウィンドウの「ファイル」の見出しを非表示にしてもかまいません。このようにするには、「ナビゲータ」→「表示 / 非表示」を選択し、「タイプ・ヘッダーの表示」フィールドの「オブジェクト」を選択し、「なし」オプション・ボタンを選択します。

内容のチェックイン

ワークエリアまたはコンテナの内容をチェック・インするには、「バージョン」→「チェックアウトのリスト」を選択し、サブコンテキストを選択して「OK」をクリックします。「チェックアウトのリスト」ダイアログ・ボックスの「すべて選択」をクリックし、「チェックイン」をクリックします。

除去

ワークエリアからバージョンを除去した場合、ワークエリアをリフレッシュするまでは、それ以前のバージョンや、該当するワークエリア・コンパイル・ルールに依存するその他のバージョンは表示されないことに注意してください。

Repository Object Navigator から Java ユーティリティを実行するときのメモリー使用量

比較ユーティリティとマージ・ユーティリティ、および Version History Viewer と Version Event Viewer は Java で記述されています。これらのツールを初めて実行するときに、Repository Object Navigator プロセスの内部で Java Virtual Machine (JVM) が起動されます。このとき、Repository Object Navigator が非常に多くのメモリーを使用しているように見えます。プロセスが終了するまで JVM は停止しないので、ツールのウィンドウを閉じても、Repository Object Navigator を停止するまではメモリー使用量は減少しません。

JVM の起動時に使用されるメモリー・パラメータを設定するには、レジストリ設定を使用します。メモリーの割当量は、使用量およびホスト環境に応じて調整してください。これは、次に示す Windows レジストリ変数の値を変更することで行えます。各レジストリ・キーの下に表示されるこれらの値はすべてバイト単位です。

- キー HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥HOMEn¥REPADM61
 - JVM_NATIVE_STACK_SIZE
 - JVM_JAVA_STACK_SIZE
- キー HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥ORACLE¥HOMEn¥REPADM61¥DEFAULT_JVM_PARAMS_THIN_JDBC
 - JVM_MIN_HEAP_SIZE
 - JVM_MAX_HEAP_SIZE

(HOME n は、複数の Oracle ホームを持つ環境にインストールされているホームの番号ですが、デフォルトの Oracle ホームを使用している場合は表示されません)

これらの Java ツールを起動するたびに使用されるメモリーが、完全には解放されないという問題もあります。この結果、ツールの起動回数が増えるとメモリー不足の状態になることがあります。この状態が発生した場合は、Repository Object Navigator を停止して再起動します。または、Command Line Tool から起動することにより、Command Line Tool の JVM 内で実行します。

ファイル・レジストリの編集: %.DOC および %.doc (MS Word) のデフォルトはバイナリでなければならない (Bug 1321896)

原因: Repository Object Navigator では、ファイル・レジストリのデフォルトのルールは、拡張子が .DOC または .doc のファイルはテキスト・ファイルであるとされていますが、Windows コンピュータでは、多くの場合これらの拡張子はバイナリである MS Word ファイルに使用されています。

処置: 「ユーティリティ」メニューから「ファイル・レジストリの編集」を選択し、「ルールを編集」オプションを使用して、これらの拡張子を持つファイルのルールを「バイナリ・ファイル」に変更します。

接続文字列を使用しない場合、VHV、VEV、Dependency Manager および比較ユーティリティに接続できない (Bug 2028385)

原因: ローカル・マシン (例: 接続識別子を指定せずに repos/manager で接続) のデフォルト・データベースのリポジトリに接続した場合、VHV、VEV、Dependency Manager および比較ユーティリティは起動できません。次のエラーが表示されます。

CDR-03120 : 内部エラー - リポジトリ接続の確立エラー

Command Line Tool は起動しますが、すぐに閉じてしまいます。Command Line Tool を直接起動して、ローカル・コンピュータのデフォルト・データベース上のリポジトリに接続しようとする、Java エラーが発生します。

処置: Oracle Net 別名を指定して、ローカル・マシンのデフォルト・データベースのリポジトリに接続します (例: repos/manager@local)。このように local を別名として設定します。

インポート元とインポート先のリポジトリでのユーザー拡張の競合が原因でインポートが異常終了する (Bug 2088494)

原因: Repository Object Navigator でアプリケーション・システムのインポートを実行するとき、インポート元リポジトリからエクスポートされたユーザー拡張とインポート先との間で競合が検出され、これを解決しなければインポートを続行できないというエラーが表示され、異常終了することがあります。

処置: Repository Administration Utility を使用して、インポート元リポジトリからユーザー拡張の定義を抽出し、インポート先リポジトリにロードします。これで、Repository Object Navigator でアプリケーション・システムのインポートを正常に実行できるようになります。

コンフィグレーションに対して VHV を起動したとき、Repository Object Navigator がハングする (Bug 2187553)

原因: Repository Object Navigator でコンフィグレーションに対して VHV を起動したとき、「Set Context Workarea」ダイアログが表示され、Repository Object Navigator がハングします。

処置: コンフィグレーションに対する VHV を起動する前に、他の任意のオブジェクトに対して VHV を起動して閉じます。すぐにコンフィグレーションに対する VHV を起動すると正常に機能します。

または、Repository Object Navigator のかわりに Command Line Tool を使用して、コンフィグレーションに対して VHV を起動します。Command Line Tool は、コンテキスト・ワークエリアを設定するよう指示し、ユーザーが一旦それを指定すれば、コンフィグレーションに対しても VHV の起動が成功します。

ORACLE データベース要素のコピーに失敗する (Bug 960764)

原因: Oracle9i サーバー上のリポジトリを使用する場合に、Designer の ORACLE データベース要素をコピーしようとすると次のエラーが発生します。

PLS-00123:program too large

処置: 次の操作で同様の作業を行うことができます。

- RON でコピーしたい ORACLE データベース定義要素を選択し、「ユーティリティ」→「エクスポート」を選択する
- テキスト・ファイルでのエクスポートを行う
- コピー先のアプリケーション・システムにインポートする

比較ユーティリティ

TNSNAMES.ORA の構成によって、SCM Java ツールの起動に失敗することがある (Bug 2181931)

原因: 比較ユーティリティの起動に失敗した場合、これは SCM Java ツールで共通の問題である可能性があります。

処置: この問題の詳細な説明と対処方法は、[12-5 ページ](#)の「SCM Java ツール」を参照してください。

Oracle Forms ファイルの比較後に比較ユーティリティがハングすることがある (Bug 2209993)

原因: Command Line Tool から比較ユーティリティを起動した場合、Oracle Forms ファイルの比較を行った後にハングすることがあります。

処置: Command Line Tool ではなく、Repository Object Navigator から比較ユーティリティを起動すれば、この問題は発生しません。

RON から起動された比較ユーティリティを閉じるときにアプリケーション・エラー (Bug 2019369)

原因: 比較ユーティリティを Repository Object Navigator から起動した場合、「比較」ウィンドウを最大化し、右上の閉じる (x) ボタンをクリックしたときにアプリケーション・エラーが発生します。

処置: Version History Viewer または Command Line Tool から比較ユーティリティを起動すれば、この問題は発生しません。または、Repository Object Navigator から起動した場合に、「比較」ウィンドウを最大化しないようにします。

以前にマージした .FMB ファイルの比較やマージを実行できない (Bug 1319068)

原因: Repository Object Navigator または Version History Viewer で、以前にマージされた生成の .FMB ファイルに対して比較またはマージを実行しようとすると失敗します。Repository Object Navigator では、次のメッセージが表示されます。

CDR-03100:Diff/ マージ内部エラー : java.lang.IllegalStateException (比較)

CDR-03126: 内部エラー - オブジェクト Delta を取り出す際に発生しました (マージ)

Version History Viewer では、比較とマージのどちらの場合も次のメッセージが表示されます。

```
java.lang.IllegalStateException
```

処置: 対処方法は、現在ありません。

同じワークエリアまたはコンフィグレーションにあるサブクラス化されたフォームのバージョンどうしを比較できない (Bug 1502828)

原因: 比較ユーティリティでは、同じワークエリアまたはコンフィグレーション内にある、サブクラス化されたフォームのバージョンどうしを比較することはできません。また、ユーティリティのエラーは報告されず、サブクラス化されたフォームのバージョンの比較が正常終了したように見える場合もあります。

警告ダイアログ・ボックス (現時点ではオンライン・ヘルプには記載されていません) が表示され、このような状況では比較を実行できないことが通知されます。同じワークエリアまたはコンフィグレーション内にある、サブクラス化されたフォームのバージョンどうしを比較しているのでなければ、この警告は無視してください。

処置: この警告が表示されないようにするには、次のレジストリ・キーに文字列値を追加します。

```
HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\ORACLE\HOMEn\REPOS61\FORMSDM
```

SUBCLASS_WARNING という文字列値を作成し、値を FALSE とします。この他の値が設定されている場合や、この文字列が存在しない場合は、警告が表示されます。

サブクラス化されたフォームに対する比較を実行するときは、異なるワークエリアまたはコンフィグレーションにあるバージョンどうしを比較するようにしてください。

Oracle Forms の比較

比較ユーティリティでは、同じ Oracle Forms ファイルの異なるバージョンどうしは比較できますが、2つの異なる Forms ファイルどうしの比較はできません。Oracle Forms 以外のファイルであれば、2つの異なるファイルの比較は可能です。

マージ

TNSNAMES.ORA の構成によって、SCM Java ツールの起動に失敗することがある (Bug 2181931)

原因: マージ・ユーティリティの起動に失敗した場合、これは SCM Java ツールで共通の問題である可能性があります。

処置: この問題の詳細な説明と対処方法は、[12-5 ページの「SCM Java ツール」](#)を参照してください。

Oracle Forms ファイルのマージ後に「マージ」ウィンドウがハングすることがある (Bug 2209987)

原因: Command Line Tool から「マージ」ウィンドウを起動した場合、Oracle Forms ファイルのマージを行った後にハングすることがあります。

処置: Command Line Tool ではなく、Repository Object Navigator から「マージ」ウィンドウを起動すれば、この問題は発生しません。

「マージ」ウィンドウでの変更内容の保存について

変更を行った後で、「ファイル」→「保存」を使用して変更内容を保存します。以前のバージョンでは、この操作に「保存」ボタンを使用していました。

Version History Viewer

TNSNAMES.ORA の構成によって、SCM Java ツールの起動に失敗することがある (Bug 2181931)

原因: Version History Viewer の起動に失敗した場合、これは SCM Java ツールで共通の問題である可能性があります。

処置: この問題の詳細な説明と対処方法は、[12-5 ページの「SCM Java ツール」](#)を参照してください。

Version Event Viewer

TNSNAMES.ORA の構成によって、SCM Java ツールの起動に失敗することがある (Bug 2181931)

原因: Version Event Viewer の起動に失敗した場合、これは SCM Java ツールで共通の問題である可能性があります。

処置: この問題の詳細な説明と対処方法は、[12-5 ページ](#)の「SCM Java ツール」を参照してください。

開始日が 99 年以前の場合に VEV にデータがまったく表示されない (Bug 1476771)

原因: Version Event Viewer の実行時に、開始日として 99 年またはそれより前の年を指定した場合は、ビューアのウィンドウにイベント・データがまったく表示されません。

処置: 対処方法は、現在ありません。

インポートとエクスポート

データベース形式でのインポート/エクスポート: 孤立したオブジェクトが原因でワークエリアのインポートまたはリフレッシュに失敗する (Bug 2166873)

原因: 次のエラーが発生して、ワークエリアへのインポートまたはワークエリアのリフレッシュに失敗することがあります。

CDR-01062: コンパイルすると *filename* は独立します。コンテナをインクルードしてください

これは、インポートしたフォルダに共有オブジェクトが含まれていて、かつ、その共有オブジェクトのベースであるオリジナルのオブジェクトが同一ワークエリアに存在しないという状態で、そのフォルダを削除したことが原因である可能性があります。

処置: 削除されたフォルダを、ごみ箱から復元します。Command Line Tool を起動して、Lost+Found コンテナから共有オブジェクトを再度アタッチします。これで、共有オブジェクトは元のオブジェクトとして表示されるようになります。フォルダを削除する前に、まずこのオブジェクトを削除してください。

リポジトリのエクスポートで ORA-06550、PLS-00201、EXP-00083 が発生する (Bug 2343441、2143951)

原因: Oracle9i データベースからエクスポートする場合に、アクセス権の不足のため、ORA-06550、PLS-00201、EXP-00083 などのエラーがレポートされる場合があります。

処置: ユーザーに対して次の権限を付与してください。

```
GRANT EXECUTE ON sys.lt_export_pkg TO user;
```

バージョン化されたオブジェクトが含まれるワークエリアのインポート時にインポート・ウィザードで新しいワークエリアを作成できない (Bug 1429821)

原因:「オブジェクトがインポート先のリポジトリに既に存在する場合は、新しいバージョンとして作成する。存在しない場合は、新規オブジェクトとして作成する。」というオプションを使用して、バージョン化されたオブジェクトが含まれるワークエリアを同じリポジトリにインポートするときに、ウィザードでワークエリア名を指定して新規作成しようとするインポートに失敗します。

処置:インポート・ウィザードを実行する前に、名前を指定して新しいワークエリアを作成します。

データベース形式でのインポート/エクスポート:エクスポートされたオブジェクトに参照先のない参照が含まれることがある

データベース形式でインポートおよびエクスポートを行うリポジトリのユーティリティは、リポジトリ・オブジェクト内部識別子のグローバルな一意性を利用するように設計されています。たとえば、エクスポートとインポートを使用して、オブジェクトをあるリポジトリから別のリポジトリにコピーできますが、このときに内部識別子を変更する必要はありません。

この機能をエクスポートとインポートのユーティリティで利用することによって、論理的識別子やユーザーの識別子 (NAME など) が変更されていても、オブジェクトの新しいバージョンを別のリポジトリにコピーすることが可能となっています。これは、他のオブジェクトへの参照を持つオブジェクトのバージョンをエクスポートするときに、参照先のオブジェクトがエクスポートに含まれていなくてもかまわないということでもあります。つまり、オブジェクトのバージョンに、参照先のない参照が含まれることがあります。これは、a) 後続のエクスポートまたはインポートにより欠落している参照先オブジェクトがコピーされるか、b) 参照先のない参照が (参照先のないオブジェクトの、参照を含むその部分の構造が) 削除されるか、c) 参照プロパティを無効化することで参照先のない参照を解決するのであれば、問題にはなりません。

エクスポートを実行する前に、エクスポート対象のオブジェクトに外部参照があるかどうかを必ず調べてください。たとえば、ワークエリアまたはコンテナ内に定義されているモジュール・オブジェクトで参照している言語オブジェクトが、そのワークエリアまたはコンテナ内にはないことがあります。

参照先のない参照をインポート先リポジトリで自動的に解決するには、インポート・ウィザードの「拡張オプション」ダイアログ・ボックスの「参照先がない参照を削除」オプションを選択します。インポート時にオブジェクトを新規作成する場合は、後で新しいバージョンや関連するバージョンをコピーすることは不可能なため、このオプションを使用することを強くお勧めします。

データベース形式でのインポート/エクスポート: インポート・ユーティリティ実行時にリポジトリに対する特定の権限またはアクセス権が要求される

バージョン管理されているリポジトリでは、実行したエクスポートの種類に応じて、インポート・ユーティリティによって自動的に実行される処理がありますが、このときに次に示すような権限が必要になります。

- **ワークエリア管理**: ユーザーはワークエリアを作成できます。
- **コンパイル**: ユーザーはワークエリアをコンパイルまたはリフレッシュできます。
- **バージョン**: ユーザーはワークエリア内でオブジェクトの新しいバージョンを作成できます。

この処理のいずれかでエラーが返された場合は、実行しているユーザーに、リポジトリに対する権限があることと (Repository Administration Utility で設定)、ワークエリアおよびコンテナに対するアクセス権があること (Repository Object Navigator で設定) を確認します。

バージョン管理されていないリポジトリでは、このような処理は行われません。インポート・ウィザードは、この状況を判別しています。

Dependency Manager

Dependency Analyzer による Pro*C ファイルの解析について

Pro*C コンパイラはバージョンによって、異なる構文で C ファイルを生成します。この影響により、Dependency Analyzer が解析に失敗します。SQL の依存性を必要とする場合は、Pro*C ファイルそのものを分析する必要があります。

特定の条件における C パーサーの解析の失敗

- Pro*C の SQL 文内で、C の #typedef や #define を利用したトークンやヘッダー・ファイルを参照している場合、SQL 文の解析に失敗します (Bug 1411270)。
- C の宣言文が Pro*C の宣言部 (DECLARE SECTION) 内にある場合、解析に失敗します (Bug 1411271)。

TNSNAMES.ORA の構成によって、SCM Java ツールの起動に失敗することがある (Bug 2181931)

原因: Dependency Manager の起動に失敗した場合、これは SCM Java ツールで共通の問題である可能性があります。

処置: この問題の詳細な説明と対処方法は、[12-5 ページの「SCM Java ツール」](#)を参照してください。

エクステンント不足の状態での依存性の除去に失敗する (Bug 1317468)

原因: Dependency Manager での除去の実行が、ロールバック・セグメントのエクステンント不足により失敗することがあります。

処置: 依存性除去を実行する際に使用する (適切なサイズの) ロールバック・セグメントを1つだけ指定するようにします。これを行うには、1つの大きなロールバック・セグメントを除いたすべてのロールバック・セグメントをオフライン化します。この手順については、『Oracle Software Configuration Manager Repository インストレーション・ガイド』を参照してください。

Command Line Tool

オブジェクト名に対する大文字 / 小文字の指定のオフ

MATCH_CASE セッション変数は、オブジェクトの名前の大文字 / 小文字指定の切替えに使用できます。MATCH_CASE セッション変数をオフに設定するには、次のコマンドを使用します。

```
set match_case off
```

このコマンドを実行すると、大規模なリポジトリにおいてはパフォーマンスが低下する可能性があります。

TNSNAMES.ORA の構成によって、SCM Java ツールの起動に失敗することがある (Bug 2181931)

原因: Command Line Tool の起動に失敗した場合、これは SCM Java ツールで共通の問題である可能性があります。

処置: この問題の詳細な説明と対処方法は、[12-5 ページの「SCM Java ツール」](#)を参照してください。

[Ctrl]+[C] で Command Line Tool が終了する (Bug 976364)

原因: 実行に時間のかかるコマンドを終了しようとするとき、[Ctrl] を押しながら [C] を押すと、実行中のコマンドのみでなく、Command Line Tool も終了してしまいます。コミットされていない変更はすべて破棄されます。

処置: コマンドラインのセッションを完全に終了し、コミットされていない変更を無視するのでなければ、[Ctrl]+[C] は使用しないでください。

その他の既知の問題と制限事項

オペレーティング・システム認証 (Bug 2683221)

SCM の Java ベースのツールには、次のものがあります。

- Version History Viewer
- Version Event Viewer
- Dependency Manager
- Command Line ユーティリティ

これらはいずれも、リポジトリへの接続メカニズムとして JDBC Thin クライアントを使用します。したがって、これらのツールでは OS 認証接続はサポートされません。

パブリックおよびプライベート・シノニム・アクセスの使用

Oracle のインスタンスに 1 つの Oracle SCM リポジトリが存在する場合、パブリック・シノニム・アクセスでを使用することをお勧めします。2 つ以上のリポジトリが存在する場合、それぞれのリポジトリに対してプライベート・シノニム・アクセスでを使用することをお勧めします。あるリポジトリにはパブリック・シノニムを使用してアクセスし、他のリポジトリにはプライベート・シノニムを使用してアクセスすると、予期しない動作が起きる可能性がありますので回避してください。

ORA-12514 Message not found

原因: 状況によっては、メッセージ ORA-12514 に対象のテキストが表示されないことがあります。

本来表示されるメッセージは次のとおりです。

ORA-12514 : TNS:Listener は与えられた接続識別子から SERVICE_NAME を解決できません

このエラーは、CONNECT_DATA 内の SERVICE_NAME がリスナー表にないため発生します。

処置: 指定された SERVICE_NAME が正しいことを確認します。

データベース・インスタンスがリスナーに登録されていないと、このエラーが返されます。インスタンスを再起動する必要がある場合があります。

ワークエリアに基づくコンフィグレーションに、ワークエリア内に存在しない要素が含まれる (Bug 1312715)

原因: ワークエリアの現在の内容に基づいてコンフィグレーションを作成した場合、そのコンフィグレーションは、ユーザーがアクセス権を持たないオブジェクトも含むワークエリア全体の内容から構成されます。

処置: アクセスできないオブジェクトをコンフィグレーションから手動で削除（コンフィグレーション・ウィザードの「コンフィグレーション・メンバーの削除」など）するか、ワークエリアの内容ではなくワークエリアの仕様に基いたコンフィグレーションを作成します（たとえば、コンフィグレーション・ウィザードで、「現在の内容から」ではなく「仕様から」を選択します）。

ワークエリア・ルールが 30KB を超えたとき、ワークエリアの更新に失敗する (Bug 2888993)

原因: ワークエリア仕様を使用する場合にそのテキストが 30KB を超えると、ワークエリアの作成または更新に失敗します。

次の 2 つのエラーのいずれかが発生します。

- 次のエラー・メッセージが表示されます。

```
ORA-01403: データがありません  
RME-02124: SQL 文を実行できませんでした: begin jr_workarea.define_  
spec(:wa,:spec); :iserror := 0; :sqlcode := 0; exception when others then  
:iserror := 1; :sqlcode := sqlcode; end;
```

- 新しいルールは追加されずに、ワークエリアの更新が終了します。30000 バイトを超えるファイルの場合、最初の 30000 バイトのみが読み込まれ、その後の部分は読み込まれないためです。

処置: 仕様を 30K 以下の仕様ファイルとして分割し、それぞれに対するコンフィグレーションを作成します。これらのコンフィグレーションを使用してメンバーのバージョンを指定し、次にこのコンフィグレーションをベースにしてワークエリアを作成します。

コンフィグレーションのみに基づくワークエリアが正しくリフレッシュされない (Bug 1152274)

原因: これは、コンフィグレーションのみ（つまり INCLUDE_CONFIG 規則のみ）に基づいたワークエリアを作成し、チェックイン・ブランチが指定されていない場合に発生します。このワークエリアを使用してオブジェクトのチェックインとチェックアウトを実行すると、ワークエリアにはオブジェクトの修正されたバージョンが表示されます。元のバージョンのオブジェクトに戻そうとしてワークエリアをリフレッシュした場合、オブジェクトは元のバージョンとして存在するのではなく、ワークエリアから完全に消去されてしまいます。

処置: ワークエリアのデフォルト・チェックイン・ブランチを設定してください。

コンテナとワークエリアの一意性の強制 (Bug 954545)

原因: 一意性違反を発生させずに複数の同一名オブジェクトを同じコンテナに作成できます。あるオブジェクトを、あるワークエリアのコンテキストでコンテナ内に作成して、同一のオブジェクト（たとえば同じコンテナ内の同名のオブジェクト）を別のワークエリアのコンテキストで作成することが可能です。両方のオブジェクトを含むワークエリアが作成（または再コンパイル）された場合（たとえばコンテナ内のすべてのオブジェクトを対象とした場合）、名前の一意性ルールの違反となりますが、エラーは発生しません。

処置: ワークエリアのコンパイル後に名前の一意性チェックを手動で実行します。

.RVI ファイルがファイル・システム上に表示される

フォルダ・マッピングの作成時に .RVI ファイルと呼ばれる余分なファイルが作成されます。この .RVI ファイルは、リポジトリによって使用され、ファイルおよびフォルダのオブジェクトの更新履歴情報が格納されます。これらの .RVI ファイルは削除しないでください。

特定の状況でリポジトリのリストアに失敗する

LOB 列のある表を含むリポジトリをバックアップする場合、LOB 列のある表は元の表領域と同じ名前の表領域にリストアする必要があります。このようにしない場合はリストアに失敗し、次のメッセージが表示されます。

ORA-00959: 表領域 `tablespace_name` は存在しません。

タイプ (SDW_USERS および SDW_ACCESS_RIGHTS など) に基づく列を持つ表を含むバックアップからリポジトリがリストアされ、インポート対象のタイプ名と同じオブジェクト識別子 (OID) を持つタイプ名がターゲット・データベースのどこかにすでに存在している場合は、タイプも表もリストアされません。次のエラー・メッセージが表示されます。

IMP-00015: オブジェクトがすでに存在しているため次の文は失敗しました: "CREATE TYPE ... "

IMP-00061: 警告: オブジェクト型 "... " は、別の識別子ですすでに存在します。

IMP-00063: 警告: 表 "... " をスキップ。オブジェクト型 "... " が作成不可か別の識別子です

ただし、同じ名前のタイプ名が存在していてもその OID が異なり、IGNORE パラメータが「Y」に設定してある場合は、タイプに続いて表がインポートされます。

グローバルなごみ箱にはすべてのユーザーがフル・アクセスできる (Bug 1208420)

この予期しない動作による問題は報告されていません。

ユーザー定義のバージョン・ラベルのネーミング規則

ユーザー定義のラベル付けを使用してデフォルトのチェックイン・ブランチにチェックインする場合、バージョン・ラベルは「<ユーザー・ラベル>」となります。

自動バージョン・ラベル付けの詳細は、オンライン・ドキュメントを参照してください。

画面の解像度タイプ

Oracle SCM は、SVGA（推奨）または VGA 環境で実行できます。

システム・フォント・サイズ

システム・フォント・サイズは、「小さいフォント」に設定することをお薦めします（「コントロールパネル」→「画面」→「設定」→「フォントサイズ」）。

著作権

「Copyright 2002」の表示がある箇所は、「Copyright 2003」も適用されますのでご注意ください。

キーボード制御に関する既知の制限事項

この項では、キーボード制御に関する既知の制限事項について説明します。この項の構成は次のとおりです。

- [汎用キーボード制御制限](#)
- [標準外のキーボード制御](#)
- [既知の問題と対処方法](#)

汎用キーボード制御制限

この項では、汎用キーボード制限事項について説明します。

Dependency Manager

Repository Object Navigator から Dependency Manager を起動したとき、キーボード・フォーカスは信頼できない場合があります。したがって、キーボード制御をすべて利用できるようにするには、常に Command Line Tool から Dependency Manager を起動する必要があります。

Version Event Viewer

Repository Object Navigator から Version Event Viewer を起動したとき、キーボード・フォーカスは信頼できない場合があります。したがって、キーボード制御をすべて利用できるようにするには、常に Command Line Tool から Version Event Viewer を起動する必要があります。

Version History Viewer

Repository Object Navigator から Version History Viewer を起動したとき、キーボード・フォーカスは信頼できない場合があります。したがって、キーボード制御をすべて利用できるようにするには、常に Command Line Tool から Version History Viewer を起動する必要があります。

標準外のキーボード制御

この項では、ユーザー・インタフェースのうち、標準のキーボード制御が実装されていない部分について説明します。この項の構成は次のとおりです。

- [Dependency Manager](#)
- [Repository Administration Utility](#)
- [Repository Object Navigator](#)
- [Java ツールの一般的な制限](#)

Dependency Manager

この項では、Dependency Manager の中で、標準外のキーボード制御が使用されているが代替のキーボード制御が使用可能な部分について説明します。

「依存性の構築」ダイアログ・ボックス

「依存性の構築」ダイアログ・ボックスには、表と多くのコントロールが含まれています。表のセル間をナビゲートするには、[Tab] キーを使用します。ダイアログ・ボックスの表から別のコントロールにナビゲートするには、まず、表の最後のセルにナビゲートし、[Ctrl] を押しながら [Tab] を押します。表の外のコントロール間をナビゲートするには、[Tab] キーを使用します。

「ワークエリアの変更」ダイアログ・ボックス

「ワークエリアの変更」ダイアログ・ボックスで「OK」を選択するには、[Enter] キーをアクティブにする前に「OK」ボタンにフォーカスする必要があります。ワークエリア・フィールドのリストにフォーカスされている場合は、[Enter] キーをクリックしたとき、ワークエリアを変更しないでダイアログ・ボックスが取消されます。

「ワークエリア外オブジェクトの検索」ダイアログ・ボックス

コンフィグレーション表のセル間をナビゲートするには、[Tab] キーを使用します。コンフィグレーション表の外にフォーカスを移動するには、[Ctrl] を押しながら [Tab] を押します。

ドロップダウン・リストの選択

Dependency Manager には、多くのドロップダウン・リストの選択があります。ドロップダウン・リストの選択を使用するときは、次のキーボード制御を使用します。

- [F4] を押してドロップダウン・リストを開き、[↑] キーおよび [↓] キーを押して目的のエントリまでナビゲートします。
- ドロップダウン・リストの選択が表の列の場合、まず、[F2] を押してから（編集するためにセルを選択）[F4] を押してドロップダウン・リストを開き、[↑] キーおよび [↓] キーを押して必要なエントリまでナビゲートします。

ツールバー

ツールバーからナビゲータにフォーカスを変更するには、[Shift] を押しながら [Tab] を押し、[↑] キーおよび [↓] キーを使用してナビゲータ・ツリー内を移動します。

Repository Administration Utility

この項では、Repository Administration Utility の中で、標準外のキーボード制御が使用されている部分について説明します。

メインの RAU パネル

Repository Administration Utility (RAU) パネルには、管理機能にアクセスするための多くのボタンがあります。キーボード制御を使用して機能に関連する RAU ボタンから機能にアクセスするには、該当するボタンまでナビゲートし ([Tab] キーを使用)、[Space] を押しします。

「ユーザー保守」画面

「ユーザー保守」画面には、ユーザーの追加、ユーザーの削除、ノードの拡張、ノードの縮小およびプロパティの表示を行うオプションがあります。キーボードを使用してこれらのタスクを実行するには、Windows の [アプリケーション] キーを使用してコンテキスト・メニューを表示し、[↑] キーおよび [↓] キーを使用してメニューから必要なオプションを選択します。

Repository Object Navigator

この項では、Repository Object Navigator の中で、標準外のキーボード制御が使用されている部分について説明します。

「ナビゲータ」ウィンドウ

Repository Object Navigator を起動するたびに、「ナビゲータ」ウィンドウとプロパティ・パレットがデフォルトで表示されます。Repository Object Navigator の起動直後に、キーボード制御を使用して「ナビゲータ」ウィンドウから移動するには、[F4] を押してコンテキストをプロパティ・パレットに切り替えます。[F3] を押すと、「ナビゲータ」ウィンドウに戻ります。

「色」ダイアログ・ボックス

Repository Object Navigator、プロパティ・パレットおよびテキスト・パッドでテキスト項目を識別するために、色を使用することができます。キーボードを使用してテキストの色を変更するには、「色」ダイアログ・ボックスを起動し（手順はオンライン・ヘルプを参照してください）、[↑]、[↓]、[←]、[→] の各キーを使用して必要な色を選択します。

プロパティ・パレット

いくつかのリポジトリ要素は、既に存在するリポジトリ要素を参照して、参照プロパティを指定することができます。参照プロパティは、「オブジェクトの選択」ダイアログ・ボックスで選択します。プロパティ・パレットから「オブジェクトの選択」ダイアログ・ボックスを表示するには、適切な参照プロパティ・フィールドにカーソルを置き、[Enter] キーを押します。

コンフィグレーション・ウィザード

「コンフィグレーション・ウィザード」ダイアログの任意のボタンを呼び出すには、[Tab] キーを押してそのボタンまでナビゲートし、[Space] を押してそのボタンを選択します。

グリッド・コントロールのあるダイアログ・ボックス

Repository Object Navigator のダイアログ・ボックスには、「ナビゲータ・グループのカスタマイズ」ダイアログ・ボックスのように、グリッド・コントロールを持つものが多数あります。グリッド・コントロールのあるダイアログ・ボックスを使用するときは、次のキーボード制御を使用します。

- グリッド内をナビゲートするには、[↑]、[↓]、[←]、[→] の各キーを使用します。
- グリッドから、グリッドの外にある次のコントロールに移動するには、[Ctrl] を押しながら [Tab] を押します。グリッドの最後のセルで [Tab] を押すと、ダイアログ・ボックスの次のウィンドウにナビゲートするので注意してください（次のウィンドウがある場合）。

問合せウィンドウのあるダイアログ・ボックス

Repository Object Navigator のダイアログ・ボックスには、「ナビゲータ表示のカスタマイズ」ダイアログ・ボックスのように問合せウィンドウを持つものが多数あります。このウィンドウには、条件のグループ化などのアクションを実行するためのボタンがあります。

問合せウィンドウのあるダイアログ・ボックスを使用するときは、次のキーボード制御を使用します。

- ソートするためにリストの行を上に移動するには、[Ctrl] を押しながら [↑] を押します。
- ソートするためにリストの行を下に移動するには、[Ctrl] を押しながら [↓] を押します。
- 選択したセルどうしをグループ化するには、[Alt] を押しながら [G] を押します。
- 選択したセルのグループ化を元に戻すには、[Alt] を押しながら [U] を押します。
- セルをコピーするには、[Alt] を押しながら [D] を押します。
- 条件をクリアするには、[Alt] を押しながら [C] を押します。
- AND と OR の設定を切り替えるには、[Space] を押します。
- チェックボックスを切り替えるには、[Space] を押します。

Java ツールの一般的な制限

この項では、Version History Viewer、Version Event Viewer および Dependency Manager を使用するために必要な汎用キーボード制御について説明します。

- ニーモニックのあるフィールドへナビゲートするには、[Alt] を押しながらそのニーモニックを使用します。
- ツリーにフォーカスがあるときに [Enter] キーを押すと、ダイアログ・ボックスを閉じるなどのデフォルト・ボタンのアクションが実行されるのではなく、ブランチが開いたり閉じたりします。
- 表にフォーカスがあるときに [Enter] キーを押すと、デフォルト・ボタンのアクションが実行されるのではなく、次の行に移動します。
- 複数行のテキスト・フィールドにフォーカスがあるときに [Tab] キーを押すと、テキスト内をナビゲートできます。次のフィールドにナビゲートするには、[Ctrl] を押しながら [Tab] を押します。
- 編集可能なドロップダウン・リスト・フィールドへのナビゲートにニーモニックを使用する場合は、[Tab] キーを押さなければそのフィールドにフォーカスは移動しません。

既知の問題と対処方法

この項では、キーボード制御に関する既知の問題と対処方法を説明します。

- [「マージ」ウィンドウ](#)
- [Repository Object Navigator](#)
- [その他の既知の問題と制限事項](#)

「マージ」ウィンドウ

JAWS で「マージ」ウィンドウを読み取ることができない

原因: JAWS スクリーン・リーダーのユーザーに生じる問題です。

「マージ」ウィンドウを Command Line Tool から起動したときに、ユーザーがマージ・ドキュメント内をナビゲートした場合、JAWS によってブランクが読み取られるか、読み取られたものが利用できないか、何も読み取られないかのいずれかとなります。ただし、この問題は「マージ」ウィンドウを Version History Viewer から起動した場合には発生しません。

処置: 次の対処方法があります。

- [Alt] を押しながら [Tab] を押して別のウィンドウに移動し、[Alt] を押しながら [Tab] を押して「マージ」ウィンドウに戻ります。
- 「マージ」ウィンドウをアイコン化してから、元に戻します。
- メニュー・バーのメニューのいずれかを開き、メニュー項目を選択しないで閉じます。

これらの対処方法は、マージ・ドキュメントからツールバーにナビゲートしてマージ・ドキュメントに戻るときにも適用できます。

Repository Object Navigator

コピーしたプロパティの表示ダイアログのエントリごとに、最後の表示可能なエントリが JAWS によって繰り返される (Bug 1930763)

原因: JAWS スクリーン・リーダーのユーザーに生じる問題です。

この問題は、「プロパティのコピー」でコピーしたプロパティをコピーしたプロパティの表示ダイアログで表示し、[↓] キーを押して JAWS を起動して各プロパティの表示可能な情報を読み上げるときに発生します。コピーされたプロパティの数が 5 個を超える場合は、各プロパティを読み取る前に、コピーしたプロパティの表示ダイアログの最後の表示可能なプロパティが読み取られます。

処置: コピー可能なプロパティの数が 5 個以下の場合は、この問題は発生しません。ただし、6 個以上のプロパティをコピーできるようにする必要がある場合は、エントリごとに重複した内容が読み上げられることは無視してください。

その他の既知の問題と制限事項

JAWS ユーザーが VEV、VHV または比較ユーティリティを起動する場合の問題

Version Event Viewer、Version History Viewer または比較ユーティリティを Repository Object Navigator から起動した場合に、ダイアログ・ボックスが作成される場合は JAWS によってダイアログ・ウィンドウの名前が読み取られますが、ダイアログがすでにある場合は Repository Object Navigator のメイン・ウィンドウのテキストが読み取られます。このとき、起動したダイアログが異常終了して消去されたとユーザーが誤解する可能性があります。

ダイアログ・ボックスが正しく作成されていることを確認するには次の手順に従います。
[Tab] キーを押します。これによって、ダイアログの最初のコントロールまたはメニュー項目がハイライトされる（フォーカスが設定される）ので、JAWS によって読み上げられます。

グレイアウトされたタブ

マウスではアクセスできないグレイアウトされたタブに、キーボードを使用して移動できる場合があります。

プラットフォーム固有の問題および対処方法

Windows プラットフォームの問題および対処方法

Windows での問題は、[12-2 ページ](#)の「[一般的な問題とその対処方法](#)」および [12-3 ページ](#)の「[既知の問題と制限事項](#)」を参照してください。

UNIX プラットフォームの問題および対処方法

UNIX プラットフォームの全般的な問題および対処方法

UNIX プラットフォーム共通の問題は現在ありません。

Solaris の問題および対処方法

ブロードキャスト・サーバー: Solaris コンピュータ

ブロードキャスト・サーバーは Solaris コンピュータ上では機能しません (Bug 1325598)。

Linux の問題および対処方法

Linux プラットフォーム共通の問題は現在ありません。

HP-UX の問題および対処方法

HP-UX プラットフォーム共通の問題は現在ありません。

構成に関する問題および対処方法

構成に関する問題は現在ありません。

管理に関する問題および対処方法

管理に関する問題は現在ありません。

ドキュメントの記載内容の誤り

ドキュメントの記載内容に関する誤りは現在ありません。

第 IV 部

その他のリリース・ノート

このリリース・ノートの第 IV 部では、Oracle Developer Suite とともにインストールされるサーバー・コンポーネントの情報について説明します。各機能を章ごとに説明します。

第 IV 部の構成は次のとおりです。

- [第 13 章「Oracle Application Server Containers for J2EE \(OC4J\)」](#)

Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J)

この章では、Oracle Application Server Containers for J2EE (OC4J) の問題とその対処方法について説明します。この章では、次のトピックについて説明します。

- 構成に関する問題および対処方法
- JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート
- サーブレットに関するリリース・ノート
- EJB に関するリリース・ノート
- OC4J サービスに関するリリース・ノート
- DataDirect JDBC ドライバに関するリリース・ノート
- ドキュメントの記載内容の誤り

この章で参照しているオラクル社のマニュアルは、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp/>) から入手できます。

構成に関する問題および対処方法

この項では、OC4J の構成の問題とその対処方法について説明します。この項のトピックは次のとおりです。

- OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当てが適切に行われない
- ライブラリの共有と使用
- 無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下
- EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ
- 起動と停止に関する考慮事項
- サポートされる JDK バージョン
- JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行
- JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行
- OC4J デモのダウンロード

OC4J の構成の参考情報は、OTN-J (Oracle Technology Network Japan) (<http://otn.oracle.co.jp>) から入手できる『Configuration Guide for OC4J』を参照してください。

OPMN によるデフォルトの CORBA SSL クライアント・ポートの割当てが適切に行われない

Oracle Application Server 環境では、iiops1 と iiops2 のポート範囲を opmn.xml ファイルに明示的に指定する必要があります。

ライブラリの共有と使用

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、グローバルな application.xml ファイルに特定の <library> 要素を作成して、アプリケーションに必要なライブラリをロードすることをお勧めします。この方法は、希望の順序でライブラリを効率的にロードする方法としてお勧めします (ライブラリは、<library> 要素が検出された順序でロードされます)。

以前のリリースでは、ライブラリを j2ee/home/lib ディレクトリに格納でき、このディレクトリには、デフォルトで <library> 要素が application.xml ファイルに存在していたことに注意してください。このリリースでは、このディレクトリは OC4J システム・ライブラリ用に予約され、このディレクトリを指し示す <library> 要素はデフォルトでは application.xml ファイルに存在しません。汎用的なライブラリ位置を使用する場合は、j2ee/home/applib を使用してください。このリリースでは、デフォルトで、この位置を指し示す <library> 要素が application.xml に存在します。

ライブラリ共有の全般的な情報は、『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』を参照してください。

無効または不要なライブラリ要素によるパフォーマンスの低下

実行中のメモリ不足

OC4J プロセス・メモリーがプログラム実行中に増加し続ける場合は、グローバルな application.xml ファイル内の無効なシンボリック・リンクへの参照がある可能性があります。通常、この問題は、従来の Java オブジェクト・メモリー・リークで見られるように、Java オブジェクト・メモリーの増加ではなく、C ヒープの増加に伴って発生します。OC4J では、application.xml ファイル内のリンクを使用して、すべてのリソースをロードします。このリンクが無効な場合は、C ヒープが増加し続け、OC4J のメモリー不足が発生します。すべてのシンボリック・リンクが有効であることを確認して、OC4J を再起動してください。

さらに、OC4J でロード対象として構成する JAR ファイルは、最低限の数に抑えてください。使用しないすべての JAR ファイルは、構成および OC4J で検索対象として構成されたディレクトリから削除してください。OC4J では、クラスとリソースのすべての JAR ファイルを検索するため、ファイル・キャッシュによって余分なメモリーとプロセッサ時間が消費されます。

application.xml ファイルの <library> 要素が、常駐するディレクトリではなく、必要な JAR ファイルや ZIP ファイルを個別に指し示している場合は、ロードを適切に制御できません。

EJB JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ

Enterprise Java Beans (EJB) JAR ファイル内にデプロイされたカスタム・ユーザー・マネージャ・クラスは、アプリケーションの orion-application.xml ファイルに明示的な <library> 要素が存在しないかぎり、OC4J でロードできません。この <library> 要素は、カスタム・ユーザー・マネージャ・クラスが格納された JAR ファイルを指し示す必要があります。カスタム・ユーザー・マネージャの解決とインスタンス化を可能にするには、次の例に示すように、必要な <library> 要素を作成します。

```
<orion-application ....>
...
  <library path="d:\oc4j904\j2ee\home\applications\XmlnewsEar\XmlnewsEjb.jar"/>
...
</orion-application>
```

起動と停止に関する考慮事項

- 起動メソッドと停止メソッドには、引数として渡される JNDI コンテキストを使用する必要があります。独自に作成することはできません。
- 停止クラスは、停止前にアンデプロイされるアーカイブ・ファイル（WAR および EAR）と区別する必要があります。
- OC4J では、起動クラスのインスタンス、および停止クラスのインスタンスを作成します。これらは、個別のインスタンスです。同じクラスで起動インタフェースと停止インタフェースを実装すると、OC4J ではそのクラスのインスタンスを 2 つ作成します。この場合、起動クラスと停止クラスの間で非静的フィールドを共有することはできません。

サポートされる JDK バージョン

コンピュータにインストールできるのは、1 つの Java Developer's Kit (JDK) のみです。OC4J でサポートされている次のバージョンであることを確認してください。

- JDK 1.3.1
- JDK 1.4.1
- JDK 1.4.2

スタンドアロン OC4J に JDK は含まれていません。スタンドアロン OC4J を使用する場合は、独自に JDK をインストールする必要があります。

サプライヤによっては、製品に JDK が含まれている場合があります。その場合は、必要に応じて、古いバージョンを削除してサポートされているバージョンに置換し、環境変数を適切に更新します。PATH、CLASSPATH および LD_LIBRARY_PATH (Windows では LIB) の各変数が、公式にサポートされているバージョンの JDK に設定されていることを確認してください。

注意： Solaris のコンピュータでは、Sun 社が提供する古い JDK が、`/usr/bin` にあります。

JDK 1.4 から JDK 1.3 へのソース・コードの移行

Java では、Java コードの JDK 1.4 でのコンパイルと JDK1.3 での実行をサポートしていません (Bug 2811379)。これを試行すると、Java では実行時に次のいずれかのエラー・メッセージがスローされます。

- `Unsupported major.minor version 48.0.`
- `The major.minor version '48.0' is too recent for this tool to understand.`

ただし、JDK 1.4 を使用して生成したクラス・ファイルを、JDK 1.3 を使用して実行する必要がある場合は、次のコマンドを使用すると、JDK 1.3 と互換性のあるクラス・ファイルを JDK 1.4 コンパイラで強制的に生成できます。

```
% javac -target 1.3 hello.java
```

JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行

JDK 1.3 から JDK 1.4 へのアップグレード時には、すべてのクラスをパッケージに格納してください。

JDK 1.4 仕様では、パッケージ内のクラスがパッケージ外のクラスを起動するのを明示的に禁じています。このため、JDK 1.3 でコンパイルされた Java ソース・コードは、JDK 1.4 ではコンパイルされません。このエラーは、次のコンパイラ・メッセージで識別されます。

```
'.' expected import myClass
```

このメッセージは、Java コンパイラはパッケージとクラス名を検出するが、クラス名のみの行は解析できないことを意味します。

詳細は、JDK に同梱されている Sun 社の互換性に関するドキュメントを参照してください。

OC4J デモのダウンロード

Oracle Application Server 10g (9.0.4) には、コンポーネントごとに 1 つのデモが用意されています。追加のデモは、次の URL で OTN-J (Oracle Technology Network Japan) からダウンロードできます。

http://otn.oracle.co.jp/sample_code/index.html

この索引ページから、必要な追加のデモがあるコンポーネント領域にドリルダウンします。

JSP、タグ・ライブラリおよび関連デモに関するリリース・ノート

この項では、Java Server Pages (JSP)、タグ・ライブラリおよび関連デモに関する問題について説明します。この項のトピックは次のとおりです。

- [パッケージに含まれないクラスを起動できない](#)
- [OC4J 起動時における SAX ドライバの設定](#)
- [JSP ojspc の問題](#)
- [JESI タグに関するリリース・ノート](#)
- [起動と停止に関する考慮事項](#)
- [サポートされる JDK バージョン](#)
- [ローカル・クラスを最初に検索](#)
- [java.lang.ClassFormatError: \(切り捨てられたクラス・ファイル\)](#)

パッケージに含まれないクラスを起動できない

この問題は、Sun 社の JDK 1.4 環境に移行する際、サーブレット開発者と JSP 開発者にとって特に重要な考慮事項です。

Sun 社が述べているように、コンパイラでは、不特定の名前空間から型をインポートするインポート文は拒否されます。この変更は、JDK の以前のバージョンでのセキュリティ上の問題とあいまい性に対処するための措置です。これは、パッケージに含まれていないクラス (クラスのメソッド) は起動できないことを示します。パッケージに含まれていないクラスを起動しようとする、コンパイル時に致命的エラーが発生します。

この問題は、特に、JSP ページから JavaBeans を起動する JSP 開発者に影響を与えます。このような Bean は、パッケージに含まれないことが多いためです (JSP 仕様 2.0 では、新しいコンパイラの要件を満たすために、Bean はパッケージ内に存在していることが要求されます)。パッケージに含まれない JavaBeans が起動されると、OC4J 9.0.3 / JDK 1.3.1 環境で作成および実行された JSP アプリケーションは、OC4J 9.0.4 / JDK 1.4 環境では動作しなくなります。

すべての JavaBeans と起動されたその他のクラスがパッケージ内に含まれるようにアプリケーションを更新するまでは、JDK 1.3.1 環境に戻ることでこの問題を回避できます。

注意：

- `javac -source` コンパイラ・オプションを使用すると、JDK 1.4 コンパイラで JDK 1.3.1 コードをシームレスに処理できますが、クラスを起動するにはそのクラスをパッケージに含める必要があります。
 - OC4J では、JDK 1.3.1 と JDK 1.4 コンパイラのみがサポートおよび認証されています。`server.xml` ファイルに `<java-compiler>` 要素を追加することで、別のコンパイラを指定できます。これがパッケージに含まれないクラスの問題に対する回避策になることもありますが、OC4J とともに使用する場合、Oracle では他のコンパイラは認証またはサポートされていません。また、Oracle Application Server 環境では、`server.xml` ファイルを直接更新しないでください。この場合は、Oracle Enterprise Manager を使用してください。
-

この問題は、13-5 ページの「JDK 1.3 から JDK 1.4 へのソース・コードの移行」でも取り上げています。パッケージに含まれないクラスの問題と JDK 1.4 の互換性に関する他の問題に関する詳細は、次の Web サイトを参照してください。

<http://java.sun.com/j2se/1.4/compatibility.html>

「Java 2 Platform、Standard Edition、v1.4.0 と v1.3 における非互換性」のリンクをクリックしてください。

OC4J 起動時における SAX ドライバの設定

Java Server Pages 標準タグ・ライブラリ (JSTL) の XML タグのフィルタ機能を OC4J で使用可能にするには、OC4J の起動時に SAX ドライバを設定する必要があります。

スタンドアロン OC4J の起動時に、コマンドラインで次のオプションを使用します。

```
-Dorg.xml.sax.driver=oracle.xml.parser.v2.SAXParser
```

この設定は、Oracle Application Server の起動時にシステム・プロパティを使用して指定できます。この指定方法の詳細は、Oracle Application Server のドキュメントを参照してください。

このプロパティを設定しないと、JSTL のデモ `Filter.jsp` で次の例外が発生します。

```
javax.servlet.jsp.JspException: System property org.xml.sax.driver not specified
```

JSP ojspc の問題

この項では、次のトピックについて説明します。

- `debug` オプションは `ojspc` の出力に影響を与えない
- `/WEB-INF/lib` や `/WEB-INF/classes` ディレクトリには `.java` ファイルを含めない

debug オプションは ojspc の出力に影響を与えない

Oracle Application Server 10g (9.0.4) では、`ojspc -debug` オプションは `ojspc` の出力に影響を与えません。`-debug` オプションを指定した場合、このオプションは受け入れられませんが無視されます。

`/WEB-INF/lib` や `/WEB-INF/classes` ディレクトリには `.java` ファイルを含めない

`ojspc` を使用する場合は、`/WEB-INF/lib` ディレクトリや `/WEB-INF/classes` ディレクトリ内、またはこれらのディレクトリの下に `.java` ファイルを配置しないでください。

`/WEB-INF/lib` ディレクトリや `/WEB-INF/classes` ディレクトリに `.java` ファイルが含まれていると、`ojspc` では、バッチ事前変換時にトップレベルのアーカイブで1つ以上の `.class` ファイルを重複して作成する場合があります。

JESI タグに関するリリース・ノート

この項では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) における Java Edge Side Includes (JESI) タグの動作の変更と拡張について説明します。この項のトピックは次のとおりです。

- JESI タグに対する条件付き処理が不要
- JESI `personalize` タグで一重引用符を追加
- インクルードされたページ内に `fragment` タグを配置可能
- 複数の `control` タグまたは `template` タグが使用可能
- `template` タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない
- 明示的な ESI マークアップは JESI タグで使用しない

JESI タグに対する条件付き処理が不要

以前のバージョンの JESI タグ・ライブラリでは、リクエストがブラウザなどのクライアントから直接発行されたか、または Oracle Web Cache から発行されたかに関係なく、JESI タグは常に同じ出力を生成しました。したがって、以前のバージョンのタグ・ライブラリでは、Oracle Web Cache が停止または使用不可になった場合、インクルードされたページまたはフラグメントがレスポンスに挿入されないため、JESI タグで特別な条件付き処理が必要でした。

OC4J 9.0.4 実装では、標準 JSP のインクルード機能を使用してフラグメントを挿入するため、Oracle Web Cache が使用できない場合でも、JESI タグは完全なレスポンスを正しく生成します。詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE JSP タグ・ライブラリおよびユーティリティ・リファレンス』を参照してください。

JESI personalize タグで一重引用符を追加

OC4J 9.0.4 実装では、JESI personalize タグの default 属性または value 属性（下位互換性のため）の文字列値が一重引用符で囲まれます。この動作は、ESI 構文に準拠しています。Oracle Application Server 10g (9.0.4) より前のバージョンでは、ユーザーが、属性の文字列値を一重引用符で囲む必要がありました。9.0.4 実装より前のバージョンで使用していた personalize タグがページに含まれている場合は、余分な一重引用符を削除するように編集する必要があります。

インクルードされたページ内に fragment タグを配置可能

fragment タグは、template タグ（インクルードするページ内に配置可能）内で引用符で適切に囲まれている場合、jsp:include 標準アクションを介してインクルードされたページ内に配置できるようになりました。

複数の control タグまたは template タグが使用可能

OC4J は、複数の control タグを検出しても例外をスローせず、余分な control タグや template タグを無視します。OC4J は、検出した最初のタグのみ実行します。この機能によって、複数の control タグを JSP のインクルードされたページに配置できます。独自の control タグまたは template タグを含むページに別のページがインクルードされると、2 番目のタグは無視されます。この場合、インクルードされたページは個別に実行できます。

次の 4 つの組合せがあり、それぞれの動作は次のとおりです。

- control タグの後に control タグを使用できます。2 番目の control タグは無視されます。
- control タグの後に template タグを使用できます。template タグの属性は無視されます。
- template タグの後に control タグを使用できます。control タグは無視されます。
- template タグの後に template タグを使用すると、エラーが発生します。

template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がない

OC4J 9.0.4 および OC4J 9.0.3 の実装では、template タグの開始タグと終了タグの外側にレスポンス出力がないことが必要です。さらに、開始タグと終了タグの外側にレスポンスへのコンテンツ出力がない場合は、インクルードされたページに template タグを配置できません。

明示的な ESI マークアップは JESI タグで使用しない

明示的な ESI マークアップを JESI タグでを使用して HTTP レスポンスを生成した場合、JESI タグ・ライブラリの正しい動作は保証されません。

タグ・ライブラリ・ディスクリプタは WEB-INF の下に配置

以前の OC4J 実装での JSP 仕様に関係なく、タグ・ライブラリ・ディスクリプタに関する JSP 仕様を注意して遵守する必要があります。

既存の仕様では、タグ・ライブラリ・ディスクリプタは特定のアプリケーションの `application_root/WEB-INF/` の下にのみ配置できます。

しかし実際にはこの仕様の要件にかかわらず、OC4J 9.0.4 実装（以前の实装も含めて）では、`application_root` の下の任意の位置にタグ・ライブラリ・ディスクリプタが配置されていました。

開発時の実装では、この仕様が厳密に適用されます。タグ・ライブラリ・ディスクリプタを配置できるのは、WEB-INF の下のみです。

OC4J の実行中にタグ・ライブラリ JAR ファイルを /WEB-INF/lib に追加

OC4J の実行中にタグ・ライブラリの JAR ファイルを `/WEB-INF/lib` ディレクトリに追加する場合は、`ClassCastException` を回避するために、`tags_reuse_default` を `none` または `compiletime` に設定してください。

ローカル・クラスを最初に検索

タグ・ライブラリ JAR ファイルを、予約済の場所（グローバル・レベル）にある JAR ファイルのかわりにアプリケーション・レベルで使用する場合は、ローカル・クラスを最初に検索するようにアプリケーション・ローダーを設定する必要があります。これを設定するには、アプリケーションの `orion-web.xml` ファイルに次の値を設定します。

```
<web-app-class-loader search-local-classes-first="true" />
```


java.lang.ClassFormatError: (切り捨てられたクラス・ファイル)

次の例に示す JSP エラー・メッセージは、切り捨てられたクラス・ファイルを示します。

このエラー・メッセージは、次の状況で発生する可能性があります。

- ポータル環境で JSP を使用している場合
- コンピュータの負荷がかなり大きい場合

次のいずれかの方法でこのエラーを修正します。

- JSP ファイルに touch を実行して、JSP の再コンパイルを行います。
- 破損したクラス・ファイルを削除します。次のエラー・メッセージ例では、このクラス・ファイルは /modules/location/bizdir/jsp/bizdir.jsp と示されています。

切り捨てられたクラス・ファイルのエラー・メッセージ例

```
500 Internal Server Error
  OracleJSP:
  JSP Error:

-----
Request URI:/modules/location/bizdir/jsp/bizdir.jsp
Exception:
java.lang.ClassFormatError: _location/_bizdir/_jsp/_bizdir (Truncated class
file)
  at java.lang.ClassLoader.defineClass0(Native Method)
  at java.lang.ClassLoader.defineClass(ClassLoader.java:493)
  at java.security.SecureClassLoader.defineClass(SecureClassLoader.java:111)
  at oracle.jsp.app.JspClassLoader.loadClass(JspClassLoader.java:682)
  at java.lang.ClassLoader.loadClass(ClassLoader.java:255)
...
```

サーブレットに関するリリース・ノート

この項では、サーブレットに関するリリース・ノートを示します。この項のトピックは次のとおりです。

- [パッケージに含まれないクラスを起動できない](#)
- [開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能](#)
- [<orion-web-app> の一部の属性が使用不可](#)

パッケージに含まれないクラスを起動できない

JDK 1.4 では、パッケージにないクラスからコールする場合、パッケージに含まれないクラスは起動できません。この問題の詳細は、JSP に関するリリース・ノートの [13-6 ページ](#) の「[パッケージに含まれないクラスを起動できない](#)」を参照してください。

開発時にクラス名別のサーブレット起動が可能

OC4J では、開発時の便利な機能の 1 つとして、クラス名別にサーブレットを起動できます。

この機能は、`http.webdir.enable` システム・プロパティ、または `global-web-application.xml` ファイルか `orion-web.xml` ファイルのいずれかにある `<orion-web-app>` 要素の `servlet-webdir` 属性を使用して制御します。

この機能の詳細は、『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』を参照してください。

OC4J 9.0.4 実装では、デフォルト設定の `http.webdir.enable=true` および `servlet-webdir="/servlet/"` によって、サーブレットをクラス名別にデフォルトで起動できます。

本番環境では、`http.webdir.enable=false` または `servlet-webdir=""`（空の引用符）のいずれかを設定して、この機能を無効にする必要があります。

<orion-web-app> の一部の属性が使用不可

OC4J 9.0.4 実装では、`<orion-web-app>` の属性として `internationalize-resources` および `default-mime-type` が `orion-web.dtd` ファイル内に表示されます。ただし、これらの属性に関する説明はありません。使用しないでください。

EJB に関するリリース・ノート

この項では、EJB に関するリリース・ノートを示します。この項のトピックは次のとおりです。

- クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性
- MDB トランザクション・タイムアウト
- MDB `onMessage()` メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放
- `orion-ejb-jar.xml` ファイル変更時の考慮事項
- EJB の静的ブロック
- `ping` タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了
- EJB に関するその他のリリース・ノート

クライアント・リクエストにポート番号を含める必要性

EJB にアクセスするため、次の形式を使用してクライアントで URL を指定する場合、常にポート番号を指定する必要があります。次に例を示します。

```
opmn:ormi://host:port:oc4j_inst/application
```

ポート番号を指定しないと、`oc4j_inst` はデフォルトで常に **home** インスタンスに設定されます (Bug 3234351)。

MDB トランザクション・タイムアウト

`orion-ejb-jar.xml` ファイルの `transaction-timeout` 属性に定義されている Message-Driven Bean (MDB) トランザクション・タイムアウトは、オプション・パラメータです。この属性は、Oracle JMS を使用するコンテナ管理の MDB トランザクションに対する トランザクション・タイムアウト時間 (秒単位) を制御します。デフォルトは 1 日 (86,400 秒) です。MDB の `transaction-timeout` 属性の適用対象は、Oracle JMS を JMS プロバイダとして使用する CMT MDB のみです。この属性設定は、BMT MDB、または OC4J JMS を使用する MDB には影響を与えません (Bug 3079322)。

- Oracle Application Server での JMS の動作 : この時間枠内で完了していないトランザクションはロールバックされ、メッセージが Destination オブジェクトに再配信されます。Oracle JMS によるメッセージ再配信の試行後 (デフォルトの試行回数は 5 回)、このメッセージは例外キューに移動します。詳細は、『Oracle9i アプリケーション開発者ガイド - アドバンスト・キューイング リリース 2 (9.2)』を参照してください。
- OC4J での JMS の動作 : `transaction-timeout` 設定は、OC4J JMS を使用する CMT MDB では機能しません。タイムアウトは常に 1 日で、変更することはできません。タイムアウトが発生すると、OC4J JMS は、配信が完了するまで無期限にメッセージを再配信し続けます。再配信の制限は設定できません。

さらに、server.xml ファイルに定義されているグローバルな transaction-timeout 属性は、MDB に影響を与えません。

MDB onMessage() メソッドでの JMS 用 JMS 接続の作成と解放

Oracle JMS 用の JMS 接続は、ejbCreate() メソッドではなく、MDB onMessage() メソッドで作成および解放する必要があります (Bug 2967949)。

orion-ejb-jar.xml ファイル変更時の考慮事項

orion-ejb-jar.xml ファイルを Oracle Enterprise Manager で変更する場合は、OC4J を再起動する必要があります。それ以外の場合、つまりスタンドアロンの環境でエディタを使用して orion-ejb-jar.xml ファイルを変更する場合は、アプリケーションを再パッケージ化して OC4J (再起動不要) に再デプロイする必要があります (Bug 3001543)。

EJB の静的ブロック

OC4J での EJB デプロイ時には、Bean クラスをロードしてそのメソッドを検索すると、EJB ラッパーを生成できます。クラスのロード中に静的ブロック内のコードが実行されるため、JNDI 環境のコンテキストはまだ設定されていません。実行時でも、Bean は存在していない段階です。ライフ・サイクルのこの段階では、JNDI 環境コンテキストは未定義であるため、Bean プロバイダではこれを使用可能とみなすことができません。

この問題に対処するには、Bean の構成時に、ejbCreate() メソッドまたは setSessionContext() メソッドでコンテキストを設定してキャッシュする必要があります。

ping タイムアウトによる OC4J インスタンスの終了

特定の状況下では、Oracle Application Server の OPMN プロセス監視ソフトウェアが OC4J プロセスとの接続を失う場合があります。この状態は、OC4J インスタンスが適切に機能していることを検証するために OPMN と OC4J で使用するハートビート・プロトコルで、予期しない遅延が発生したことが原因の可能性があります。

この問題が散発的に発生する場合は、後述する指示に従って、ping タイムアウト・パラメータの値を増やしてください。

ただし、リソースが常に不足しているためにこの問題が常に発生する場合は、使用可能なハードウェア・リソースを増やす必要があります。

この問題は、次の状況で発生する可能性があります。

- ホスト・プロセッサがオーバーロードの場合。
- 1 つ以上の計算集中型アプリケーションが OC4J インスタンスで実行されている場合。

- 大量（数百）の EJB を持つアプリケーションがデプロイされている場合。大量のヒープのガベージ・コレクションが原因で、ガベージ・コレクション・フェーズ時に OC4J プロセスのレスポンス速度が低下する場合があります。このような動作は通常の使用では発生しませんが、大量の EJB を持つ大規模アプリケーションを、メモリーに制約がある環境にデプロイすると発生する場合があります。

OPMN と OC4J の間の ping プロトコルの動作は、opmn.xml 構成ファイルで構成できます。

ping プロトコルで指定したタイムアウト時間を OC4J が超過すると、プロセス監視ソフトウェアは、OC4J プロセスがレスポンスを停止したと判断して、その OC4J プロセスを終了します。

このような動作が Oracle Application Server で発生している可能性がある場合は、次の手順に従ってトラブルシューティングを行い対処してください。

1. OC4J インスタンスが原因不明のまま終了する場合は、最初に診断ロギング・レベルを増やして、ping の障害が終了の原因かどうかを判断します。
 - a. OPMN のロギング・レベルを 5 に増やして ping を調べます。
opmn/conf/opmn.xml で、次の行を編集します。

```
log-file path="$ORACLE_HOME/opmn/logs/ipm.log" level="5" ...
```
 - b. デーモンを再ロードします。

```
opmn/bin/opmnctl reload
```
2. opmn/logs/ipm.log で次の行を調べます。

```
Process Ping Failed:OC4J~<instance name>~default_island~1 (opmnid)
```
3. 前述の行は、現行ホストのメモリーと CPU リソースが不十分であるため、現在指定されている ping タイムアウト時間（OC4J のレスポンス速度を判断するために OPMN で使用される）内で操作を実行できない可能性があることを示しています。
次のように設定を変更してください。
 - a. timeout と interval の値を増やします。
例：

```
<ping timeout="60" interval="60"/>
<data id="reverseping-failed-ping-limit" value="5" />
```
 - b. デーモンを再ロードします。

```
opmn/bin/opmnctl reload
```
 - c. 適切な OC4J インスタンスを再起動します。
4. タイムアウトの障害が発生したトップレベル操作を繰り返します。

EJB に関するその他のリリース・ノート

- コンテナ管理の永続性（CMP）を持つ Entity Bean は、読取り専用でない別の Entity Bean とのコンテナ管理の関連性（CMR）がある場合、読取り専用としてマークできません。
- EJB コンテナ以外のアプリケーション・クライアントから EJB を起動すると、その EJB に対する Java Authentication and Authorization Service（JAAS）はサポートされません。ただし、OC4J インスタンス内のサーブレットから EJB をコールする場合、JAAS はサポートされます。
- Bean が複数のラッパーと関連付けられている場合、コンテナは `EJBActivate()` メソッドを複数回コールする場合があります（Bug 3107168）。
- アプリケーションの EJB から別のアプリケーションの EJB にアクセスする場合、`RMIInitialContextFactory` オブジェクトは使用できません。この場合は、2 つのアプリケーション間の親子関係を使用し、デフォルトの初期コンテキスト・ファクトリ・オブジェクトを使用する必要があります（Bug 2812150）。
- JTA 2 フェーズ・コミット（2pc）機能は Oracle Database リリース 9.2 では機能しません。2pc 機能を使用可能にするには、Oracle Database リリース 9.2.0.4 以上を使用してください（Bug 2668460）。
- 現在、`orion-ejb-jar.xml` ファイルに定義する finder 問合せ文字列内では、インライン SQL 問合せがサポートされていません。finder 問合せを変更するときは、次のようなインライン SQL 問合せは使用しないでください。

```
SELECT * FROM
    (SELECT * FROM TEST1) A,
    (SELECT * FROM TEST2) B WHERE A.ID =B.ID
```

OC4J サービスに関するリリース・ノート

この項では、OC4J のサービスに関するリリース・ノートについて説明します。この項のトピックは次のとおりです。

- [Java Object Cache（JOC）に関するリリース・ノート](#)

Java Object Cache（JOC）に関するリリース・ノート

この項では、Java Object Cache（JOC）に関するリリース・ノートを示します。この項のトピックは次のとおりです。

- [JOC 構成で `javacache.xml` を使用](#)

JOC 構成で javacache.xml を使用

OC4J 9.0.4 実装では、JOC 構成で javacache.xml ファイルを使用します。以前のバージョンの JOC では、javacache.properties ファイルを使用して構成を行っていました。

注意： 同じホスト上に 9.0.4 リリースと 9.0.4 以前のリリースをインストールしている場合は、javacache.xml discovery-port 属性と javacache.properties discoveryAddress 属性が同じポートに構成されていないことを確認してください。同じポートに構成されている場合は、いずれかの値を別のポート番号（7000 ～ 7099）に手動で変更する必要があります。

DataDirect JDBC ドライバに関するリリース・ノート

この項では、DataDirect JDBC ドライバに関するリリース・ノートを説明します。

詳細は、次のマニュアルを参照してください

- 『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』
- 『DataDirect Connect for JDBC User's Guide and Reference』

DataDirect JDBC ドライバ使用時の考慮事項

Oracle Application Server にはカスタマイズ済の DataDirect JDBC ドライバが付属していますが、これは Oracle 以外のデータベースに接続するためのものです。この DataDirect JDBC ドライバは、Oracle Application Server の外部では使用しないでください。

この項では、カスタマイズ済の DataDirect JDBC ドライバと標準のドライバとの重要な相違点について説明します。

- カスタマイズ済の DataDirect JDBC ドライバの JAR ファイル名には、YM という接頭辞が付いています。Oracle Application Server とともに配布される DataDirect JDBC ドライバの JAR ファイルは、次のとおりです。

```
YMbase.jar  
YMinformix.jar  
YMsqserver.jar  
YMutil.jar  
YMdb2.jar  
YMsybase.jar
```

- URL サブプロトコルの接頭辞は oracle です。接続するときは、正しいサブプロトコルを使用してください。次に例を示します。

```
jdbc:oracle:db2://server1:1433
```

- ベンダー・メッセージの接頭辞は [oias] です。

- カスタマイズ済の DataDirect JDBC ドライバは、Oracle Application Server の内部で実行されるように構成されています。カスタマイズ済の DataDirect JDBC ドライバを Oracle Application Server の外部で使用しようとする、次の例外が発生します。

```
java.sql.SQLException: [oias] [... JDBC Driver]
```

DataDirect JDBC ドライバのインストール

DataDirect JDBC ドライバは製品メディアには含まれていません。OTN-J (Oracle Technology Network Japan) からダウンロードしてください。

<http://otn.oracle.co.jp/software/index.html>

DataDirect JDBC ドライバを Oracle Application Server または OC4J とともに使用するための設定方法は、『Oracle Application Server Containers for J2EE サービス・ガイド』を参照してください。

ドキュメントの記載内容の誤り

この項では、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の OC4J に関するドキュメントの誤りについて説明します。この項のトピックは次のとおりです。

- [サーブレット開発者ガイドの記載内容の誤り](#)
- [JavaServer Pages 開発者ガイドの記載内容の誤り](#)
- [OC4J ユーザーズ・ガイドの記載内容の誤り](#)

サーブレット開発者ガイドの記載内容の誤り

この項では、『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』の記載内容の誤りについて説明します。

OC4J 9.0.4 の JSP コンテナによる persistence-path フラグのサポート

リリース 9.0.4 の『Oracle Application Server Containers for J2EE サーブレット開発者ガイド』の 6-6 ページにある次の記述は正しくありません。

「注意: OC4J JSP コンテナは persistence-path フラグを現在サポートしていません。このフラグはサーブレット専用です。」

実際は、Oracle Application Server 10g (9.0.4) の JSP コンテナは、このフラグをサポートしています。

JavaServer Pages 開発者ガイドの記載内容の誤り

この項では、『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の記載内容の誤りを説明します。この項のトピックは次のとおりです。

- [mod_oc4j は OC4J プロセスを再起動しない](#)

mod_oc4j は OC4J プロセスを再起動しない

『Oracle Application Server Containers for J2EE JavaServer Pages 開発者ガイド』の「Oracle HTTP Server と mod_oc4j」の項にある次の記述は正しくありません。

「mod_oc4j モジュールは、必要に応じて、OC4J インスタンスを自動的に再起動できます。」

実際は、OC4J プロセスがなんらかの理由で使用不可になったことが検出されると、mod_oc4j ではなく OPMN が自動的に OC4J プロセスを再起動します。

OC4J ユーザーズ・ガイドの記載内容の誤り

この項では、『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の記載内容の誤りについて説明します。この項のトピックは次のとおりです。

- [メトリック・ロード・バランシングのエンドツーエンド・テストの結果](#)

メトリック・ロード・バランシングのエンドツーエンド・テストの結果

『Oracle Application Server Containers for J2EE ユーザーズ・ガイド』の付録 A「追加情報」に次の情報を追加します。「server.xml ファイルの <application-server> 内に含まれる要素」の項には、<metric-collector> 要素に関する次のテキストが含まれている必要があります。

```
<metric-collector>
```

この <metric-collector> 要素は、OC4J が 0 ～ 100 のメトリックを mod_oc4j に送信するように指定します。これによって、mod_oc4j はルーティングを決定して、使用可能な OC4J インスタンスへの受信リクエストのロード・バランシングを実行できます。送信されるメトリックは相対値のみで、0（ゼロ）は OC4J インスタンスが非常にビジーであることを示し、100 は OC4J インスタンスが使用可能である（ビジーではない）ことを示します。mod_oc4j は、メトリック・ロード・バランシング用に構成されている場合、値が大きい OC4J インスタンスに最初にルーティングします。

OC4J から mod_oc4j に送信されたメトリックが使用されるのは、メトリック・ベースのロード・バランシングが mod_oc4j で指定され、OC4J が Oracle Application Server 環境で稼動している場合のみです。

メトリック・ベースのロード・バランシングを mod_oc4j で指定し、server.xml の <metric-collector> 要素を指定しないと、mod_oc4j は OC4J がメトリックを送信すると想定しますが、OC4J はメトリックを送信しません。この場合、mod_oc4j は次の警告メッセージをレポートします。

No run time metrics for oc4j(opmnid=%s) in notification
Oc4jSelectMethod is configured to use run time metrics, please make
sure OC4J side is configured accordingly. Default to 50.

また、この場合、mod_oc4j は、各 OC4J プロセスについてメトリック値 50 を使用して処理を継続します。

同様に、server.xml の <metric-collector> 要素を指定し、メトリックベースのロード・バランシングを mod_oc4j で指定しないと、OC4J はメトリックを送信しますが、mod_oc4j はメトリックを受信するように構成されていません。この場合、mod_oc4j はメトリックを無視し、ロード・バランシング用に構成されたメソッドを使用します。ロード・バランシングのメソッドは、Oc4jSelectMethod で指定します。Oc4jSelectMethod を指定しないと、mod_oc4j はデフォルトの roundrobin を使用します。

<metric-collector> 要素は、classname 属性を取ります。

classname 属性は、サーバー全体のメトリックを収集して計算するインタフェースを定義します。DMS 名詞ベースのメトリック・コレクタを使用する場合は、classname 属性の oracle.oc4j.server.DMSMetricCollector を使用してください。DMSMetricCollector インスタンスでは、いくつかのパラメータを取得します。使用可能なパラメータ値の詳細は、『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイド』を参照してください。

次に例を示します。

```
<metric-collector classname="oracle.oc4j.server.DMSMetricCollector">
  <init-param>
    <param-name>
      dms-noun
    </param-name>
    <param-value>
      /oc4j/default/WEBs/processRequest.time
    </param-value>
  </init-param>
  <init-param>
    <param-name>
      history-proportion
    </param-name>
    <param-value>
      0.2
    </param-value>
  </init-param>
  <init-param>
    <param-name>
      debug
    </param-name>
    <param-value>
      false
    </param-value>
  </init-param>
</metric-collector>
```

```
</init-param>  
</metric-collector>
```

<metric-collector> 要素の使用方法および mod_oc4j でのメトリックベースのロード・
バランシングの使用方法の詳細は、『Oracle Application Server 10g パフォーマンス・ガイ
ド』を参照してください。

